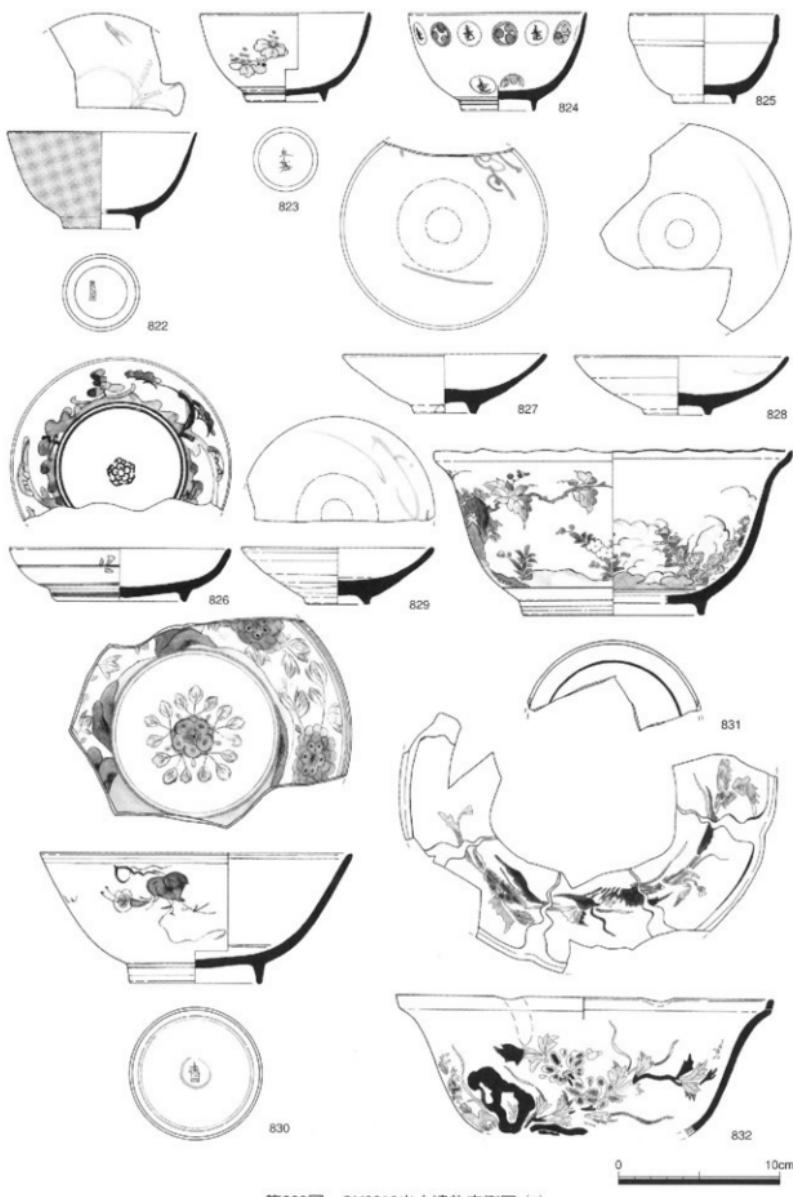


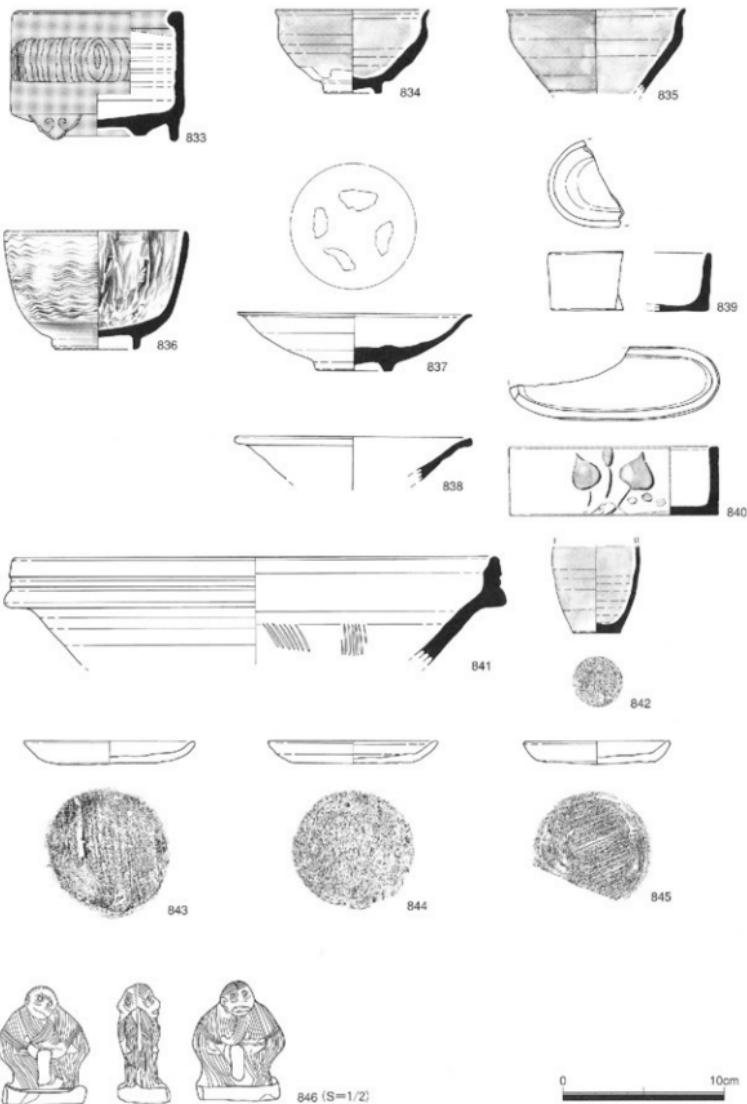
第238図 SX3016実測図

口縁端部には口錫装飾が施されている。ヨーロッパにも輸出されたもので、1670年から90年にかけてのものである。832は肥前有田の色絵磁器鉢である。漆継ぎ痕があり、内面は芥子、外面は太鼓石に牡丹が赤、緑、紫、金色等で描かれている。同じものが伝世品でヨーロッパにあり超高级品でめずらしい。1660年から80年のものである。833は肥前系の青磁の香炉である。半筒形の本体に輪高台、三足貼付で、外面には型押により雲気が陰刻されている。834は瀬戸美濃系の陶器製天目茶碗である。削り出し高台で、高台と高台周辺を残し黒褐色の鉄釉がかけられている。835は内外面全体に黒褐色の鉄釉がかけられた瀬戸美濃系の陶器製天目茶碗である。836は肥前系の陶器碗である。外面は白化粧土で撚目文様が描かれ、内面は流し刷毛目になっている。837は肥前系の壠反りの陶器皿である。内面見込部には砂目の目痕が4カ所残され、高台疊付部分にも砂が付着している。838は肥前系の陶器皿である。灰釉がか

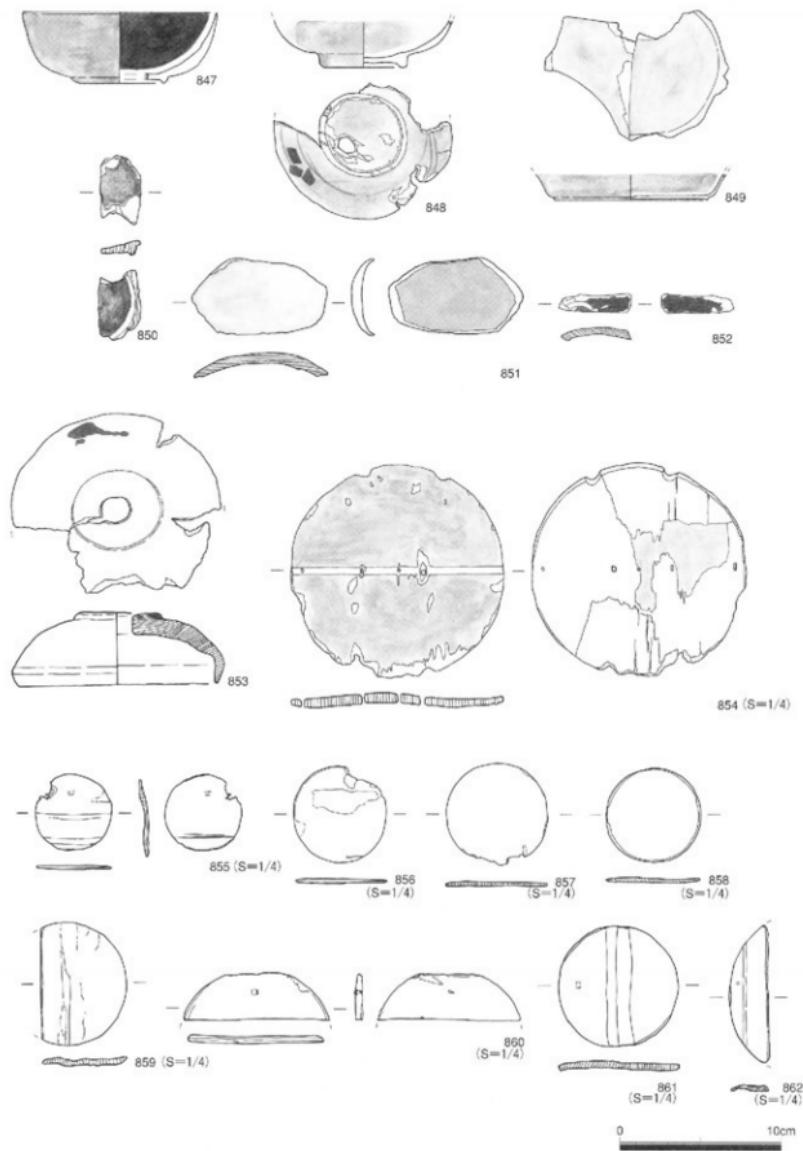
けられた溝縁皿で、17C 初頭のものと思われる。839は内外面ともに施釉された瀬戸美濃系の陶器製盤型である。840は外面に花の蒼が鉄絵により描かれた瀬戸美濃系の陶器製盤型である。841は備前陶器製描鉢である。塗土をして堅く焼き締められ、内面には7条1単位の描目がつけられている。16Cのものである。842は瀬戸美濃系の陶器製肩付き茶入れである。底部外面を残し鉄軸がかけられている。底部には回転糸切り痕がみられる。843は底部の切り離しに回転糸切り技法が使用された土師質の皿である。844は口径102mmを測る土師質の灯明皿である。底部は回転糸切り後ナデの痕跡が残されている。口縁と内面には煤が付着している。845は口径88mmを測る土師質の皿である。底部は回転糸切りの後にナデの痕跡が残されている。846は猿をかたどった土製の人形である。猿が2匹で相撲を取っている図が製作り成形で製作されている。全面に雲母が付着している。847は木製の漆椀である。外面には黒漆、内面には赤漆が塗られている。848は木製の漆椀である。外面には赤漆が塗られ、外面には黒漆により装飾が施されている。849は全面に黒漆が塗られた木製品である。850は木製の漆椀の底部である。外面には茶漆が、内面には赤漆が塗られている。851は外面に黒漆が塗られた木製の漆椀である。852は内外面に赤漆が塗られた木製の漆椀である。外面には黒漆により文が描かれている。853は木製の漆椀の蓋である。外面には赤漆の痕があり、高台内には中央部に穿孔がある。854は木製の曲物の蓋である。全面に黒漆が塗られ、収手が付けられていた痕跡が上面に見える。855は木製の曲物の蓋又は底板である。長径63mmを測り、木皮による結い痕がある。856・857は木製の曲物の蓋又は底板である。858・859は木製の曲物の底板である。860は木製の曲物の蓋、又は底板である。木皮による結い痕がある。861は木製の曲物の底板である。留具が1カ所に見える。862は木製の加工木片で、容器の部品と思われる。釘穴が1カ所に見える。863は木製の曲物の底板である。金具や釘穴が見える。864は木製の曲物の蓋である。表面には穿孔が2カ所に見える。865は木製の曲物の底板と思われる。866は木製の容器蓋である。867は木製の曲物の底板と思われる。長径は116.5mmを測る。868は木製の曲物の底板である。869は木製の曲物の底板である。側面には接ぎ合せの埋め釘穴が2カ所にある。870は木製の曲物の底板である。871は木製の曲物の底である。側面には接ぎ合せの埋め釘穴が2カ所にある。872は木製の曲物の蓋又は底板である。釘穴が數カ所に見える。873は木製の容器蓋、又は底板である。側面には接ぎ合せの埋め釘穴が2カ所にあり、表面中央部にも2カ所の釘穴が見える。874は木製の棒の底板と考えられる。875～887は木製の箸である。888は加工木である。889・890は木製の栓である。891は木製の箸又は栓である。892は木製の柄杓の柄である。893は木製の鏡箱である。表面には漆塗り痕跡が残り裏面には黒漆が塗られ、釘穴が数カ所に見られる。894は木製の加工木片である。表面には黒漆、側面と裏面には茶漆が塗られている。895は木製の折敷である。896は隅に方形の穴が開けられた加工木である。897は木製の器台である。2本の棒？が十字に組み合わされている。898・899は木製の連舟下駄である。900は木製の刎り下駄である。901は木製の丸形の差歎下駄である。902は木製の差歎の陰駄下駄である。903は加工木片である。釘穴が2カ所残されている。904は加工木片である。905は用途不明の加工木片である。906は木製の足打折敷の脚板である。中央に穿孔があり木杭が詰まっている。907は木製の漆製品の部材で、全体に黒漆が塗られている。908は加工木片である。909は竹製の曲物である。910は木製の建築用材である。911は建築用材と思われる。912～914は木簡である。915は銅製の杓子である。916は銅製の灯明具で灯心押えである。917は鉄製の釘である。918は銅錢の寛永通宝(古)である。919はチャート製の火打ち石である。



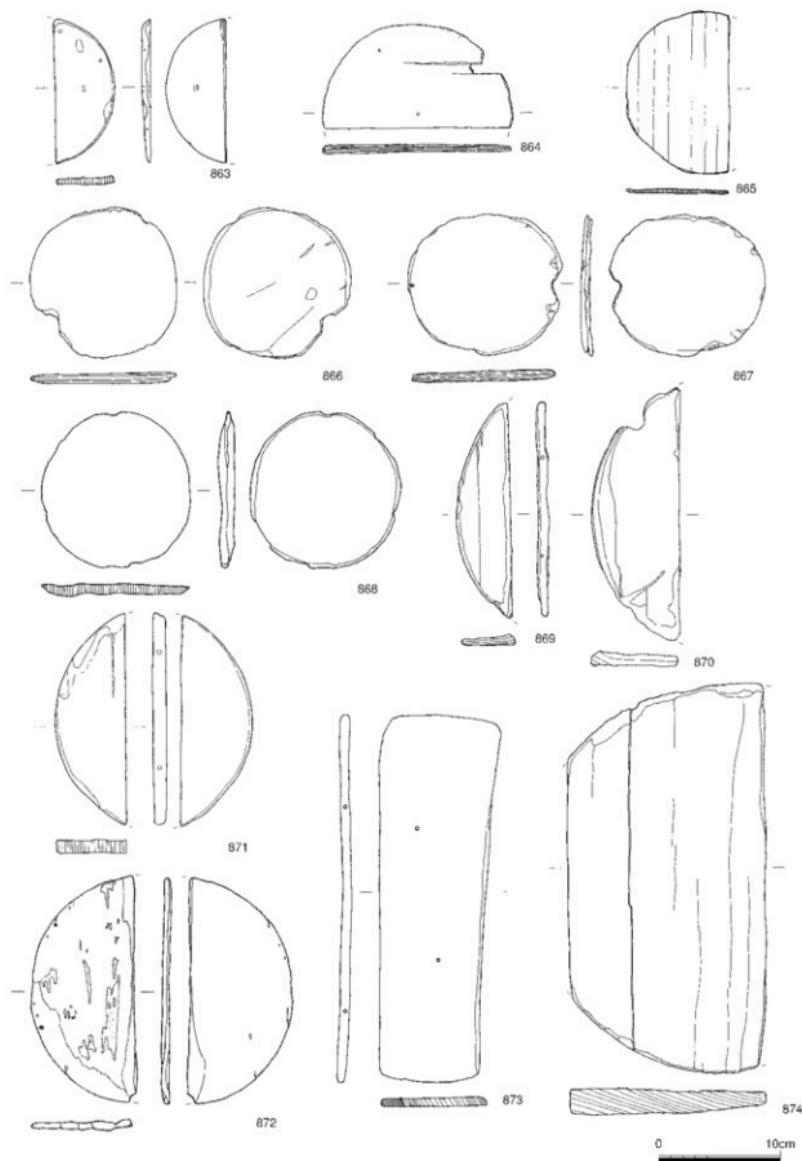
第239図 SX3016出土遺物実測図(1)



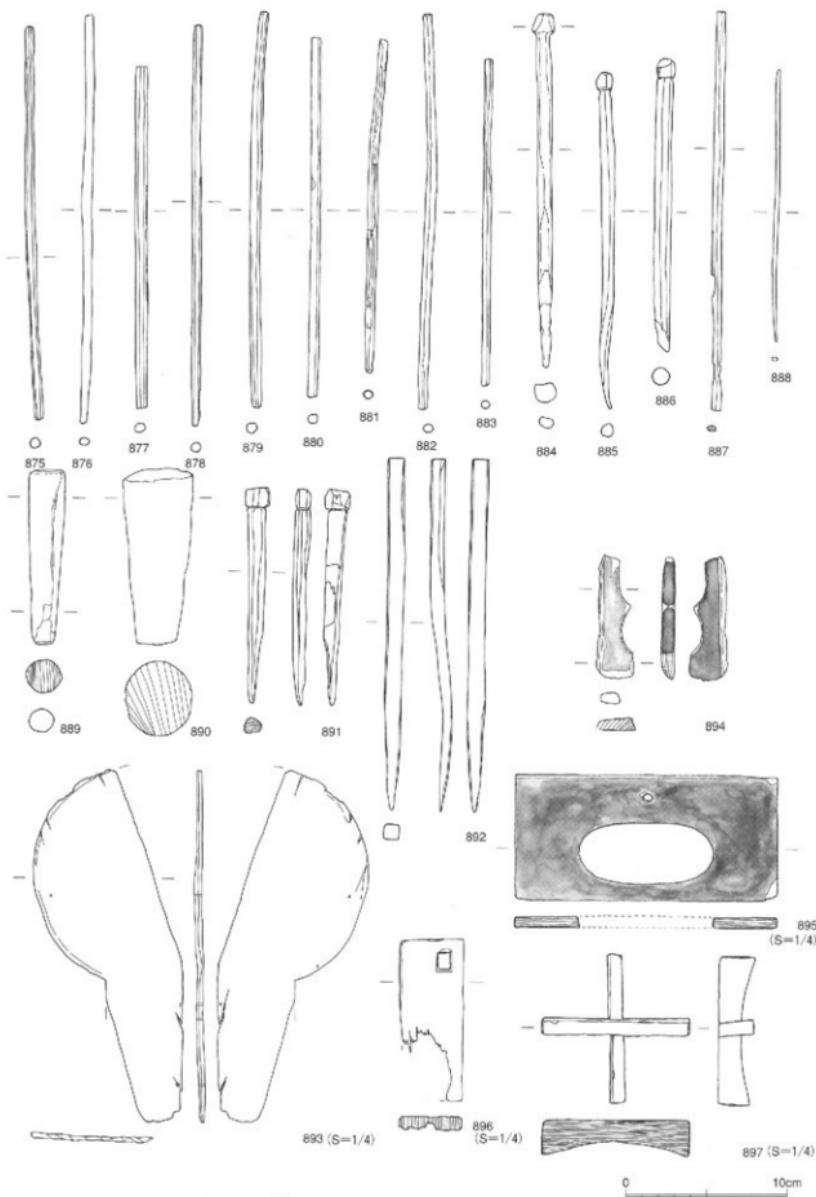
第240図 SX3016出土遺物実測図 (2)



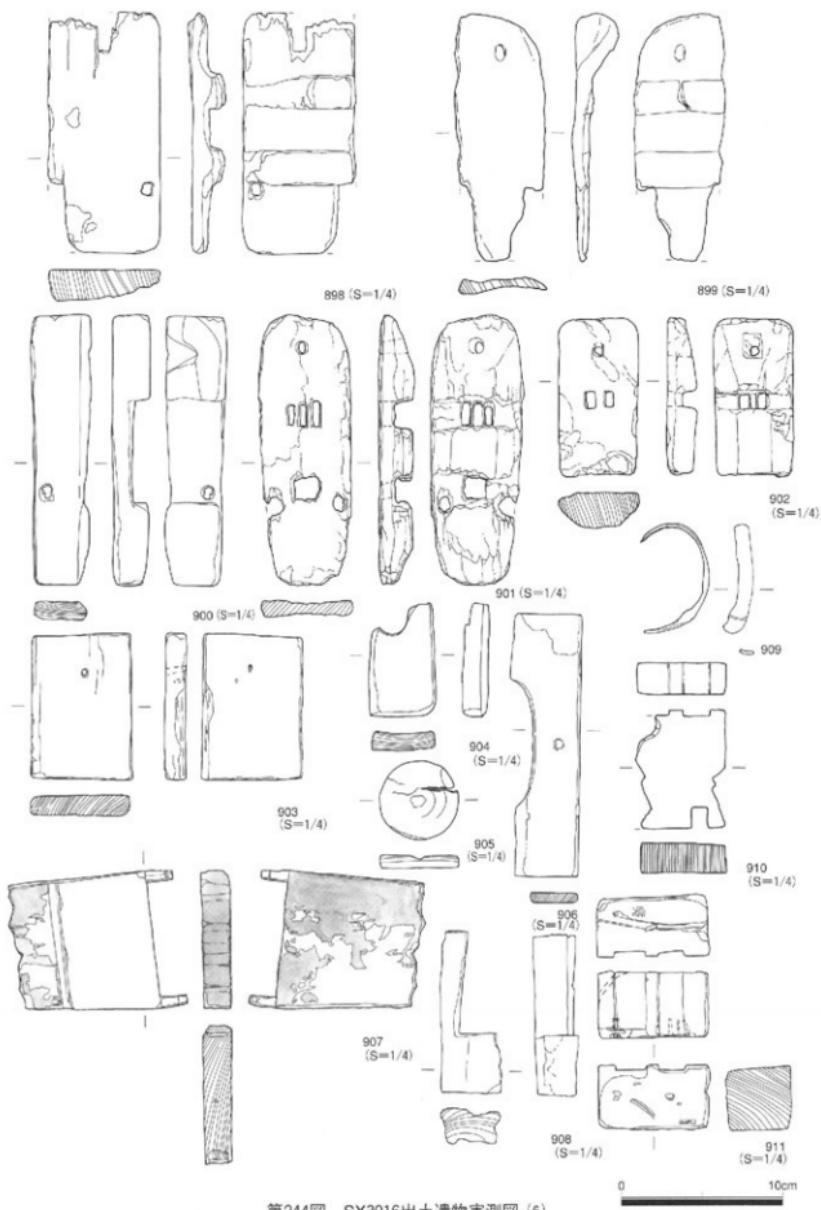
第241図 SX3016出土遺物実測図 (3)



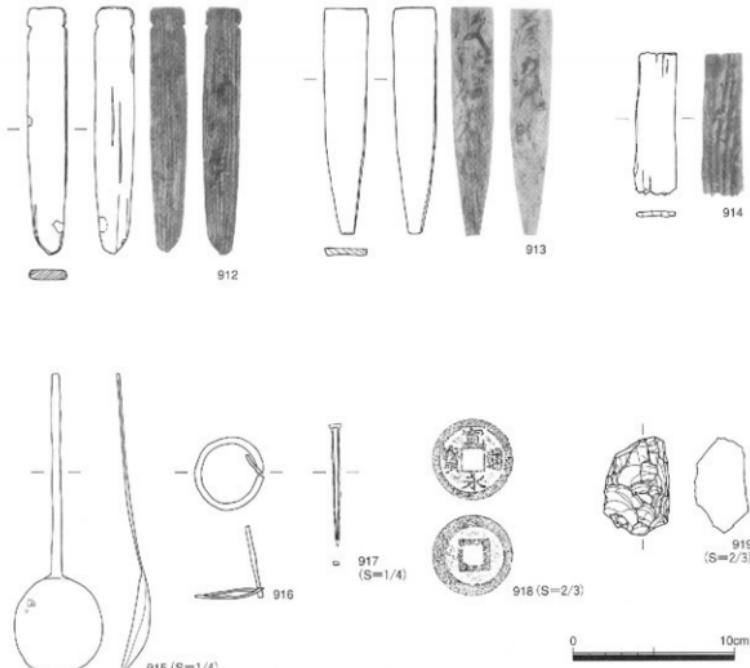
第242図 SX3016出土遺物実測図(4)



第243図 SX3016出土遺物実測図 (5)



第244図 SX3016出土遺物実測図 (6)



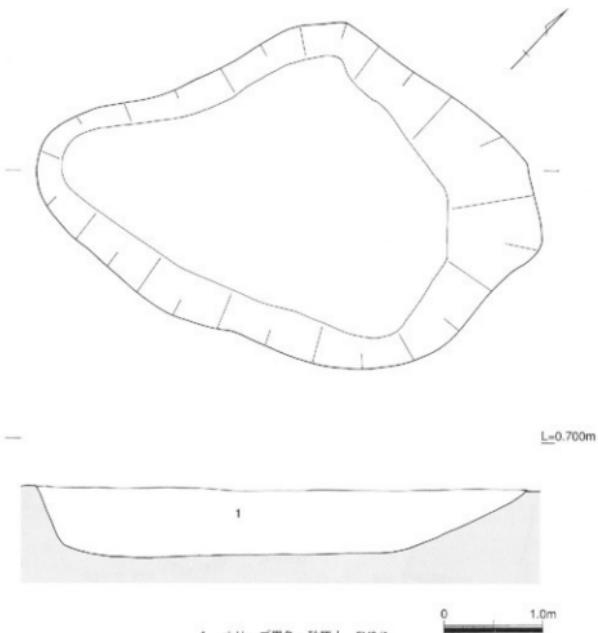
第245図 SX3016出土遺物実測図(7)

不明遺構 17 (SX3017) (第246図)

3区のK-11・12グリッドにまたがって検出された長軸を東西方向にとる長さ約5.1m、幅3.6mの大きさの不整形な形の遺構である。断面が逆台形状に掘り込まれた深さ約0.7mの遺構の埋土はオーリーブ黒色の砂質土1層だけで多量の塊状の炭化物や焼土とともに陶磁器片や木製品が多量に含まれている。

出土遺物 (第247図)

920は肥前系の染付磁器碗である。外面にはコンニャク印判により菊文が押されている。921は肥前系の磁器製从飯器である。外面には染付により蔓草文が描かれている。922は肥前系の陶器皿である。口縁端部は端反り、内面見込部には砂目痕が4カ所残されている。また高台置付部分には重ね焼きの痕跡が認められる。923は肥前系の陶器製溝縁皿である。口縁部外面と内面全体に鉄釉がかけられ、内面見込部には3カ所に砂目痕が残されている。924は口径68mmを測る土師質の皿である。底部には回転糸切り痕が残されている。925は人の顔をかたどった陶器人形である。型作りにより製作され、胎土は淡黄色で透明釉がかけられている。926は瓦質の加工円盤である。胎土は灰色で直径は36mmを測り、瓦の再加工品と思われる。927は土師質の加工円盤である。胎土はにぶい橙色で瓦の再加工品と思われる。928



第246図 SX3017実測図

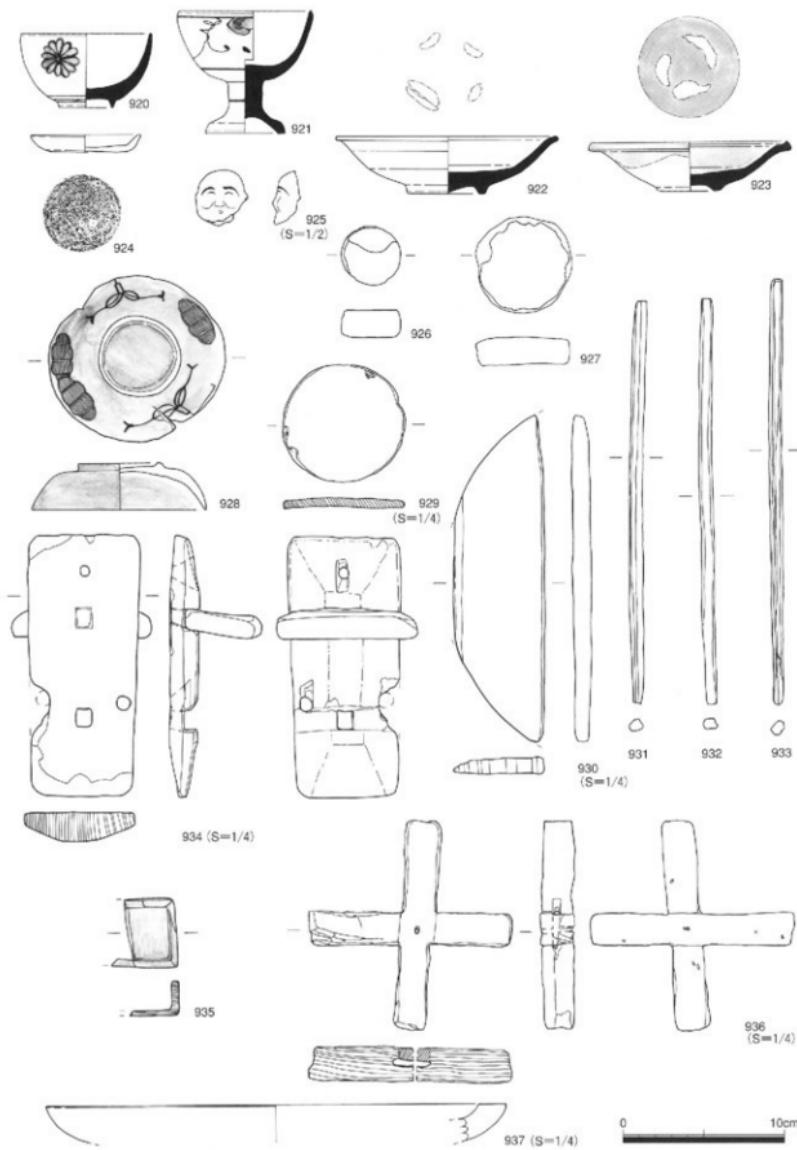
は木製の漆椀蓋である。内外面とも赤漆が塗られ外面には黒漆により宝・米俵が描かれている。929は木製の曲物の蓋又は底板である。930は木製の曲物の蓋又は底板である。931～933は木製の箸である。934は木製の差し歛下駄である。935は木製の箱物である。内外面には黒漆が塗られている。936は用途不明の木製品である。2本が十字に組み合わせり黒漆痕が若干残っている。937は口径374mmを測る石臼である。

不明遺構 SX3019（第248図）

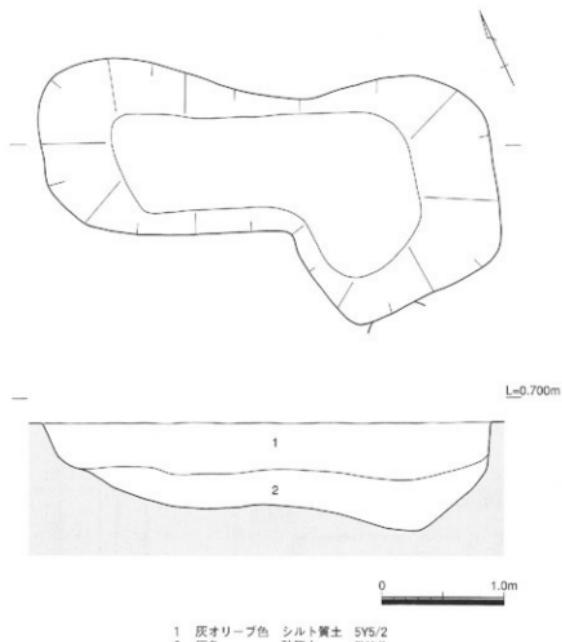
4区のF-18グリッドから検出された長軸を北西方向にとる長さ約3.7mの大きさの遺構である。梢円形と不整円形を繋げたような形の遺構は最も狭い部分でも1.1mほどの幅がある。最も深いところで0.9mほどの深さがある遺構は掘り込みが不規則で底面には凹凸が目立っている。

出土遺物（第249図）

938は口径88mmを測る肥前系の磁器蓋である。全面に灰釉がかけられている。939は肥前系の磁器製紅

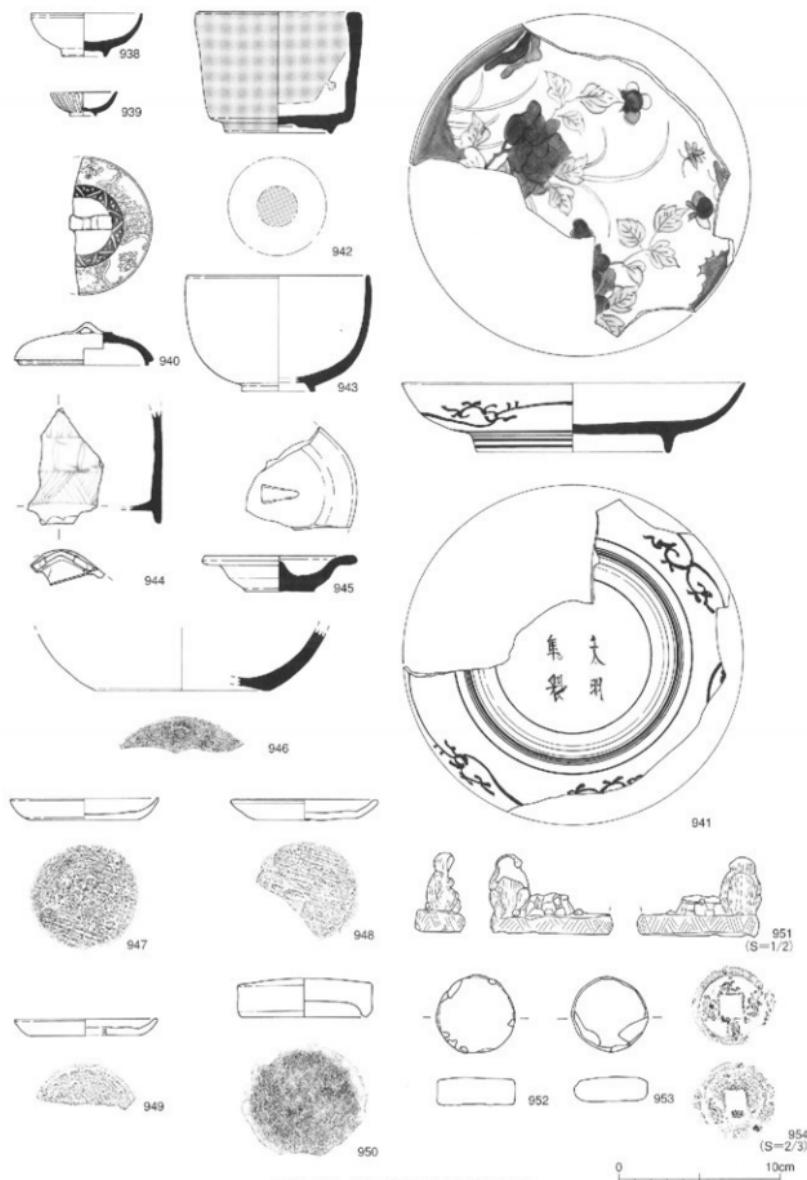


第247図 SX3017出土遺物実測図



第248図 SX3019実測図

皿である。菊花型の型押し成形で製作されている。940は肥前系の磁器の蓋である。頂部にはつまみが貼付けられ、外面には色絵と染付により十字花、花、網目が描かれている。941は肥前系の染付磁器皿である。内面には草花と蝶、外面には唐草文が描かれている。高台外底面には「太明年製」の銘がありハリ支え痕が1点認められる。18C前半のものである。942は肥前系の磁器製の筒形火入れである。外面および内面の口縁部周辺には青磁釉がかけられている。高台外底面は蛇目釉剥ぎされ、釉の剥ぎあとには鉄釉が塗られている。943は京信楽系の陶器碗である。外面には鉄絵が描かれ全面に貫入が入っている。高台は露胎である。944は足付の陶器鉢である。外面には鉄絵で幾何学文が描かれ、高台部分と内面下半部は露胎のまま残されている。底部には体部の途中から延びる足が付けられている。945は瀬戸美濃系の陶器製壺蓋である。頂部は摘みが貼付けられ、底部には回転糸切り痕が残されている。胎土は軟質である。946は備前の陶器壺である。堅く焼き締められ火捺痕が残されている。底部には一重扇形枠内に「寺見」という庵元銘の刻印が捺されている。947は土師質の灯明皿である。口縁部には煤が付着し、底部には回転糸切り痕が残されている。948・949は土師質の皿である。948の底部は回転糸切りされている。950は土師質の焼塩壺の蓋である。内面には布目痕がある。951は土製の猿の人形である。952、953は土師質の加工円盤である。954は元豈通宝である。重量は2.60gを測る。



第249図 SX3019出土遺物実測図

(3) 第2造構面

掘立柱建物跡

掘立柱建物跡1 (SA2001) (第250図)

1区のSD2006の西で検出された梁間2間、桁行3間の礎石建の建物跡である。柱間の間隔は梁間、桁行とも約2mで、基礎には坪地業を行った上に礎石が据えられたものと、礎石を直接地面に置いたものが併用されている。

SP2005出土遺物 (第251図)

955は肥前系の磁器製小皿である。輪轉型打成形で製作され、口縁装飾が施された八角皿である。内面には染付と鉄釉により魚が描かれている。焼継痕もあり高台内には焼継師印「一」が見える。956は内外面に朱泥が塗りされた備前の陶器壺である。体部外面から底部にかけては火拂痕があり、底部外面には窯印が2カ所に認められる。957は陶器製の漏斗である。外面は無釉だが、内面は緑釉と透明釉がかけられている。

掘立柱建物跡2 (SA2002) (第252図)

1区で検出された梁間3間、桁行5間の東西棟の総柱の礎石建の建物跡である。柱間の間隔は梁間間、桁行間とも約2mで、基礎には坪地業を行った上に礎石が据えられたものと、直接礎石を地面に置いただけのものが併用されている。一番東側の梁行列の柱間間に1mごとに礎石が置かれ、それから約3.6m東側には、これに対応する位置に南北方向の礎石が据えられている。おそらく別棟の規模の小さい建物が建てられていたと考えられる。

SP2038出土遺物 (第253図)

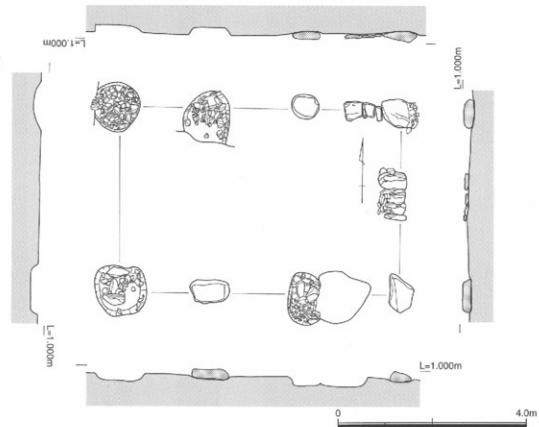
958は底部の切り離しに回転糸切り技法が使用された土師質の灯明皿である。口縁端部には煤が付着している。959は底部に回転糸切り痕が残された土師質の極小皿である。

掘立柱建物跡3 (SA2003) (第254図)

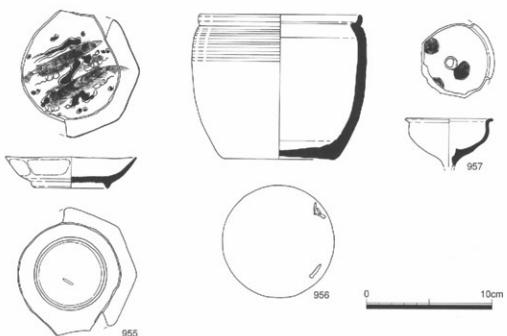
1区の北側から検出された梁間1間、桁行2間の東西棟の掘建柱建物である。柱間の間隔は梁間間が3~3.4m、桁行間が2.2~2.8mと梁間間、桁行間とも不揃いである。柱穴は直径が0.3~0.5mの大きさで、円形または不整円形に掘り込まれている。

掘立柱建物跡4 (SA2004) (第255図)

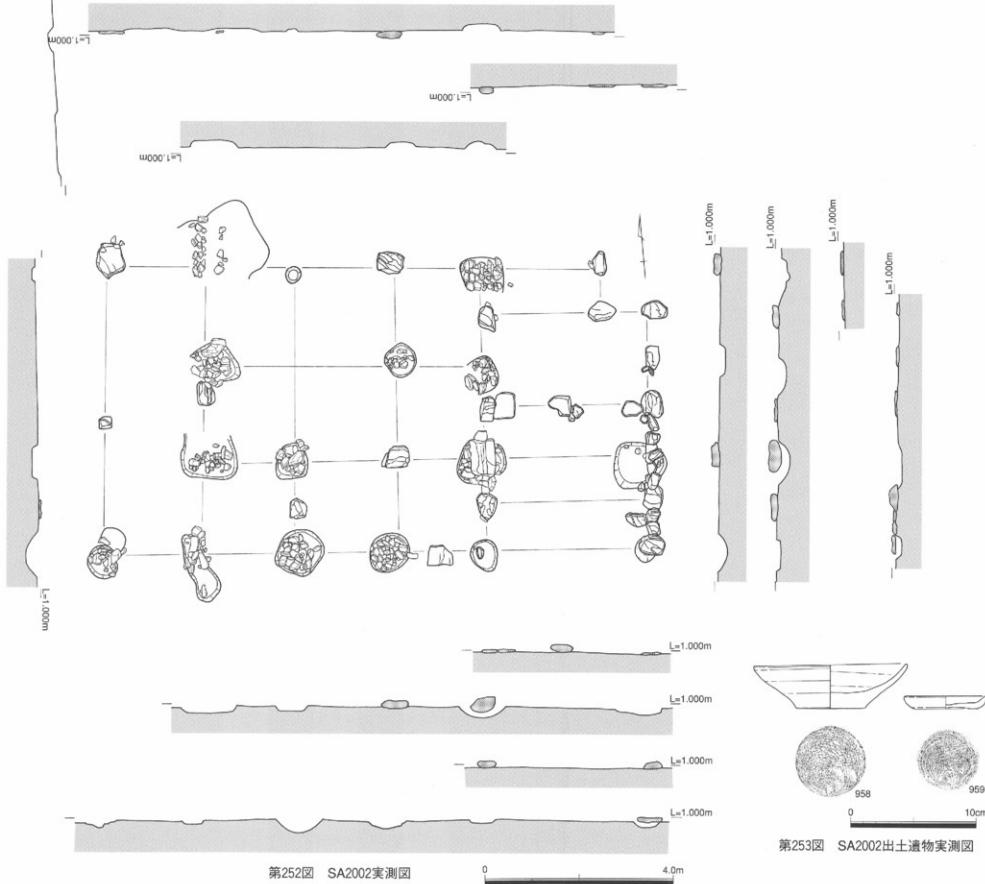
3区の北東部に位置する礎石建の建物跡と考えられる遺構である。途中、1ヶ所石が抜けた部分があるものの、南北方向に約1m間隔で礎石跡と考えられる片岩が5個置かれている。周辺には同じような片岩が多数散らばっているが、柱穴はほとんど検出されていないことから、すべての柱の基礎が礎石で構成された建物であったと考えられる。



第250図 SA2001実測図



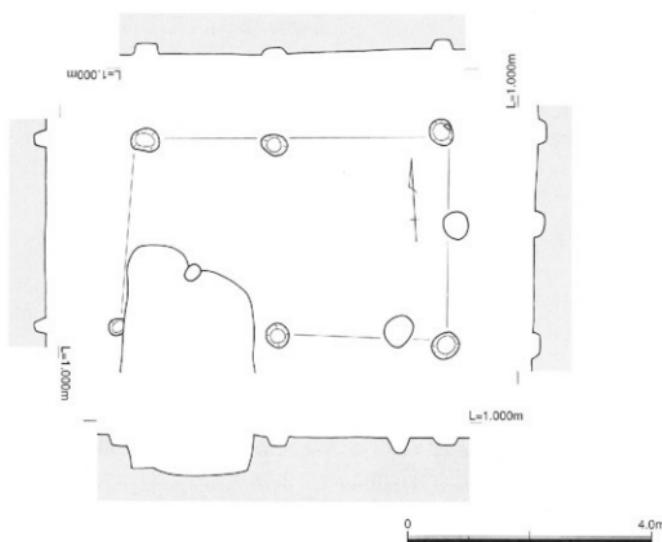
第251図 SA2001出土遺物実測図



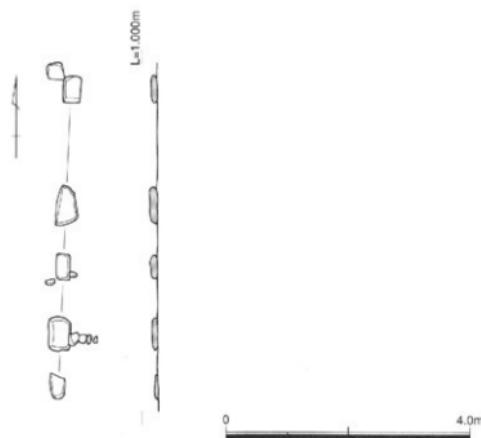
第252図 SA2002実測図



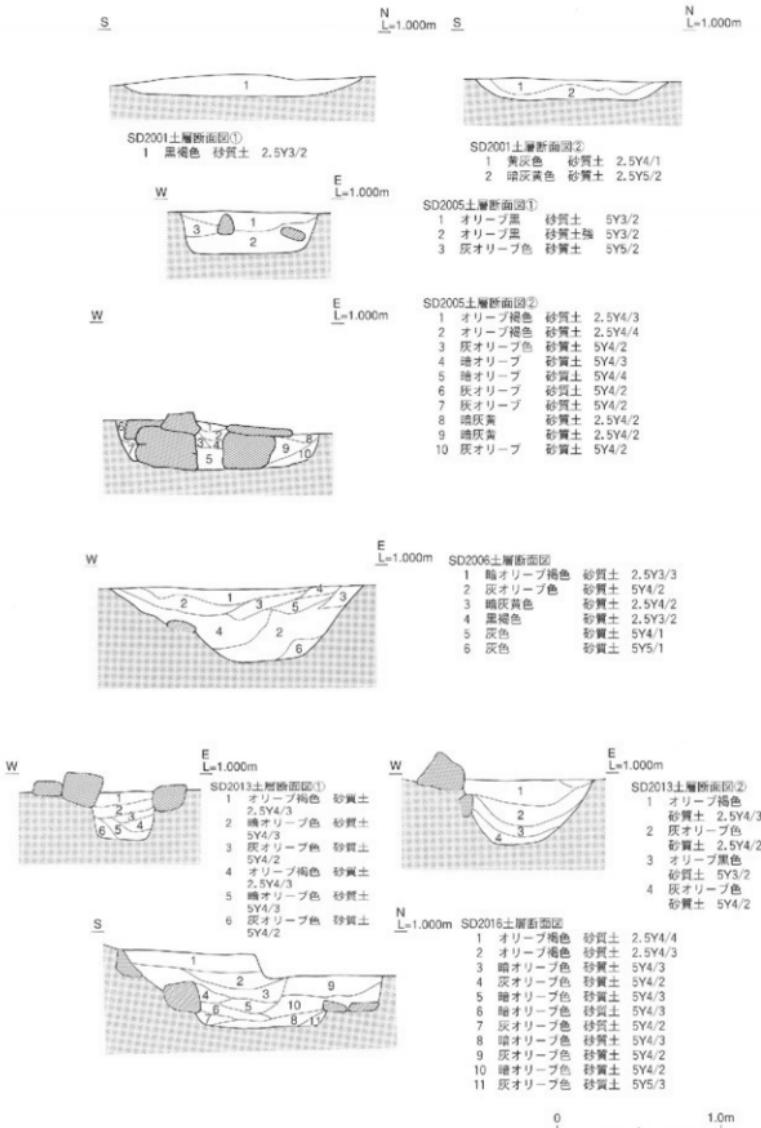
第253図 SA2002出土遺物実測図



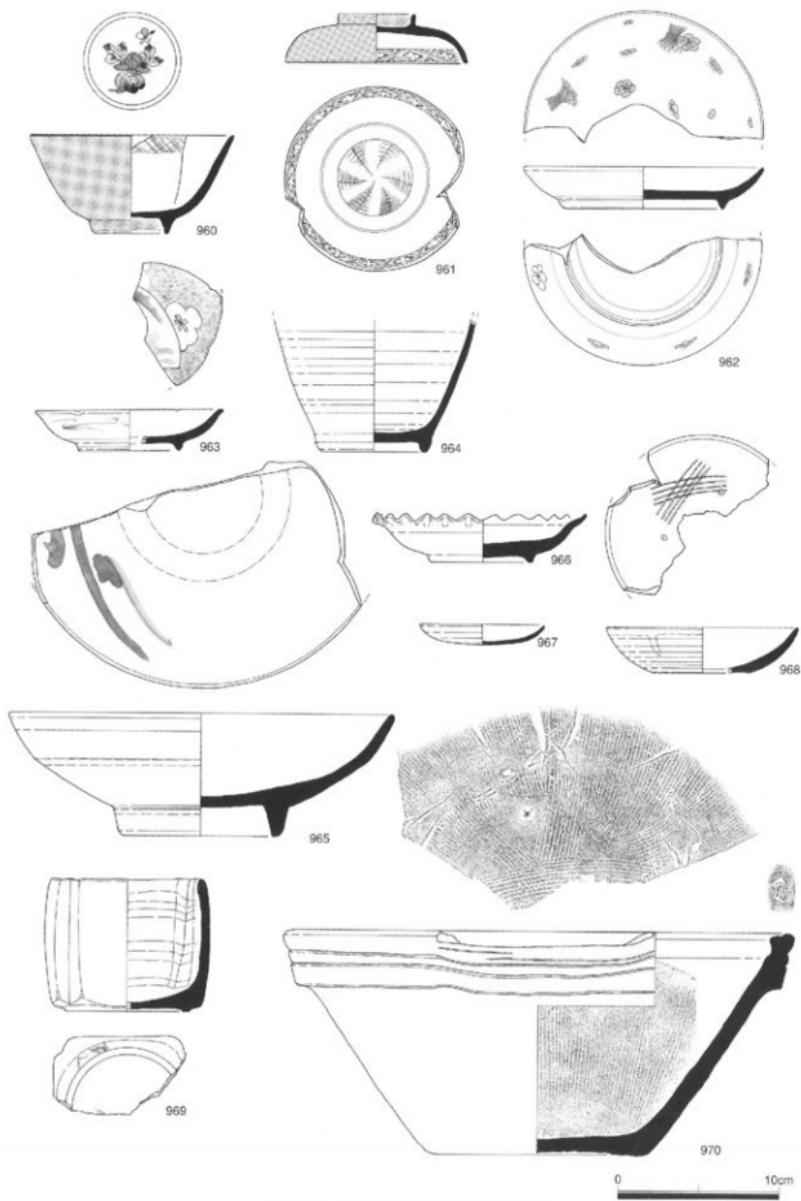
第254図 SA2003実測図



第255図 SA2004実測図



第256図 第2構造面溝断面実測図



第257図 SD2001出土遺物実測図(1)

溝

溝 1 (SD2001) (第256図)

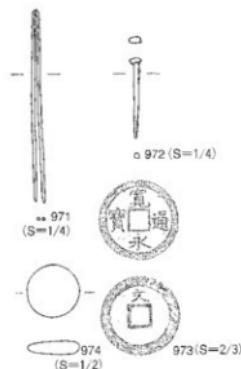
1区から3区にかけての南壁に沿って検出された長さ約23m、最大幅1.2mの東西方向の溝である。断面が皿状に掘り込まれた造構はもっとも深いところでも0.1m前後の深さしかない。造構の西側部分からは礫が検出されているが、出土状況はまばらで投棄されたものと思われる。すぐ北側に位置するSD2002とは溝の方向から、途中で合流していたものと思われる。

出土遺物 (第257・258図)

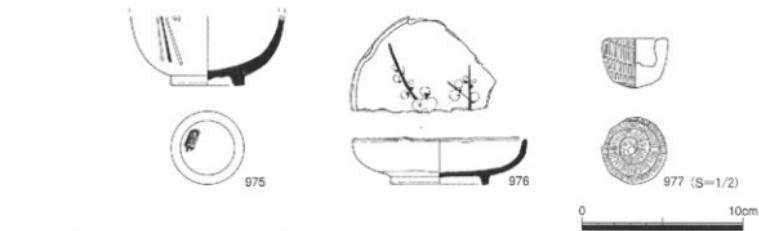
960は瀬戸美濃系の外青磁碗である。口縁端部には口鉢が施され、体部内面には四方櫛文、内面見込部には花が描かれている。961は肥前系の外青磁の蓋である。口縁部内面には四方櫛文、体部の二重圓線内には丸文が描かれている。高台笠付け部分は露胎のまま残されている。962は瀬戸美濃系の染付磁器皿である。外面には梅、内面には梅と芝東が描かれ、高台外底面には図線が引かれている。963は輪花型打成形で製作された肥前系の磁器皿である。外面には乗付で草が、内面には吹墨による梅が描かれている。964は肥前系の白磁壺である。豊付部分は露胎のままである。965は肥前唐津の陶器鉢である。内面には鉄絵が描かれ、見込部には蛇ノ目釉剥ぎ後白泥が塗られている。高台部分は露胎のまま残されている。966は瀬戸美濃系の陶器皿である。橢體成形後、指による押圧で口縁部を規則的に波状に変形させたペベラになっている。内外面とも透明釉がかけられているが高台笠付部分は無釉である。967は硬く焼き締められ塗上が施された備前の陶器製灯明皿である。口縁部には焦が付着している。968は信楽の陶器製灯明皿である。内面には楕円4条が井形に陰刻され全体に灰釉がかけられている。口縁部外面上にも釉がかけられている。969は瀬戸美濃系の陶器製火入れである。橢體成形後、入隅四方形に型打された半筒形で、外面は釉がかけられ上絵付により草花が描かれている。高台部分は露胎のまま残され、高台脇には墨書がある。口縁には敲打痕が見られる。970は堺明石系の陶器製擂鉢である。内面には14条/3.1cm1単位の擂目がつけられ、注口部内には「上長」の刻印がうたれている。971は銅製品の簪である。972は鉄製の釘である。973は銅錢の寛永通宝(新)である。背上には「文」と配している。974は粘板岩を素材にした基石である。

溝 5 (SD2005) (第256図)

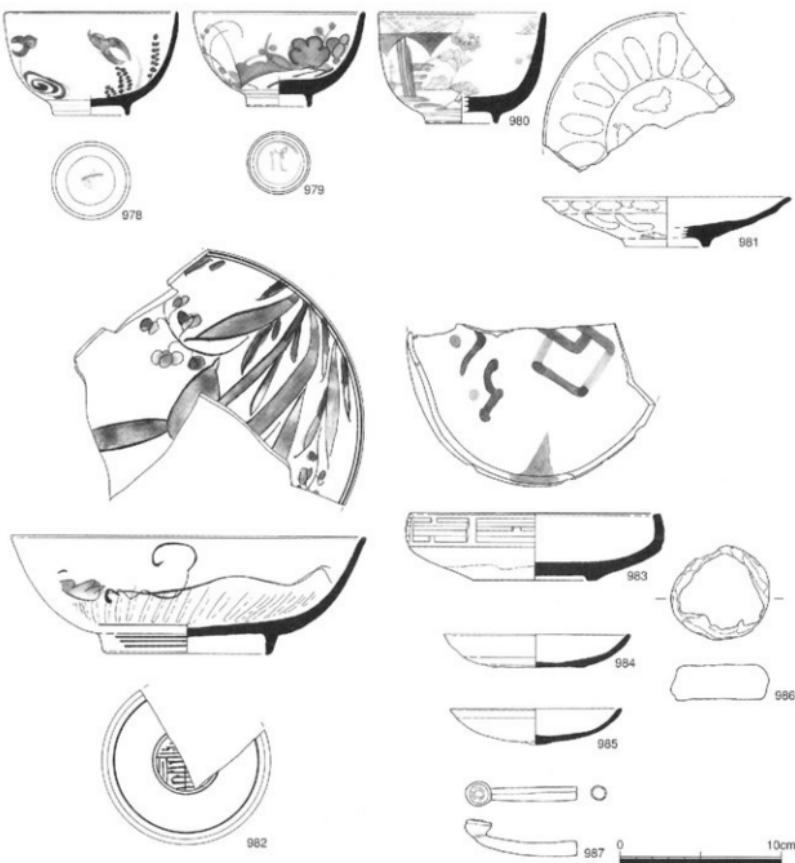
1区の東側から検出された、北から南に向かって流れれる溝である。途中、2ヶ所で分断されているが、造構の総延長は30m以上の長さがある。溝の北側は90°近い角度で東に方向を転じ、わずか1m余り進んだところで途切れていますが、その延長線上で検出された2本の溝、SD2008・2009はこのSD2005の一部であった可能性が高い。溝の北側約10mと南端部分約2mの区間にはところによっては3段に積まれた石積みの個壁が残されている。石積部分の溝の幅は約0.2~0.3mと狭い。溝の北側約2mの地点には建物跡SA2002が位置しているが、SD2005の北辯とSD2008・2009を結ぶ線はこのSA2002の平行の方向にはほぼ並行している。建物跡に対する溝の位置から建物跡周辺の排水を目的に作られた可能性



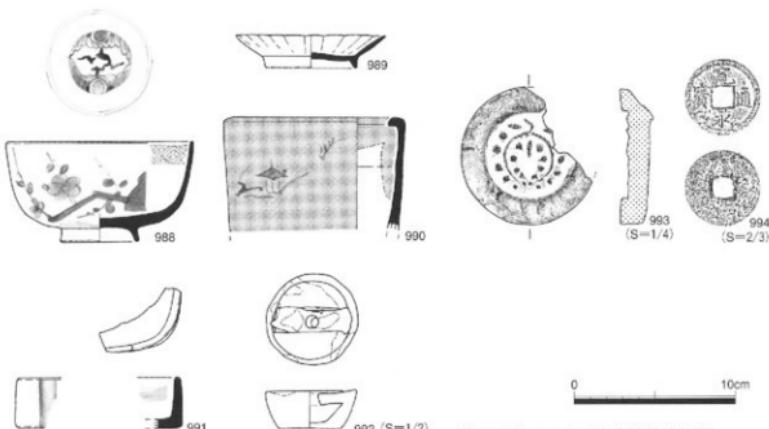
第258図 SD2001出土遺物実測図 (2)



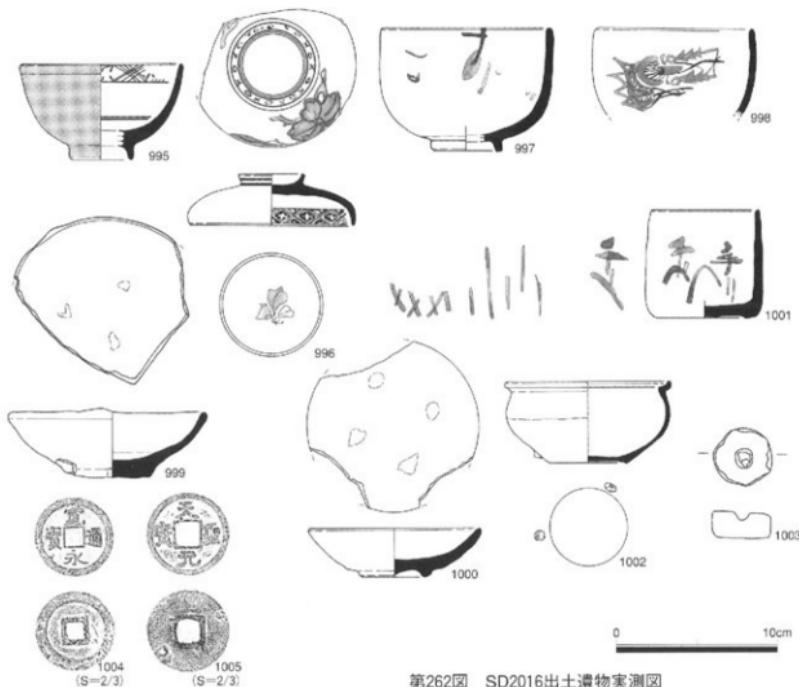
第259図 SD2005出土遺物実測図



第260図 SD2006出土遺物実測図



第261図 SD2013出土遺物実測図



第262図 SD2016出土遺物実測図

が高い遺構と考えられる。

出土遺物（第259図）

975は京信楽系の陶器製注連縄文茶碗である。外面には色絵により注連縄文が描かれ、高台部分を除き全体に灰釉がかけられている。高台外底面には「錦光山」の陰刻が捺されている。976は輪花型打成形で製作された京信楽系の盤形の陶器皿である。内面には鉄絵により梅花が描かれ、底部外面を除き全体に灰釉がかけられている。977は土製のミニチュア不明品である。型作成形で内面は型押しされている。

溝 6（SD2006）（第256図）

1区の西側で第3遺構面の溝 SD3003と一部重なり合うように検出された石積の側壁を持つ幅約20~30cmの南北方向の溝である。遺構の北側は第1遺構面の建物を建設する際に行われた地業によって大量の礫が投入されたことや、遺構内に多量の礫が残された西側の暗渠状の溝 SD2011が途中で合流したような状態になっているため、溝本来の側壁部分の石積が大きく動かされている。このため残された石積の側壁の痕跡から確認できた溝の長さは約21m余りにとどまり、緩やかに蛇行しながら北から南に向かってのびている。北側に位置する SD2013との間には第1遺構面の地業や大規模な攪乱を挟んでいるが溝の方向や石積の側壁を持つ点などから、もともとは同じ溝であった可能性がある。

出土遺物（第260図）

978は瀬戸美濃系の染付磁器碗である。外面には沢渦（おもだか）が描かれ、高台外底面には圓線内に「福」の変形文字が書き込まれている。高台置付部分は露胎である。979は肥前波佐見の染付磁器碗である。くらわんか手で外面には草花が描かれ、高台外底面には圓線内に「大明年製」の銘が書き込まれている。980は瀬戸美濃系の染付磁器碗である。呉器形で外面には四方櫛・風景・星座が描かれている。981は肥前唐津の皿である。全体に灰釉がかけられ、内面見込部と底部外面には砂目痕が見える。982は肥前系の磁器鉢である。腰部には捻花状型押が施され、外面には蔓草・圓線、内面には草花が染付により描かれている。また、高台外底面には二重圓線内に「寿福」の合字が書き込まれている。983は削出高台の瀬戸美濃系の盤形の陶器皿である。外面には八卦が陽刻され、内面には不明の鉄絵が描かれている。高台部分を除き御深片釉がかけられている。984は口径112mmを測る備前系の陶器製灯明皿である。口縁部には煤が付着している。985は口径104mmを測る備前系の陶器製灯明皿である。底部は回転ヘラケズギが施され、口縁部には煤が付着している。986は長径60mmを測る加工円板である。瓦の再加工品である。987は銅製の煙管雁首である。

溝 13（SD2013）（第256図）

1区の溝 SD2006の北側の延長線上で検出された石積の側壁を持つ幅約0.2~0.3mの南北方向の溝である。遺構の南側は大規模な攪乱を受け、北側も東西方向の溝 SD2016によって切られているために、現在残されているのは約12mだけであるが、SD2006のところでも述べたように、もともとは2006と同じ遺構であった可能性が高い。SD2006と2013が同じ遺構だった場合、溝の長さは40m以上になる。また、東西方向の溝 SD2016の北側には、SD2013の延長線上よりやや西側で南北方向の溝の残欠と見られる石組が検出されている。わずかに方向がずれるがこの石組みがSD2013の一部とすると、溝の長さはさらに3m以上のがることになる。溝は2006同様、緩やかに蛇行し、側壁の石積は部分的に大きく石

が抜き取られている。

出土遺物（第261図）

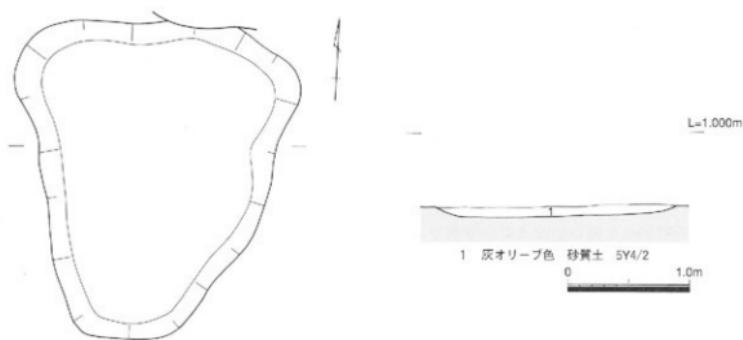
988は肥前系の染付磁器碗である。飯碗形で高台は外反している。体部外面は岩梅樹、内面は四方擗、内面見込部は二重圓線内に内岩梅樹が描かれている。989は白磁の菊花皿である。型打成形で製作されているが、貼付高台でやや赤みを帯び、脣付部分は釉剥ぎされている。中国産であると思われる。990は肥前系の磁器香炉である。青磁染付で外面には山水家屋が描かれている。991は瀬戸美濃系の陶器製の向付である。長石と鉄釉により外面に縱帶線、内面に横波線が描かれる志野織部のものである。992は丸形の上師質の秉燭である。灰釉がかけられ内面には灯心油痕が見える。993は軒丸瓦である。瓦当部には立木氏の紋である藤丸紋が配されている。994は銅の錢貨で（新）寛永通宝である。

溝 16（SD2016）（第256図）

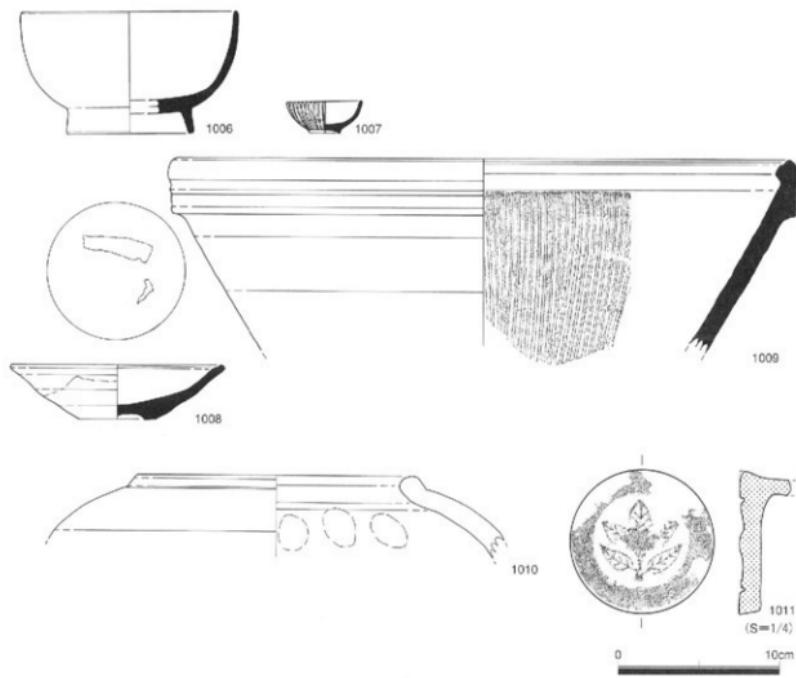
1区の北側から3区にかけて検出された石積の側壁を持つ東西方向の溝である。造構は1区の西壁から南東に向かって約7m進んだところで一旦東に向きを変え、約40m直進したあと再び南東に向かい、最後は2区から3区にまたがって検出された大型の片岩の割石で築かれた南北方向の石列との交点で終わっている。片岩の割石で作られた溝は他の石積の側壁を持つ溝と比較すると幅約0.5mと広く、石は直線的に積み上げられている。このSD2016と南北方向の石列でかこまれた屋敷地の区画内からは、別の東西方向の溝SD2019が検出されている。SD2019と2016の2本の溝に挟まれた狭長で不整形な東西方向の区画は、南北の最も広いところでも6m程の距離しかなく、建物を建てるには不適当なところから2本の溝の間には時期差をもっていると考えられる。時期的にはSD2019の溝から北にのびる石列がSD2016に切られていることや、SD2016の一部が第1造構面になってしまって継続して使用されていることから、SD2019がより古い時期の造構であったと考えられる。SD2016は第1造構面になると溝の西側は埋め立てられたが、東側はSD1013の一部としてそのまま使用され続け、わずかではあるがさらに南に向かって延長されている。

出土遺物（第262図）

995は肥前系の染付磁器碗である。外青磁で内面には四方擗と圓線が描かれている。高台脣付部分は露胎のままである。996は肥前系の染付磁器碗の蓋である。腰張り形で高台も外反している。体部外面は折枝花と○×文、内面は四方擗文、内面見込部の二重圓線内は草花文様が描かれている。997・998は京信楽系の腰張り形の陶器製注連縄茶碗である。997の外面には色絵で注連文が描かれ、高台部分を除き灰釉がかけられている。998の外面には色絵により海老が描かれている。999は肥前唐津の陶器皿である。丸形で、底部は回転糸切り後、指頭によるナデ調整が加えられている。底部外面には2ヶ所、内面見込部に3ヶ所胎土目痕が付着している。底部外面を除き全体に灰釉がかけられている。1000は削出高台を持つ腰張形の肥前系陶器皿である。内面見込部には目痕が4ヶ所見える。底部外面を除き全体に灰釉がかけられている。1001は瀬戸美濃系の陶器製の向付である。四方入隅の筒形で、底面は葵筋底風に削り込まれ、目痕が3ヶ所見える。外面は山水・木賊文が鉄絵によって描かれ、長石釉が内外面全体にかけられている。1002は京信楽系の陶器で行平と思われる。口縁部には皿受けがあり底部には丸形の脚が三足貼付されている。1003は瓦質の加工円板である。表面中央には穿孔が加えられている。1004・1005は銅鏡である。1004は寛永通宝（古）。1005は天慶元宝である。



第263図 SK2001実測図



第264図 SK2001出土遺物実測図

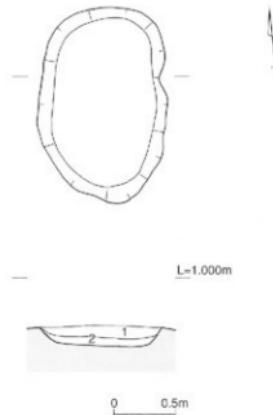
土坑

土坑 1 (土坑 SK2001) (第263図)

1区のB-6・7グリッドで検出された長軸を南北方向にとる長さ約2.6m、幅2mの大きさの形が不整形な遺構である。皿状に掘り込まれた深さ約0.1mの遺構の中には灰オリーブ色の砂質土が堆積している。

出土遺物 (第264図)

1006は口径130mmを測る肥前系の白磁碗である。1007は肥前の磁器製紅皿である。型押しで製作され、外面には菊花形の文様がつけられている。露胎のまま残された底部以外は、白色の釉がかけられている。1008は肥前唐津の陶器製滑縁皿である。底部はクリ底で内面見込み部には砂目痕が認められる。1009は口径384mmを測る堺明石系の陶器製擂鉢である。内面には9条1単位の擂日が残されている。1010は口径170mmを測る土師質の壺である。胎土はにぶい橙色を呈し内面には煤が付着している。1011は瓦当部に丸の中橋の紋が配された軒丸瓦である。



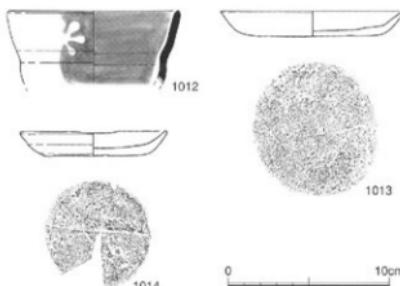
第265図 SK2002実測図

土坑 2 (SK2002) (第265図)

1区のF-G-8グリッドにまたがって検出された長軸を南北方向にとる長さ約1.6m、幅1.0mの大きさの楕円形の土坑である。遺構の掘り込みは最も深いところでも0.2m程度しかないが、埋土中には炭化物や焼土粒に加えて多量の瓦片が含まれていることから、廃棄土坑と考えられる。

出土遺物 (第266図)

1012は肥前唐津の陶器碗である。鉄釉の上に白泥で梅花が描かれている。1013-1014は底部の切り離しに回転糸切り技法が使用された土師質の皿である。



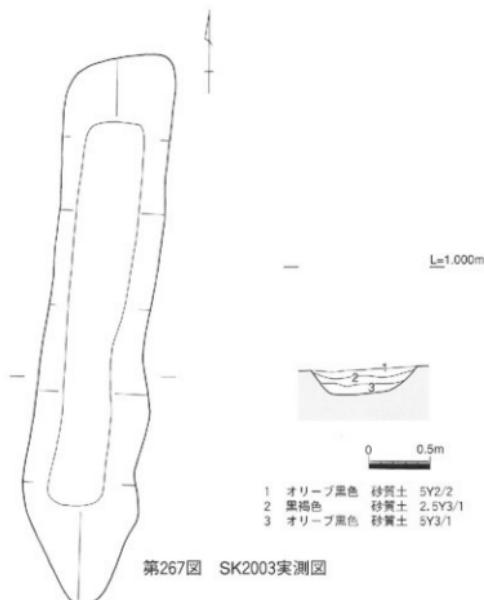
第266図 SK2002出土遺物実測図

土坑 3 (土坑 SK2003) (第267図)

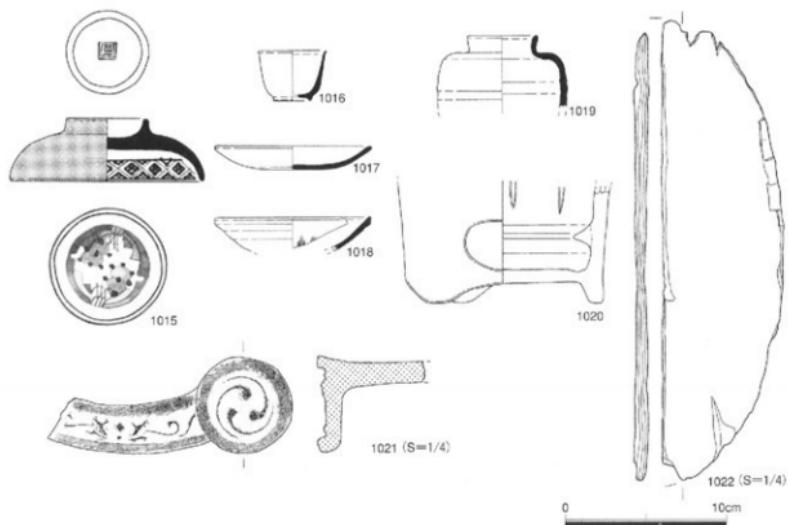
1区のC-3グリッドから検出された主軸を南北方向にとる長さ約4.5m、幅0.9mの大きさの不整形な形をした土坑である。平面の大きさに対して深さは、浅く0.2mしかない。

出土遺物 (第268図)

1015は肥前の外青磁の碗蓋である。口縁部内面には四方櫛文、見込部の二重圓線内には吉祥文がそれぞれ描かれ、高台外底面の二重方形枠内には「簡江」と窯場名が書き込まれている。18C後半から幕末のものである。1016は肥前の磁器製小杯である。器壁は薄く全面に透明釉がかけられている。1017は備



第267図 SK2003実測図



第268図 SK2003出土遺物実測図

前の陶器製灯明皿である。堅く焼き締められており、口縁には煤が付着している。1018はミニチュアの陶器製擂鉢である。口径95mmで堅く焼き締められている。1019は茶壺、又は小壺と思われる陶器壺である。堅く焼き締められており、内面には使用痕がある。1020は土師質の提炉である。1021は丸ノ中巴と均整唐草が配された軒棟瓦である。1022は木製の曲物の蓋である。

土坑 4 (SK2004) (第269図)

1区のII-5グリッドから検出された不整形円形と考えられる遺構である。遺構の東側を大きく削平されているため正確な大きさは不明だが、残された部分は南北方向の長さが1.2m、深さは0.3mほどある。遺構内の埋土には炭化物や焼土粒とともに多量の陶磁器や瓦片、漆喰などが含まれていることから、廃棄土坑と考えられる。

出土遺物 (第270図)

1023は瓦当部に丸ノ中蘿ノ丸の紋が配された軒丸瓦である。

土坑 24 (SK2024) (第271図)

1区のN-7・8グリッドにまたがって検出された長さ約0.7m、幅0.5mの大きさの楕円形の遺構である。深さ約0.3mの遺構の埋土中には、少量の炭化物や焼土粒とともに陶磁器や瓦片が多く含まれていることから廃棄土坑と考えられる。

出土遺物 (第272図)

1024は肥前系の磁器製胴丸形小壺である。型打併用の基苟底で、外面には染付により花唐草が描かれている。底部外面は露胎で「ヨナ」の墨書きが認められる。1025は底部の切り離しに回転糸切り技法が使用された土師質の極小皿である。

土坑 28 (土坑 SK2028) (第273図)

1区のM・N-8グリッドにまたがって検出された長軸を南北方向にとる長さ約2.5m、幅1.0mの大きさの長方形の土坑である。断面が逆台形状に掘り込まれた深さ約0.2mの遺構内には縒まりの強いオリーブ色系統の砂質土が堆積している。

出土遺物 (第274図)

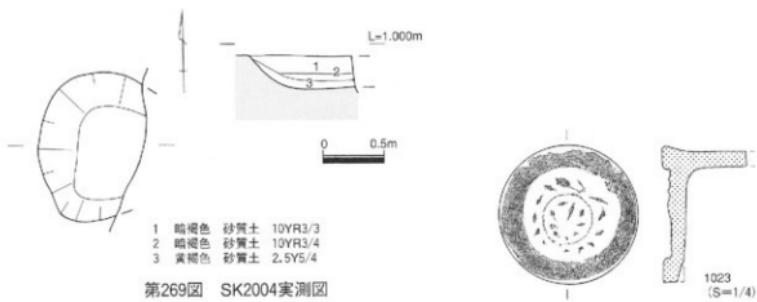
1026は軟質の陶器鉢である。外面には陰刻で花が描かれ、三彩による施釉が見られる。源内焼の植木鉢と考えられ、上部には鉢を吊すための孔が穿孔されている。

土坑 31 (SK2031) (第275図)

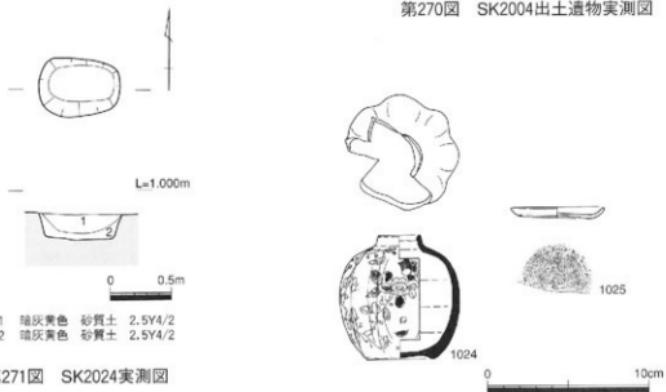
2区のB-10・11グリッドにまたがって検出された東西約1.5m、南北1.8mの大きさの不整形な形の遺構である。浅い皿状に掘り込まれた深さ0.1mの遺構の床面には北壁に沿って、東西約1m、南北0.6m、深さ0.2mの不整形円形の掘り込みが残されている。

出土遺物 (第276図)

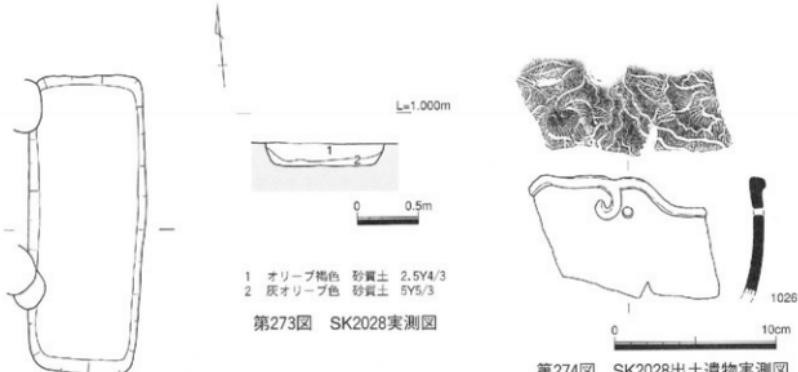
1027は口径94mmを測る肥前波佐見の青磁小皿である。内面見込部は蛇目釉剥ぎが施され、高台部分は露胎である。1028は肥前系の陶器製小皿である。鉄釉がかけられ、内面見込部と高台部分には砂目痕がみられる。1029は肥前系の陶器皿である。内面見込部は蛇目釉剥ぎが施され、高台部分には砂が付着している。1030は鉄釉と白泥による刷毛目装飾が施された肥前唐津の陶器鉢である。1031は備前の陶



第270図 SK2004出土遺物実測図



第272図 SK2024出土遺物実測図



第274図 SK2028出土遺物実測図

器製灯明皿である。口縁部には煤が付着している。1032は全面に塗土が施された備前の陶器製灯明受け皿である。1033は口径326mmを測る備前の擂鉢である。擂目単位は13条／3.6cmが認められる。1034は京信楽系の陶器製腰広茶壺である。1035は口径77.5mmを測る土師器の皿である。底部には回転糸切り痕が認められる。1036は土師質の加工円盤である。

土坑 32 (SK2032) (第277図)

2区のB-10グリッドで検出された、長さ約3.3m、幅2.2mの大きさの不整楕円形の遺構である。皿状に掘り込まれた深さ約0.2mの遺構の中には、炭化物と焼土粒が多く含まれた砂質土が堆積している。

出土遺物 (第278図)

1037は口径73mmを測る肥前系の染付磁器碗である。外面には松葉が描かれている。1038は肥前系の染付磁器皿である。外面は山水家屋、内面は吹墨による山水窓絵がそれぞれ描かれ、高台外底面の二重方形枠内には渦巻の銘が書き込まれている。1039は鉄袖と長石袖による刷毛目装飾が施された肥前系の陶器鉢である。1040は底部の切り離しに回転糸切り技法が使用された土師質の灯明皿である。底部には糸切り痕とともに板目痕が残され口縁部には煤が付着している。1041は底部の切り離しに回転糸切り技法が使用された土師質の皿である。1042は土師質の灯明皿である。口縁部には煤が付着している。1043は銅製の煙管の吸口である。

土坑 41 (SK2041) (第279図)

3区のJ-11グリッドで検出された直径約0.8mの大きさの不整円形の遺構である。深さ約0.3mの遺構の埋土中には粒状や塊状の焼土を含む緻密な砂質土が堆積している。

出土遺物 (第280図)

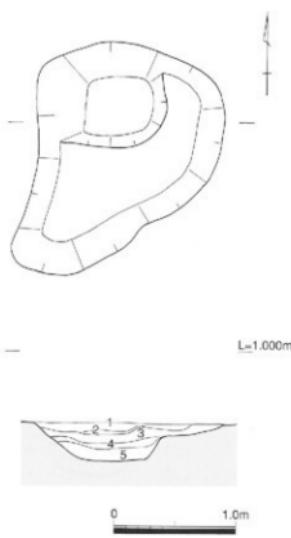
1044は銅鏡の寛永通宝（新）である。

土坑 68 (SK2068) (第281図)

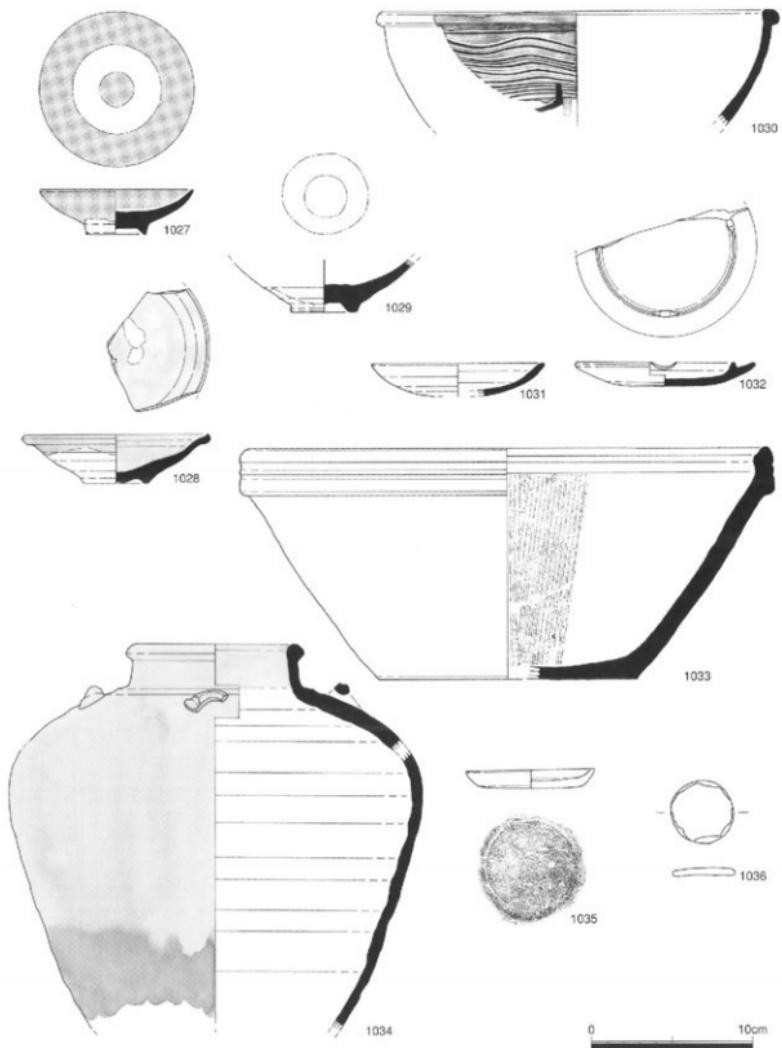
3区のK-15グリッドで検出された一辺約1.3mの大きさの不整方形の遺構である。断面が逆台形状に掘り込まれた深さ0.3mの遺構内には、炭化物や焼土塊とともに陶磁器や瓦片が多量に含まれていることから廃棄土坑と考えられる。

出土遺物 (第282図)

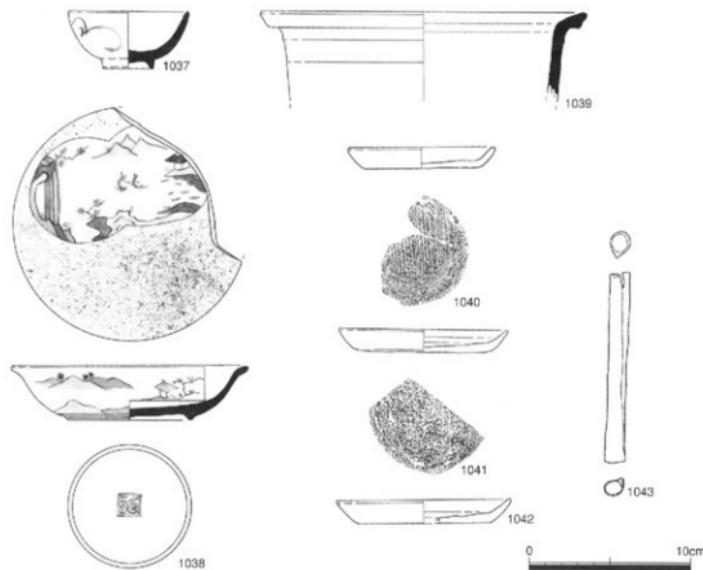
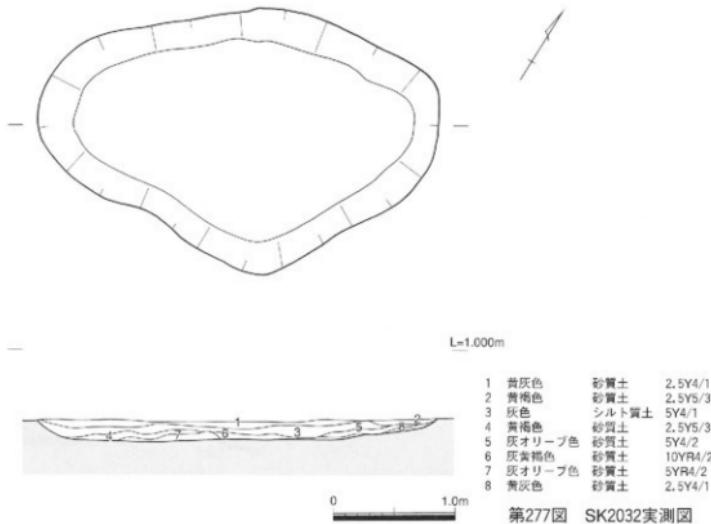
1045は肥前系の染付磁器碗である。体部外面は圓線に丸文と裏銘が描かれ、内面見込部にはコンニャク印判により五弁花文が押されている。1046は内面に松、梅が描かれた肥前波佐見の磁器染付皿である。内面見込部には蛇ノ目釉剥ぎが施されコンニャク印判により五弁花文が押されている。また、高台



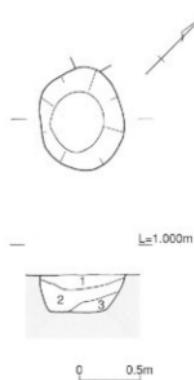
第275図 SK2031実測図



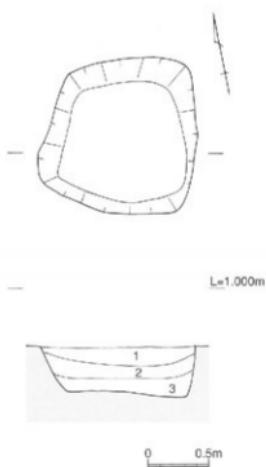
第276図 SK2031出土遺物実測図



第278図 SK2032出土遺物実測図



第279図 SK2041実測図



第280図 SK2041出土遺物実測図



第280図 SK2041出土遺物実測図

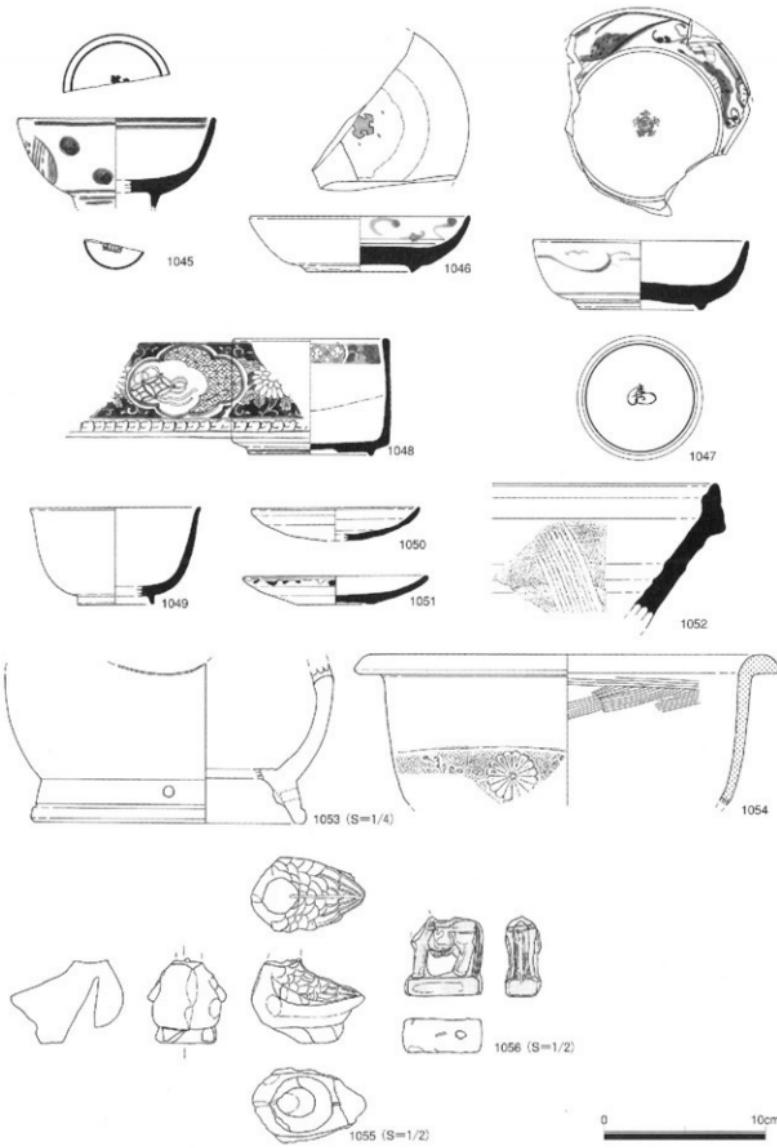
疊付部分の袖も剥ぎ取られている。1047は肥前系の染付磁器皿である。体部外面は唐草と裏銘「寿」の変形字、内面は風景が描かれ、内面見込部にはコンニャク印判により五弁花文が押されている。1048は肥前系の磁器製火入れである。外面には窓絵に七宝と波濤文、内面には四方擗文が染付と上絵付けによって描かれている。体部は内面の下半部が露胎で、蛇ノ目凹型高台である。1049は京信楽系の陶器碗である。高台部分を除き内外面とも灰釉がかけられている。1050は内面に塗上が施された備前の陶器製灯明皿である。1051は京信楽系の陶器製灯明皿である。内面のみ灰釉がかけられている。1052は備前の陶器製擂鉢である。外面には重ね焼きの痕が残され、内面には9条1単位の擗目がつけられている。1053は土師質の丸炉である。1054は外面に型押による菊花と菊唐草の陽刻文が残された瓦質の火鉢である。1055は土製の鳥の人形である。型作り貼合せ成形で製作され、底部は穿孔されている。1056は土製の馬の人形である。型作り貼合せ成形で製作されているが頭部が欠損しており、底部には穿孔がある。

土坑 84 (SK2084) (第283図)

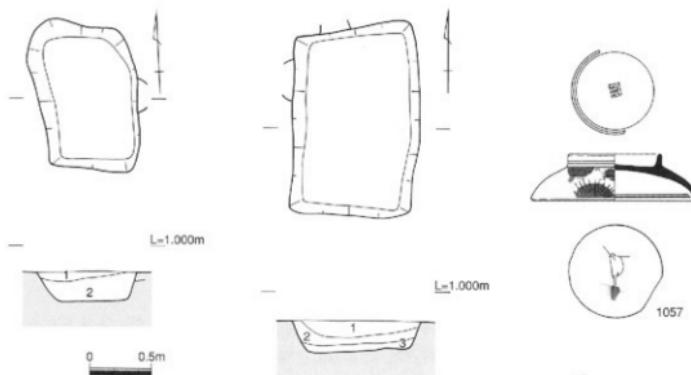
3区のK・L-14グリッドにまたがって検出された長軸を南北方向にとる、長さ1.6m、幅1.1mの大きさの長方形の遺構である。断面が逆台形に掘り込まれた深さ約0.4mの遺構の埋土中には炭化物や焼土粒とともに陶器皿や瓦の破片、礫などが含まれていることから廃棄土坑と考えられる。

出土遺物 (第284図)

1057は肥前系の磁器碗の蓋である。体部外面は進木竹と圓線、内面見込部は圓線と鶯が染付によって描かれ、高台外底面の二重方形枠内には「朱」の変形字が書き込まれている。1058は肥前系の磁器製水滴である。型作り貼合せ成形で製作され、外面には染付と色絵により唐草・折枝・障子が描かれている。1059は全面に柿釉がかけられた陶器の小皿である。



第282図 SK2068出土遺物実測図

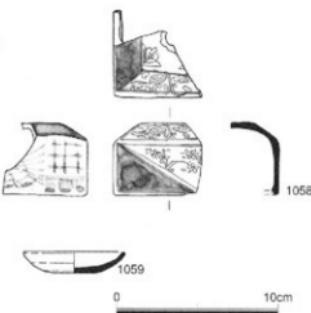


第285図 SK2085実測図



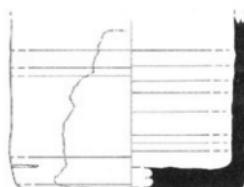
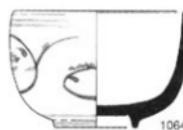
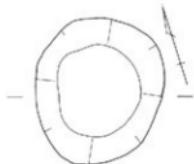
- 1 青オリーブ色 砂質土 5Y4/3
2 黒色 シルト質土 5Y2/1
3 灰オリーブ色 砂質土 5Y4/2

第283図 SK2084実測図

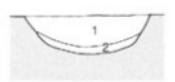


第284図 SK2084出土遺物実測図

第286図 SK2085出土遺物実測図

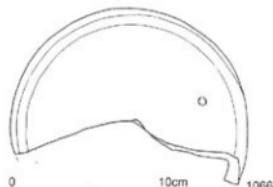


L=1.000m



- 1 明黄褐色 10YR6/3
2 灰オリーブ色 5Y4/2

第287図 SK2102実測図



第288図 SK2102出土遺物実測図

土坑 85 (SK2085) (第285図)

3区のL-15グリッドから検出された長軸を南北方向にとる長さ約1.2m、幅0.8mの大きさの隅丸方形の土坑である。断面が逆台形状に掘り込まれた深さ約0.3mの造構内には埋土には少量の炭化物、焼土粒に混じって陶磁器や瓦の破片が含まれていることから廃棄土坑と考えられる。

出土遺物 (第286図)

1060・1061は備前の陶器製極小皿である。底部の切り離しに回転糸切り技法が使用され内面は塗土されている。1062は底部に回転糸切り痕が残された土師質の皿である。1063は陶器製のミニチュアの蓋である。型押貼付で成形され上面には縁輪がかけられている。

土坑102 (SK2102) (第287図)

3区のM-15グリッドから検出された長軸を南北方向にとる長さ約1.2m、幅1.0mの大きさの不整円形の土坑である。断面がU字状に掘り込まれた深さ約0.3mの造構内には陶磁器や瓦、漆喰などの破片や礫を多く含んだ粘性、締まり共に強いシルト質土が堆積している。遺物の出土状況から廃棄土坑であろう。

出土遺物 (第288図)

1064は外面に麻草文様が描かれた肥前系の腰弧形の陶胎染付碗である。1065は半球形の体部と削り出した高台を持つ京信楽系の陶器碗で、高台部分を除き内外面全体に灰釉がかけられている。1066は瓶、または壺と思われる備前の陶器で外面底部には窯印「〇」が刻印されている。

土坑106 (SK2106) (第289図)

1区のN-10グリッドから検出された長軸を南北方向にとる長さ約1.0m、幅0.8mの大きさの隅丸方形の土坑である。浅い皿状に掘り込まれた深さ約0.1mの造構内には埋土には微量の炭化物や焼土粒とともに陶磁器や瓦の破片が多く含まれていることから廃棄土坑と考えられる。

出土遺物 (第290図)

1067は陶器の涼炉である。無釉で底部には五角形の足が貼付けられている。1068は白釉がかけられた陶器片を再使用した加工円板である。

土坑111 (SK2111) (第291図)

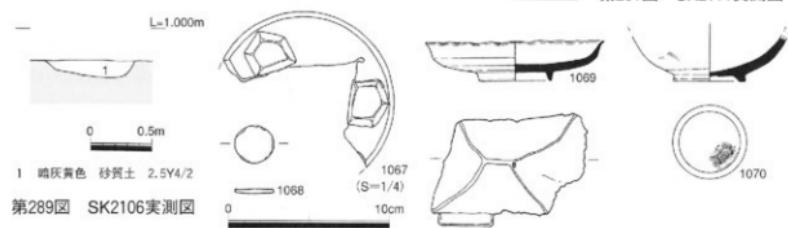
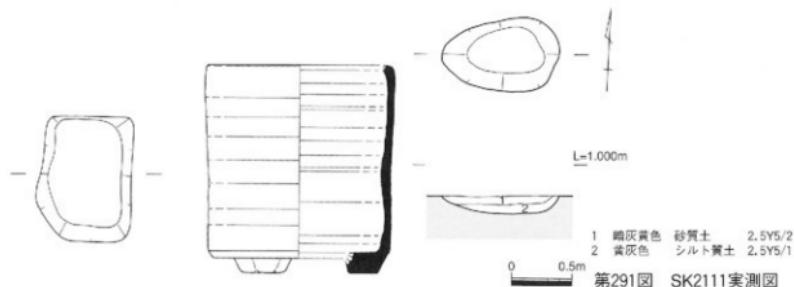
3区のN-11グリッドから検出された長軸を東西方向にとる長さ約1.0m、幅0.6mの大きさの楕円形の土坑である。浅い皿状に掘り込まれた深さ0.2mの造構の埋土には微量の炭化物や焼土粒に混じって陶磁器や金属、瓦、木などの破片が含まれていることから廃棄土坑と考えられる。

出土遺物 (第292図)

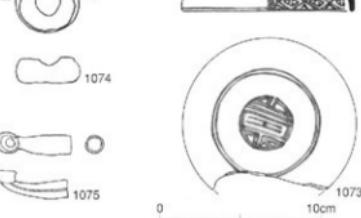
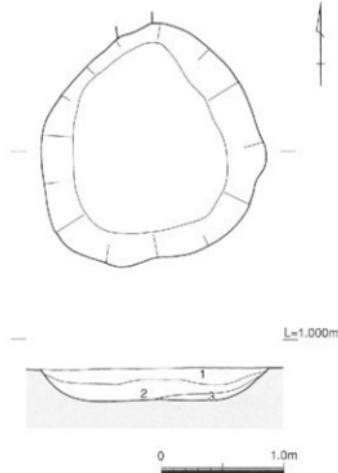
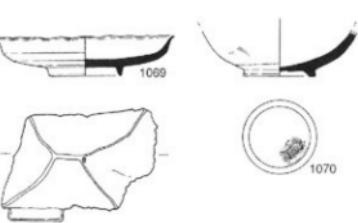
1069は瀬戸美濃系陶器皿である。口径11.0cmを測る。1070は外面に鉄絵が描かれた京信楽系の陶器碗である。高台部は無釉で高台外底面には刻印が見える。1071は製作によって製作された土製の屋根又は山の箱庭道具で、外面の上部には白泥がかけられている。

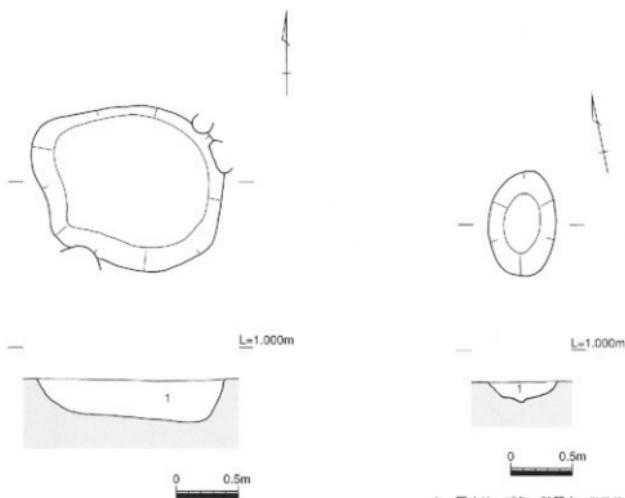
土坑113 (SK2113) (第293図)

2区のD・E-14・15グリッドにまたがって検出された直径約1.9mの大きさの不整円形の土坑である。断面が皿状に掘り込まれた深さ約0.3mの造構内には、締まりが良く粘性の強いシルト質土が堆積している。造構内からは陶磁器や瓦、漆喰などの破片が多く出土していることから廃棄土坑と考えられる。



第290図 SK2106出土遺物実測図



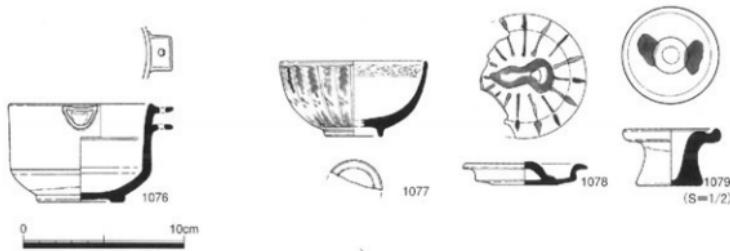


1 灰オリーブ色 砂質土 5Y5/3

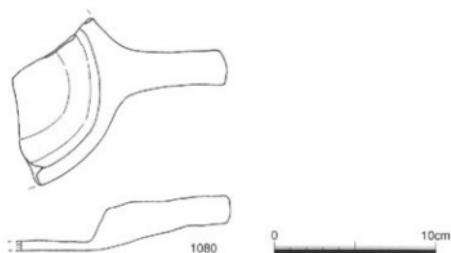
第295図 SK2146実測図

1 灰オリーブ色 砂質土 5Y5/3

第297図 SK2154実測図



第296図 SK2146出土遺物実測図



第298図 SK2154出土遺物実測図

出土遺物（第294図）

1072は外面上に染付により若松が描かれた肥前系の丸形磁器碗である。1073は肥前系の染付磁器蓋である。体部外面上には如意頭、内面には四方棒が描かれ、内面見込部の二重圓線内には「寿」の銘が書き込まれている。1074は口径38mmを測る瓦質の加工円板である。1075は銅製の煙管雁首である。

土坑146（SK2146）（第295図）

4区のG-20グリッドから検出された長軸を東西方向にとる長さ約1.5m、幅1.3mの大きさの不整円形の土坑である。断面がU字状に掘り込まれた深さ0.3mの遺構の埋土中からは陶磁器や瓦の破片が礫とともに多く出土している。

出土遺物（第296図）

1076は京信楽系の陶器製柄杓である。留め具を貼付けるための穿孔があり、削り出しの高台部分以外は全体に灰釉がかけられている。体部外面上には鉄釉により圓線が引かれ、内面見込部には目痕が残されている。

土坑154（SK2154）（第297図）

4区のH-19グリッドから検出された長軸を南北方向にとる長さ約0.9m、幅0.6mの大きさの楕円形の土坑である。断面が逆台形状に掘り込まれた深さ約0.2mの遺構内には微量の小プロック状の炭化物や焼土粒を含む緑色土が堆積している。

出土遺物（第298図）

1077は肥前系の丸形の染付磁器碗である。体部外面上は並草葉と圓線、内面は四方棒文が描かれている。1078は陶器製の土瓶の蓋である。落とし蓋形で、瓢箪形の紐摘みが貼付けられ、外面上には染付と灰・鉄釉により放射状線が描かれている。1079は陶器製のミニチュアの器台である。緑釉と透明釉がかけられている。1080は土師質の十能である。形作りにより製作され半円形をしている。

井戸

井戸 2（SE2002）（第299図）

3区のM-N-11グリッドにまたがって検出された遺構である。直径約1.8m、深さ0.9mの円形の掘り込みの中に、直径約1m、深さ0.5mにわたって井戸枠に使用された木桶の痕跡が残されていた。土層の堆積状況から本来は底板が敷かれていた可能性がある。

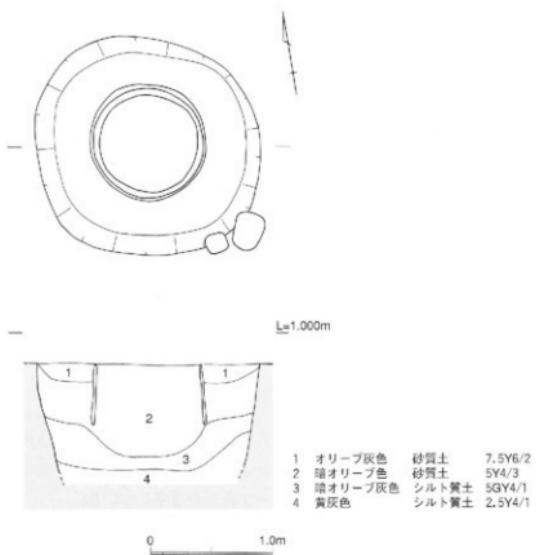
出土遺物（第300図）

1081は内外面全体に染付による唐草が描かれた肥前系の磁器蓋である。高台部分には「○×」文が付けられ、高台外底面には「富貴長春」の銘が書き込まれている。1082は外面上に蛸唐草が染付によって描かれた肥前系の磁器瓶である。1083は膳の脚部と思われる木製品である。

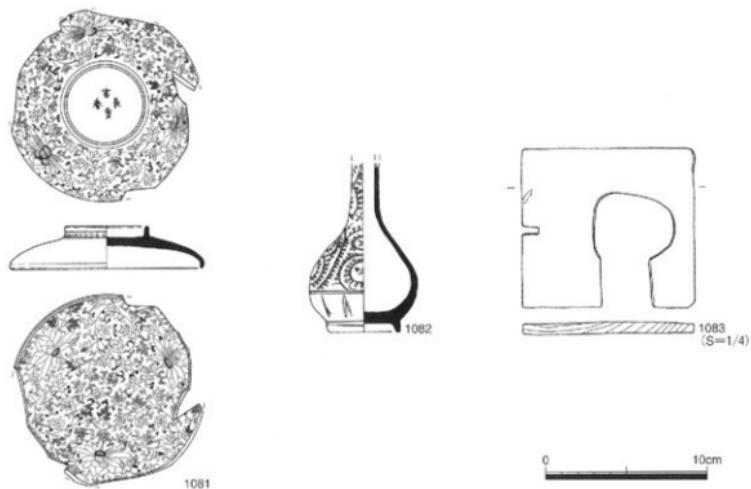
柱穴

柱穴 21（SP2021）

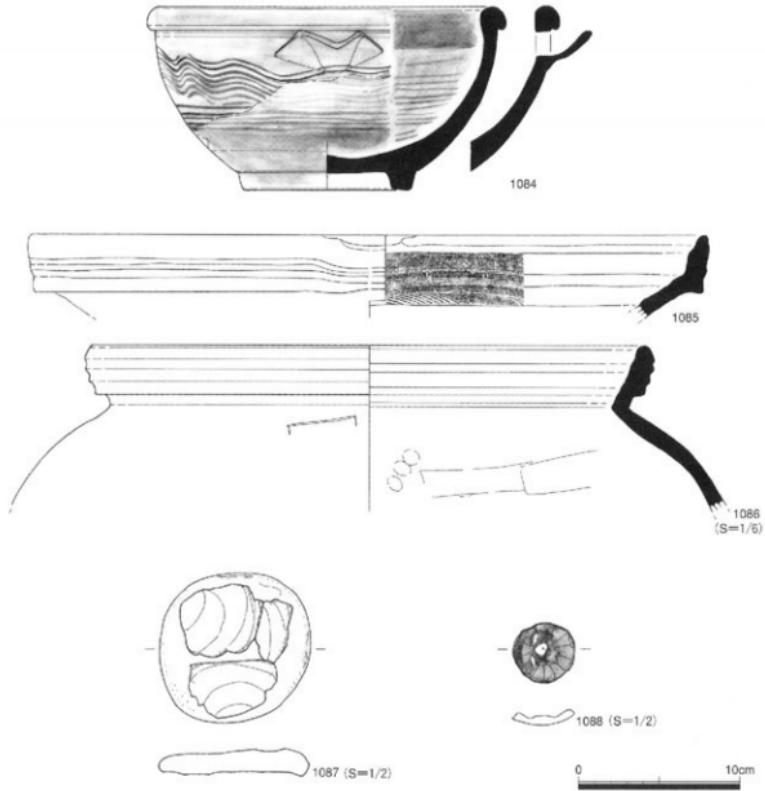
1区のG-7グリッドから検出された直径約0.3m0.2mの不整円形の遺構である。遺構内には焼土粒と炭化物を少量ずつ含んだ暗灰黄色の砂質土が堆積している。



第299図 SE2002実測図



第300図 SE2002出土遺物実測図



第301図 SP 出土遺物実測図

出土遺物（第301図）

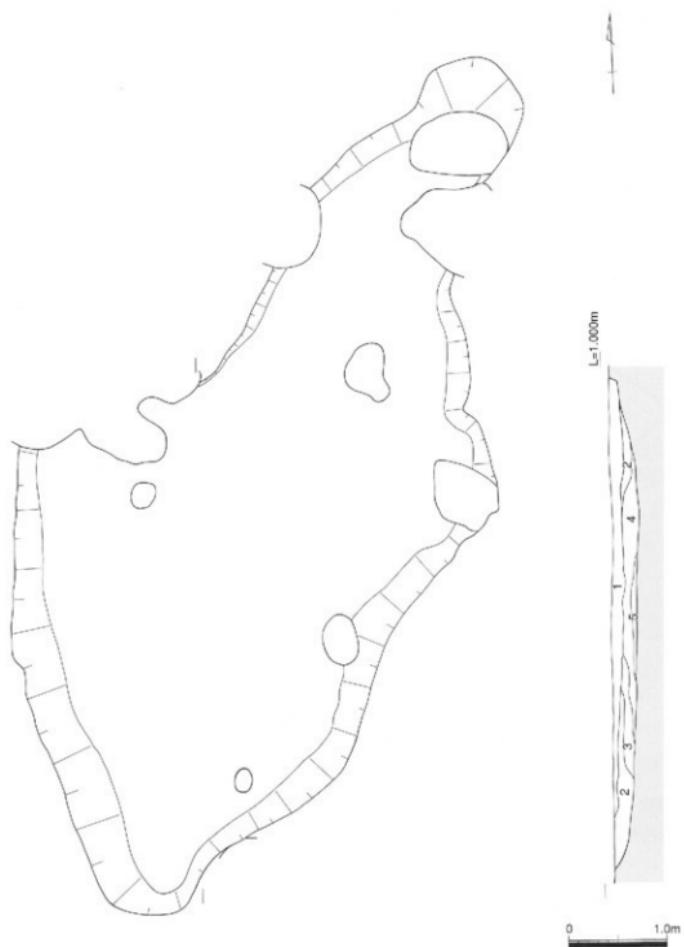
1084は内外面に鉄釉と白泥による刷毛目文様が描かれた肥前系の陶器製片口鉢である。

柱穴 53 (SP2053)

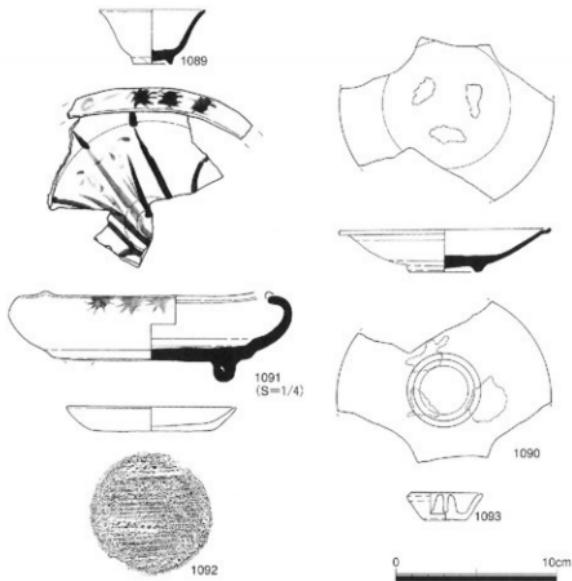
1区のJ・K-6グリッドにまたがって検出された直徑0.8mの大きさのはば円形の遺構である。

出土遺物（第301図）

1085は内面に5条/cmの描目が付けられた桃山時代のものと思われる備前産の陶器製捕鉢である。
1086は備前産の陶器壺である。



第302図 SX2001実測図



第303図 SX2001出土遺物実測図

柱穴 71 (SP2071)

1区のL-6・7グリッドにまたがって検出された直径約0.4mの円形の遺構である。わずか0.1mの遺構の埋土には焼土粒が比較的多く含まれ、底には片岩の板石が置かれていた。

出土遺物（第301図）

1087は長径61.5mmを測る石製の加工円板である。

柱穴 316 (SP2316)

4区のG-18グリッドから検出された直径約0.3mの大きさの円形の遺構である。深さ約0.2mの遺構の埋土中に炭化物や焼土粒とともに小礫を含んでいる。

出土遺物（第301図）

1088は土師質の装飾品である。型押成形の碗形で、内面には菊花文様が描かれ白泥と透明釉がかけられている。

不明遺構

不明遺構 1 (SX2001) (第302図)

1区のF・G・H-6・7グリッドにまたがって検出された長さ8.8m、幅5.0mの大きさの不整形な

形の遺構である。遺構の大きさに対して掘り込みは浅く最も深いところでも0.3mしかない。遺構内の堆積には炭化物や焼土粒が多く含まれ、3層からは焼土面が検出されている。また、2層と4層には貝殻片が多く含まれている。

出土遺物（第303図）

1089は肥前系の白磁盃である。高台部分は露胎のまま残されている。1090は肥前系の陶器製溝縁皿である。内外面全体に灰釉がかけられているが、内面見込部と高台周辺には砂目痕が3カ所ずつ見られる。高台内は露胎のまま残され砂が付着している。1091は瀬戸美濃系の小鉢である。口縁部は内湾し底部には半環足が貼付られている。外面には草花、内面には杜若が鉄絵により描かれ、全面に貫入が見られる。1092は土師質の皿である。底部は回転糸切り痕とともに板目痕が見える。1093は土師質の秉壠である。突起部に煤が付着している。

不明遺構 3 (SX2003) (第304図)

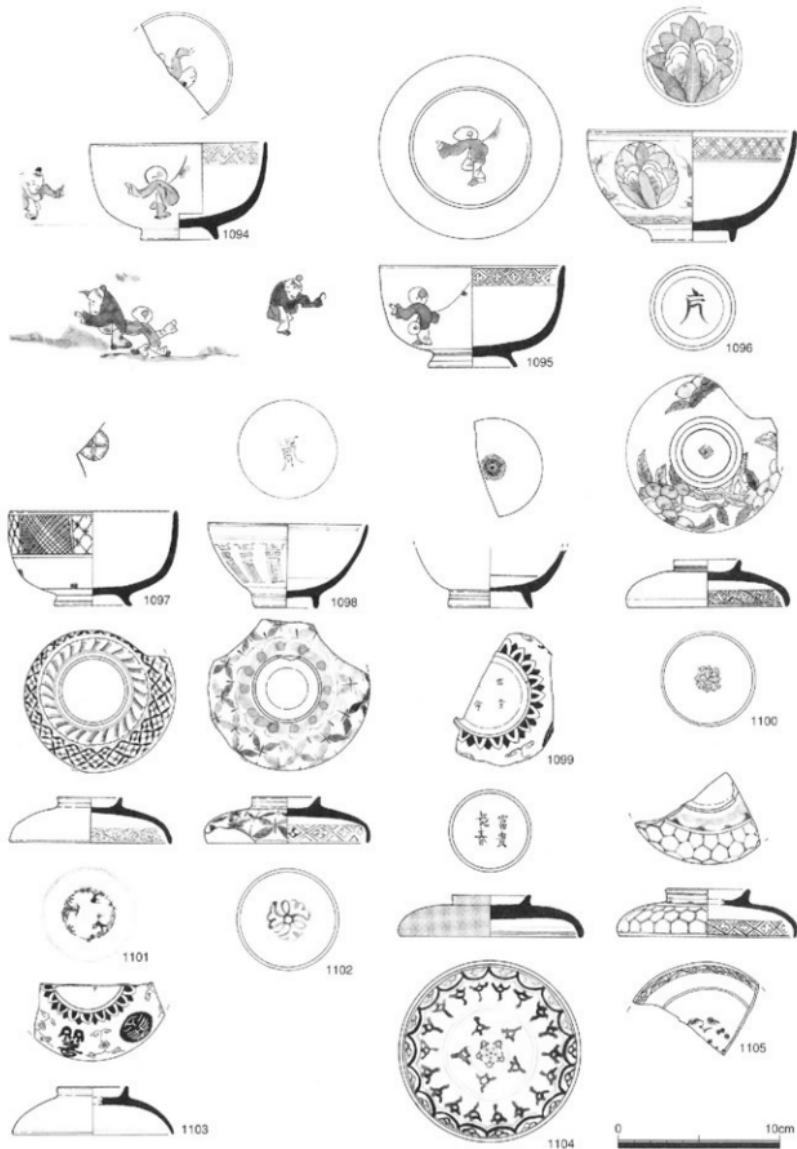
1区のH・I-10グリッドにまたがって検出された遺構である。遺構の多くの部分が東側の未調査区域に延びているため、正確な形や大きさは不明だが、検出された部分から金形を推定すると、一辺が5m以上の長さを持った、方形、または長方形の形をした遺構であったと思われる。遺構内は二段に掘り込まれ、深さ約0.2m程のところに側壁にそってテラス状の平坦面が作り出されている。このテラス状の平坦面の上からは片岩の板石が散乱した状態で検出されていることから、もともとは側壁の内側に石垣が築かれていた可能性が高い。遺構内には一部を除いて締まりの悪い砂質土が堆積している。

出土遺物（第305・306図）

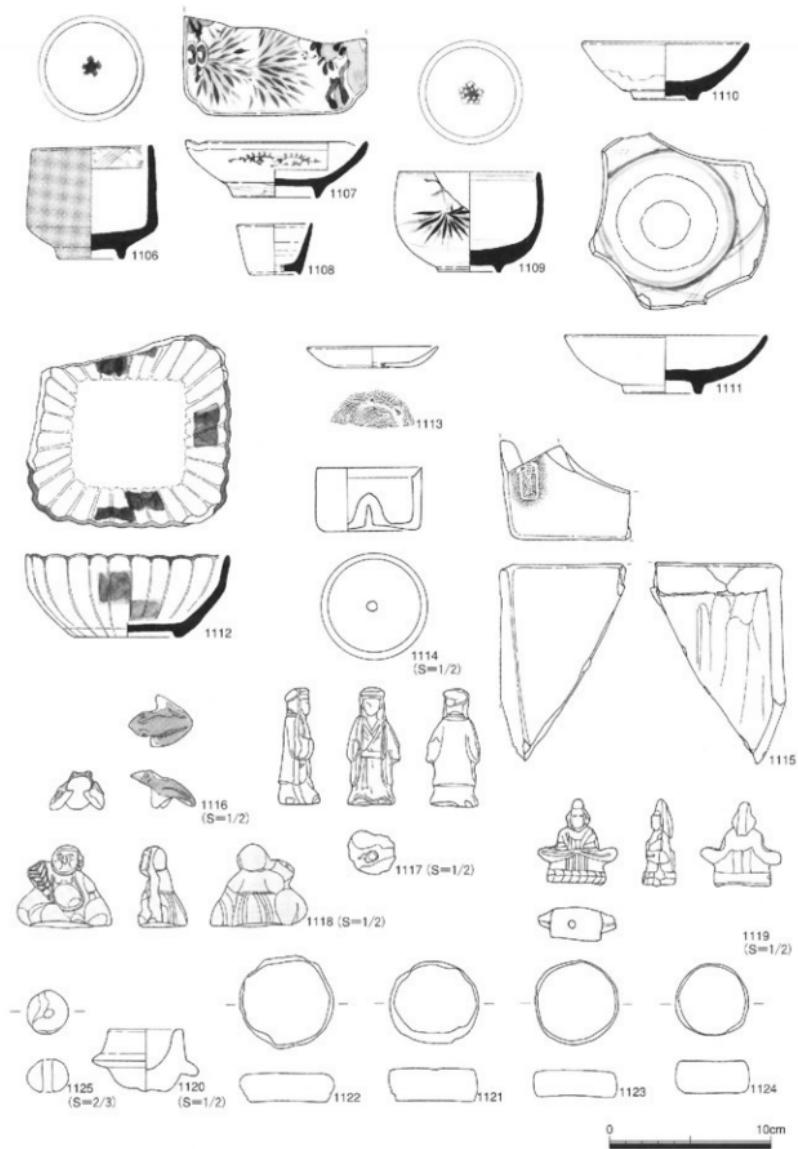
1094は肥前系の呂器形の染付磁器碗である。外面は唐子に松、内面は四方櫛文、内面見込部の二重圓線内に唐子が画かれている。1095は内外面に唐子が描かれた肥前系の染付磁器碗である。1096は肥前伊万里の染付磁器碗である。体部外面は牡丹と葉に花唐草、内面は四方櫛文、内面見込部は牡丹と葉がそれぞれ描かれ、高台外底面の圓線内には変形文字が書き込まれている。1097は肥前系の染付磁器碗であ



第304図 SX2003実測図



第305図 SX2003出土遺物実測図(1)



第306図 SX2003出土遺物実測図(2)

る。体部外面には斜格子と四弁花の市松文様、内面見込部には十字花がそれぞれ描かれている。1098は肥前系の丸形磁器碗である。外面には「壽」の篆書体の変形字と圓線が染付で描かれ、内面見込部の圓線内には「壽」の銘が書き込まれている。1099は肥前系の染付磁器碗である。体部外面には蓮弁、内面見込部には渦がそれぞれ描かれ、高台外底面には「富貴□命」の銘が書き込まれている。1100は肥前系の染付磁器碗の蓋である。体部外面は琵琶の木と実、内面は四方櫛文、内面見込部は二重圓線内と十字花がそれぞれ描かれている。また、高台外底面の二重方形枠内には変形文字の銘が書き込まれている。1101は肥前系の染付磁器の蓋である。体部外面には七宝と蓮弁、内面には四方櫛と二重圓線内環状松竹梅がそれぞれ描かれている。1102は肥前系の染付磁器碗の蓋である。体部外面は四方櫛捲一連弧、内面には四方櫛文、内面見込部に宝がそれぞれ描かれている。1103は肥前系の磁器の蓋である。体部外面には圓線・文字・丸文が、内面には圓線がそれぞれ染付により描かれている。1104は肥前系の外青磁碗の蓋である。体部内面には輪宝繁文と櫻珞文が描かれ、高台外底面には「富貴長春」の銘が書き込まれている。1105は肥前系の染付磁器碗の蓋である。体部外面は亀甲文、内面は四方櫛文、内面見込部は松竹梅環状文がそれぞれ描かれている。1106は肥前系の外青磁碗である。半筒形で、内面には四方櫛文が描かれ、見込部の二重圓線内にはコンニャク印判による五弁花文が押されている。1107は型打ち成形で製作された肥前系の磁器製角皿である。外面には唐草、内面には竹がそれぞれ染付により描かれている。1108は碁笥底の底部を持つ肥前系の白磁の猪口である。1109は染付磁器の茶碗である。体部外面には草文が描かれ、内面見込部にはコンニャク印判により五弁化文が押されている。1110は肥前系の陶器皿である。底部外側を除き内外面全体に灰釉がかけられ、内面見込部には目痕が残されている。1111は内面見込部に蛇ノ目釉剥ぎが施された肥前系の磁器皿である。体部内面には斜格子文が染付により描かれ、高台量付部分には砂が付着している。1112は瀬戸美濃系の陶器鉢である。製作成形で製作され口縁端部には口錫装飾が施されている。高台部分を除き全体に灰釉がかけられ、鉄絵により四角文が描かれている。1113は塗上が施された土師質の灯明皿である。口縁部には煤が付着している。1114は塗上が施された土師質の采燭と思われる。内面中央部に円筒形の突起が設けられている。1115は土師質の提炉である。上面の方形枠内には「征甚右衛門」の刻印がうたれている。1116は蛙をかたどった土製の人形である。製作貼付成形で製作され、底部を除き綠釉がかけられている。1117は製作り貼合せで製作された器高49mmを測る土製の人形である。底部には穿孔がある。1118は布袋をかたどった土製の人形である。製作り貼合せ成形で製作されている。1119は製作り貼合せで製作された人物座像をかたどった土製の人形である。1120は土師質のミニチュアの釜である。1121～1124は瓦片を再加工した加工円板である。1125は琥珀製の飾り玉である。中央には口径3mmの糸通しの穴が開いている。

不明遺構 5 (SX2005) (第307図)

1区のK・L-4・5グリッドにまたがって検出された長さ約1.5m、幅1mの大きさの不整形な形の遺構である。断面がU字状に掘り込まれた深さ0.3mの遺構の底面には不規則な凹凸が残されている。

出土遺物 (第308図)

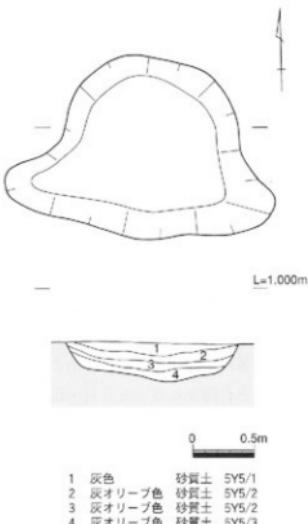
1126は肥前系の陶器碗である。露胎のまま残される高台部分以外、全体に灰釉と白泥がかけられている。1127は木製の曲物の底板である。側面には木釘痕が3カ所見える。1128～1130は木製の箸である。1131は木製の刎り下駄である。全面に漆の剥離痕が見える。1132は木製の櫛である。1133は加工木片である。1134は板状の加工木片で表面に焼け跡や穿孔、墨が付着した部分が見られる。1135は凝灰岩製の砥石である。

不明遺構 10 (SX2010) (第309図)

2区のC-14・15グリッドにまたがって検出された長軸を東西方向にとる長さ3.4m、幅2.0mの不整形な遺構である。断面U字型に掘り込まれ深さ約0.4mを測る。

出土遺物 (第310図)

1136は肥前系の磁器小杯である。外面には羽子板に羽根が染付で描かれている。1137は底部の切り離しに回転糸切り技法が使用される土師質の皿である。底部には回転糸切り痕の他に板目痕が残されている。1138・1139は土師質の灯明皿である。底部には回転糸切り痕が残され、口縁部には煤が付着している。



第307図 SX2005実測図

不明遺構 11 (SX2011) (第311図)

2区のD-14グリッドから検出された長軸を東西方向にとる長さ約3.2m、幅1.8mの大きさの不整形な形の遺構である。断面が皿状に掘り込まれた深さ0.3mの遺構内には炭化物や焼土を少量含んだ砂質土が4層レンズ状に堆積している。

出土遺物 (第312図)

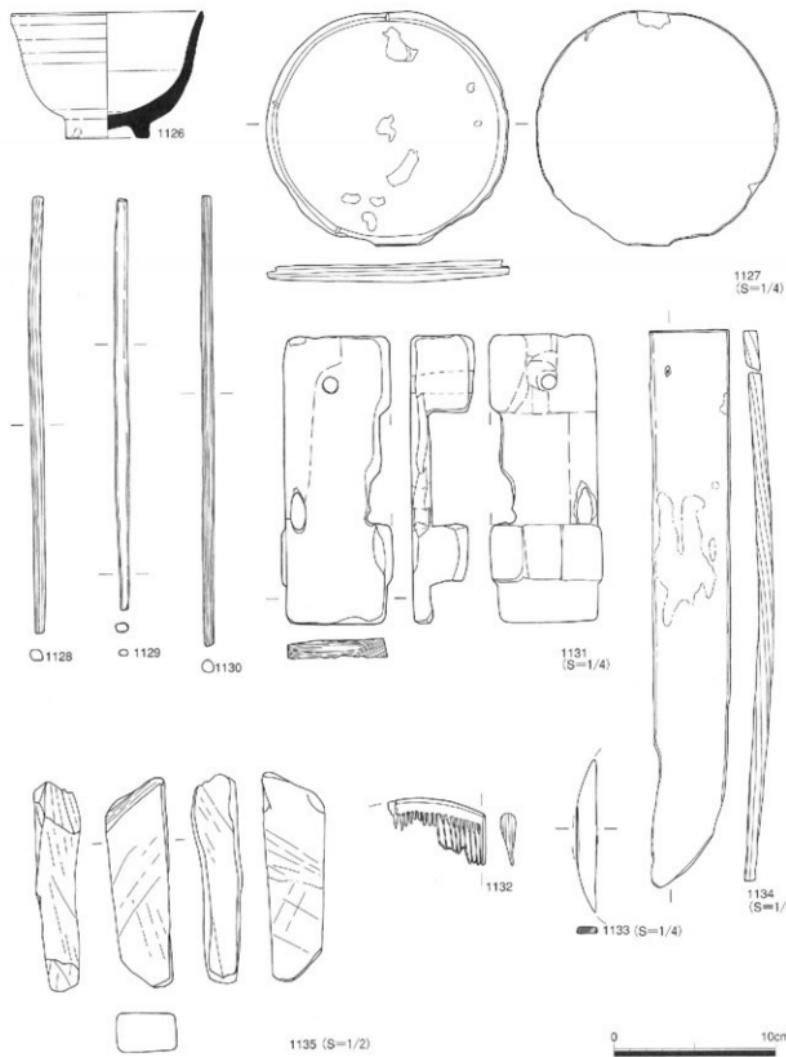
1140は京信楽系の陶器製火入れである。外面には呉須・鉄絵により梅が描かれている。内面と高台はいずれも無釉である。1141は土師質の皿である。底部には切り離しの際の回転糸切り痕以外に板目痕が残されている。

不明遺構 17 (SX2017) (第313図)

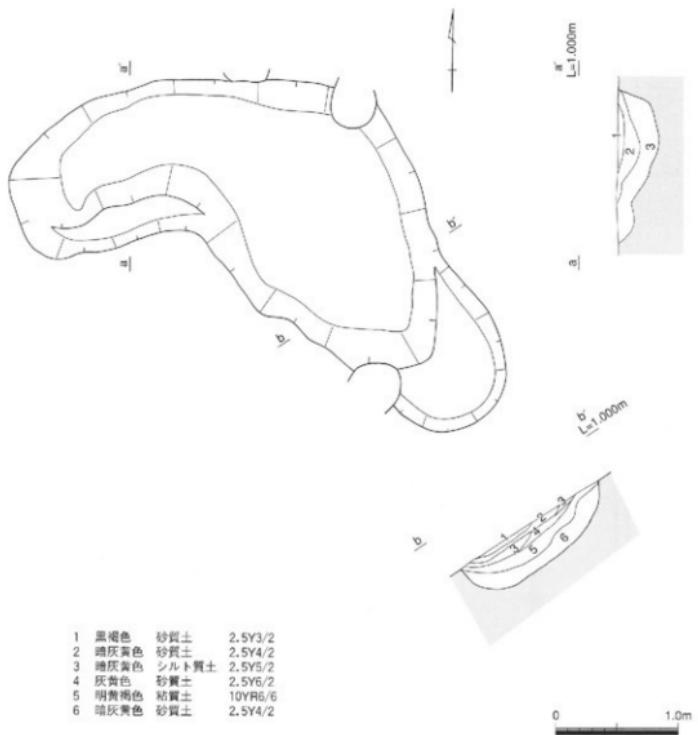
3区のJ-16グリッドで検出された不整形な形をした溝状の遺構である。断面が逆台形の遺構の掘り込みは浅く最も深いところでも0.1mしかない。

出土遺物 (第314図)

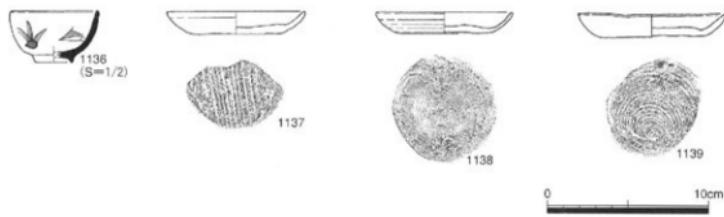
1142は銅製の飾り金具と思われる。片面は金彩が施されている。



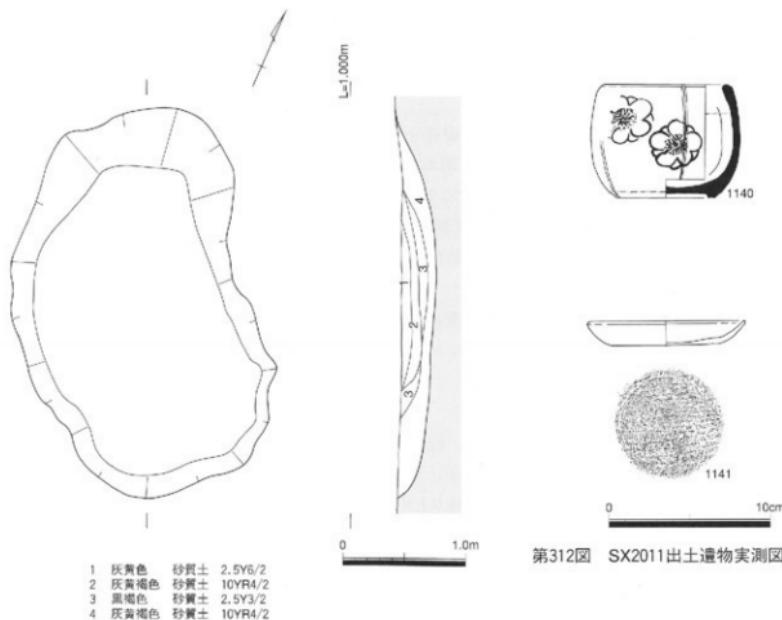
第308図 SX2005出土遺物実測図



第309図 SX2010実測図

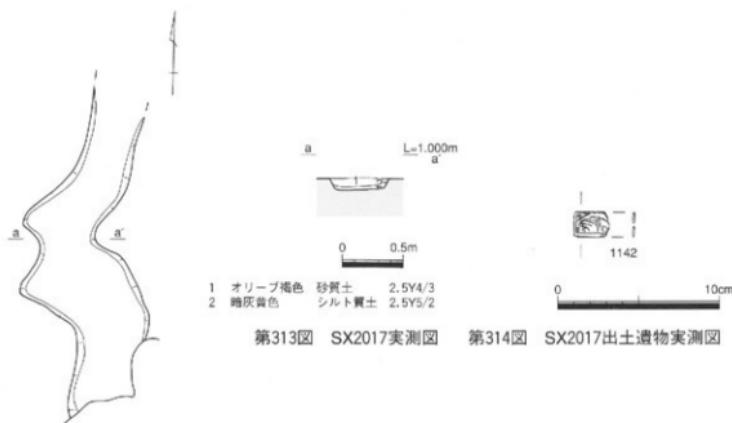


第310図 SX2010出土遺物実測図



第312図 SX2011出土遺物実測図

第311図 SX2011実測図



第313図 SX2017実測図

第314図 SX2017出土遺物実測図

(4) 第1遺構面

建物跡

建物跡 1 (SA1001) (第315図)

1区の西壁に沿って検出された建物の基礎部分である。最も大きなもので長さ約1.5m、幅1mの不整四角形の土坑の中に大小の礫を詰め込んで固めた坪地業の上に、最大で長さが1mを超える片岩の板石を置き建物の基礎としている。痕跡を含めて15基ほどが確認された基礎は柱間の間隔が約2m前後と推定されるが、この柱列から3~3.5m東側には、柱列に並行するように大規模な石を抜き取った痕跡が残されていることから、長い回廊状の建物が建てられていた可能性が高い。

SP1100出土遺物 (第316図)

1143は肥前系の陶器碗である。体部外面とも鉄釉・白泥により刷毛目文様が描かれているが、そのほかにも外面には「高 三階 」の文字が書き込まれている。

建物跡 2 (SA1002) (第317図)

1区の南西部分から検出された梁間4間、桁行4間以上と考えられる東西棟の建物跡で、東側の梁行は未検出である。長さ約1m前後の土坑の中に大小の礫を詰め込んで固めた坪地業の上に、長さ約1m弱の片岩の板石を置いて基礎としている。残された基礎から推定される柱間の間隔は、桁行間が約2mに対して、梁間側の間隔はそれより若干短いと考えられる。

建物跡 3 (SA1003) (第318図)

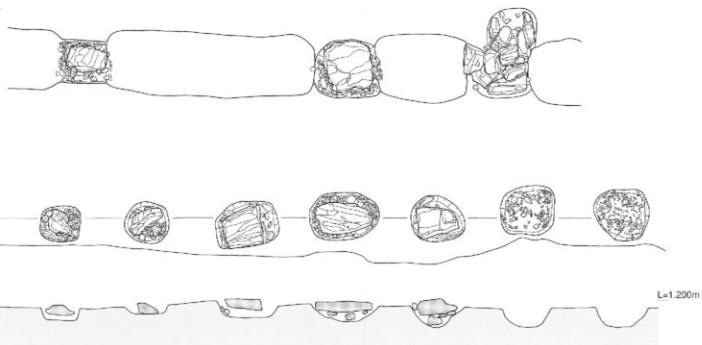
1区の南側から検出された東西棟の建物跡である。梁行側、桁行側とも基礎が大きく欠落している部分があるため正確な建物の復元はできないが、最大に見積もって梁間5間、桁行10間の規模が考えられる。建物跡は坪地業の上に片岩の板石を置いて基礎としているが、地業の規模はまちまちで、長さが1mを超えるものから80cm足らずのものまでが検出されている。基礎の板石の大きさも地業同様まちまちだが最大でも60cm足らずの大きさしかなく、建物跡1・2のように長さが1mを超えるような大型のものは使用されていない。

SP1062出土遺物 (第319図)

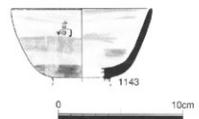
1144は銅鏡の寛永通宝(新)である。

建物跡 4 (SA1004) (第320図)

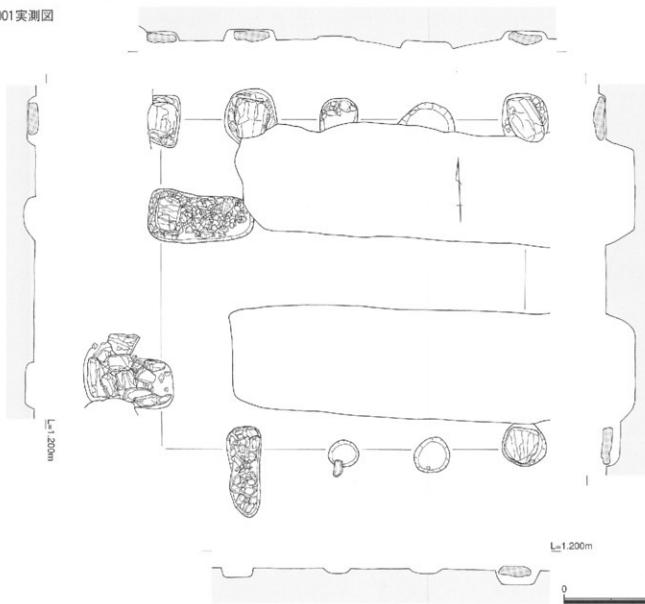
建物跡3と重複する「コ」の字型の布地業の区画内に残された梁間1間、桁行4間の東西棟の礎石建の建物跡である。柱間の間隔は梁間間が約2m、桁行間が約1mと、梁間側に比べて桁行側は約半分の間隔しかない。検出された遺構は、「コ」の字型の布地業のほぼ中央部に残された桁行列4間と、北側の布地業上で検出された1間分だけであるが、布地業中央部の桁行列の東側の延長線上には東端の坪地業跡から約2m離れた位置に同じような坪地業跡が1ヶ所残されていることや、桁行列と南側の布地業跡との距離が約2mと残っている梁間間の間隔とほぼ同じであることから、この建物は元々梁間2間、桁行6間の規模の礎石建物跡だった可能性がある。建物の基礎には坪地業の上に礎石が置かれたものと、片岩の板石をそのまま地面に置いて礎石としたものが併用されているが、礎石の大きさは50cm前



第315図 SA1001実測図



第316図 SA1001出土遺物実測図

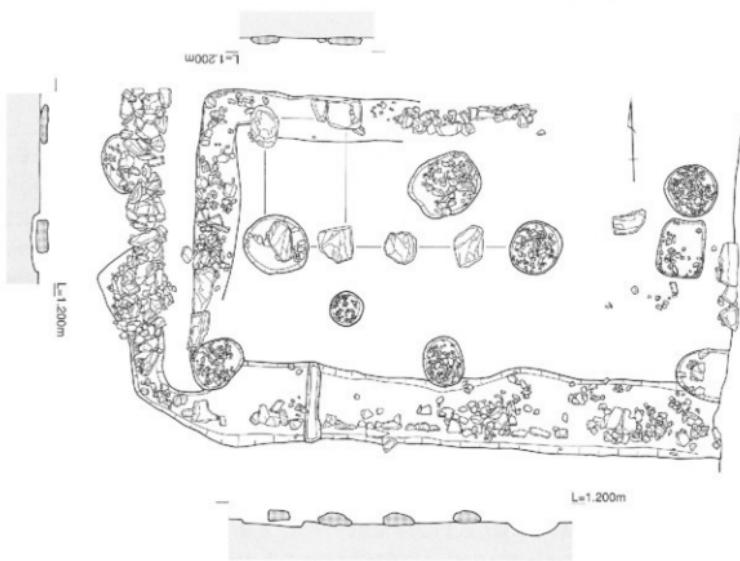


第317図 SA1002実測図

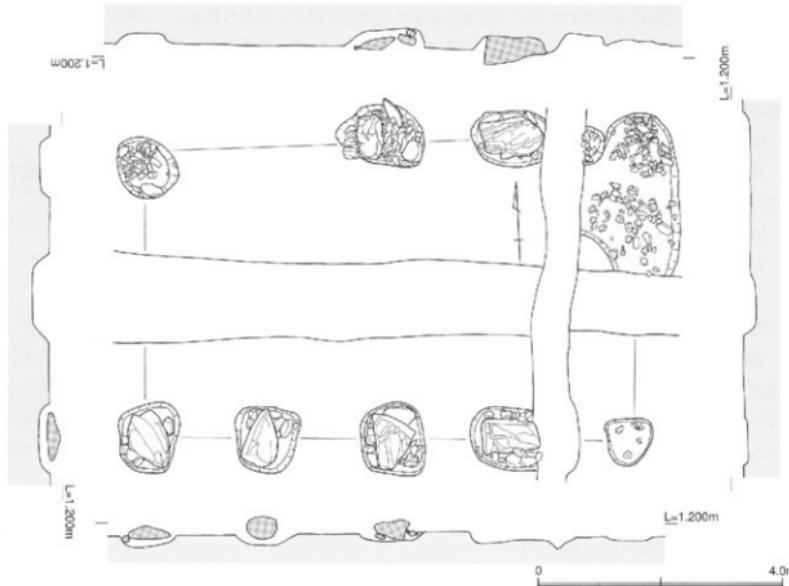


第319図 SA1003出土遺物実測図

第318図 SA1003実測図



第320図 SA1004実測図



第321図 SA1005実測図

後と小型である。

建物跡 5 (SA1005) (第321図)

建物跡5の西側で検出された東西棟の建物跡である。中央の桁行列を石抜によってすべて失っているが、梁間2間、桁行4間と考えられる。中央の桁行列の石抜き跡の西端部分からは、礎石に使用されたと考えられる2枚の大型の片岩が置かれた土坑が検出され、復元された西側の梁行からは距離的に2mしか離れていないことから、さらに西側に1間分延びる可能性も考えられたが、南北両側の桁行の延長線上にはなんの痕跡も認められないため、一応桁行き4間としておく。柱間の間隔は梁間間、桁行間ともそれぞれ2m前後あったと考えられる。柱の基礎は10~20cmの浅い土坑内に礎石を詰め込む坪地業を行った上に、長さ1m前後の大型の片岩の板石をのせ礎石としているものが多い。

建物跡 6 (SA1006) (第322図)

建物跡群の中央部から検出された梁間3間、桁行5間の南北棟の総柱の建物跡である。柱の基礎部分に深さ約0.2~0.3mの土坑の中に礎を詰め込んだ坪地業を行い、その上に礎石に使用された板石が置かれている。礎石に使用された板石の大きさはまちまちだが、相対的に50cm前後の小さいものが多い。北側の梁行部分には不規則な形に掘り込まれた布地業が行われ、東端の桁行列には部分的に石列が残されている。この桁行列の約1m東側には、この石列に並行する長さ約6mの同様の石列と直交する2本の石列が並べられているが、建物跡5のように礎石としての機能を持つ石列かどうかは不明である。これ以外にも建物跡の区画内には、正方形に組まれた石組みが2ヶ所見られる。1ヶ所は四隅に柱の礎石を配し、その間を石列で結んだもので、そのうちの東側の一辺は先述した桁行列の石列の一部にあたる。もう1ヶ所は1辺が柱間の半分ほどの長さのものであり、石組みの内部にも石が置かれ、南側には甃が埋め込まれていた。

SP1110出土遺物 (第323図)

1145は肥前の磁器鉢である。丸形で、体部外面は青海波と松竹梅・鶴亀、内面は四方櫻文、内面見込部は二重圓線内に環状松竹梅がそれぞれ染付によって描かれている。高台部は欠損している。

SP1136出土遺物 (第323図)

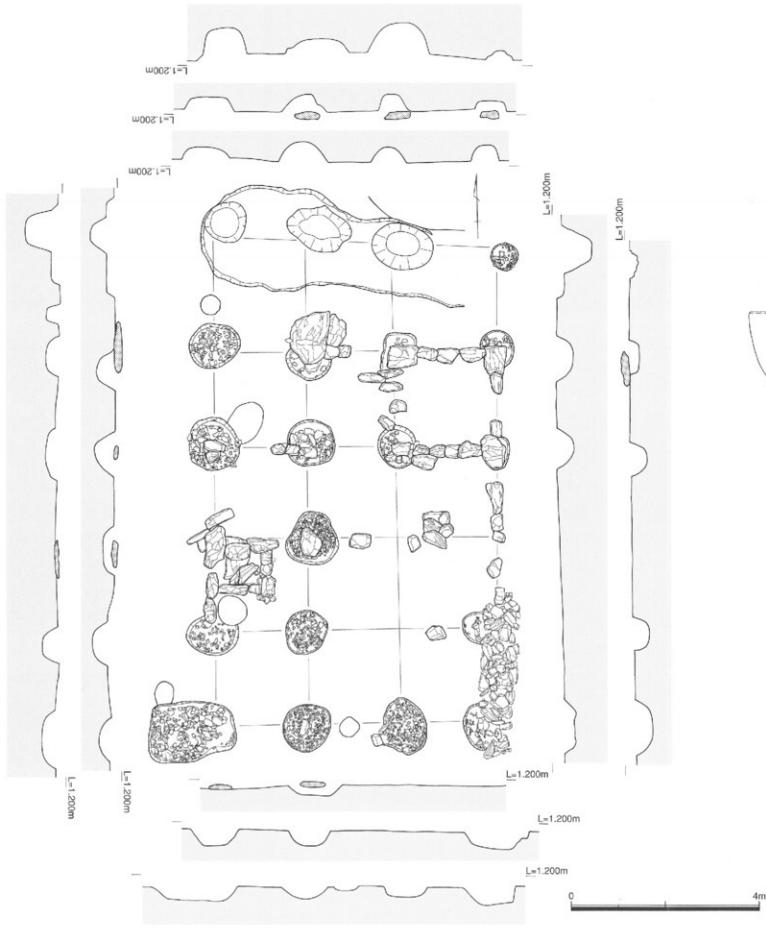
1146は関西系の陶器壺である。外面の体下部には「マ V」、底部には「つ」の墨書が認められる。

建物跡 7 (SA1007) (第324図)

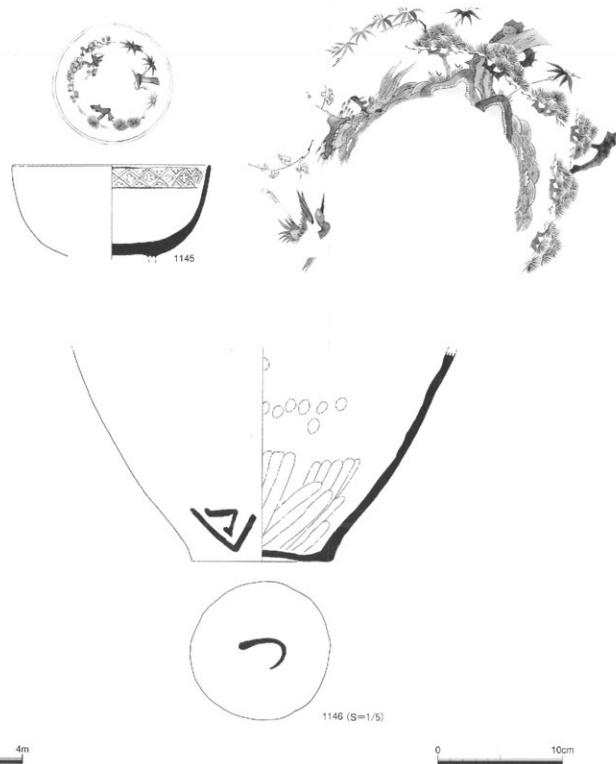
建物跡5・6の北で検出された南北棟の建物跡である。南から2列目の梁行をすべて失っているが、梁間1間、桁行3間の建物であったと考えられる。建物の基礎には坪地業を行いその上に礎石が置かれていたと思われるが石はすべて失われている。柱間の間隔は梁間間、桁行間とも約2m前後と考えられる。梁間1間というのは建物としては不自然なうえに、東側に隣接する建物跡8と梁行部分の柱の通りが共通する部分が見られることから建物跡8の一部であった可能性もある。

建物跡 8 (SA1008) (第324図)

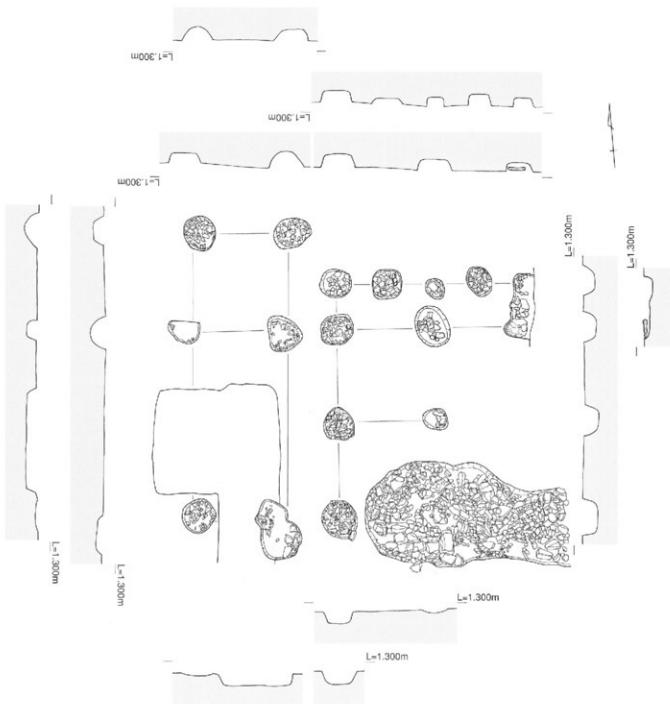
建物跡5の北側で7に隣接して検出された、南北棟の庇を持つ建物である。東の桁行列の一部と南端の梁行列を欠いているが梁間2間、桁行2.5間の規模が考えられる。柱間の間隔は梁間間、桁行間とも



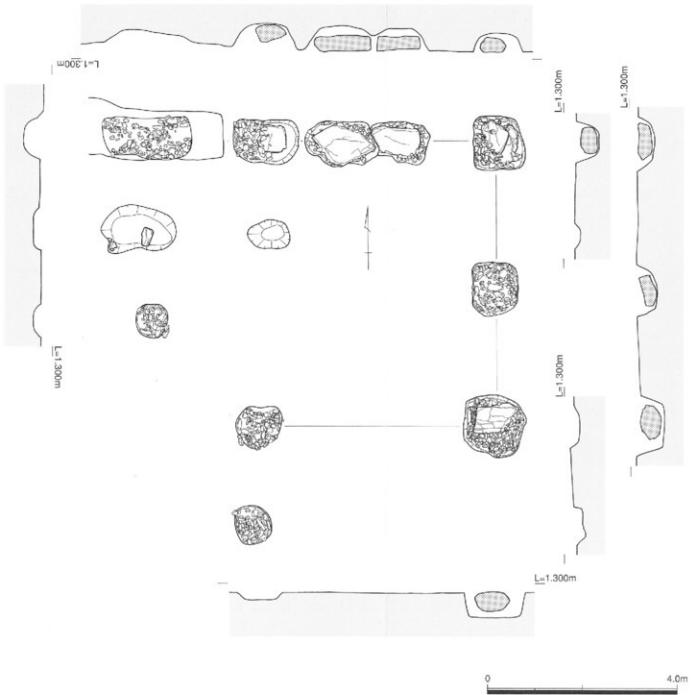
第322図 SA1006実測図

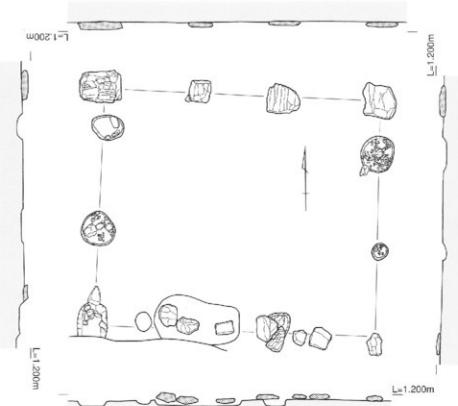


第323図 SA1006出土遺物実測図

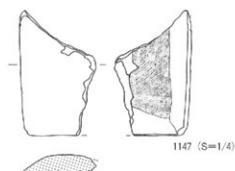


第324図 SA1007・SA1008実測図

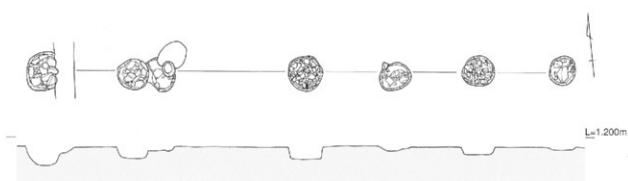




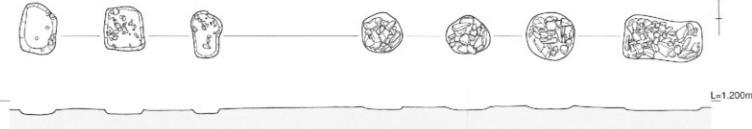
第326図 SA1010実測図



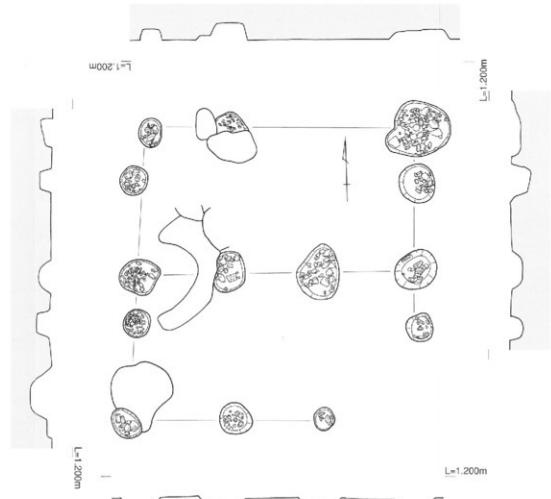
第327図 SA1010出土遺物実測図



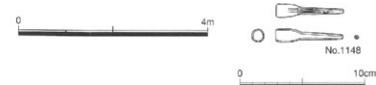
第328図 SA1011実測図



第329図 SA1012実測図



第330図 SA1013実測図



第331図 SA1013遺物出土実測図

2m前後、庇部分は1mである。南端の梁行部分には、建物跡5で述べたように多量の礫が詰め込まれた東西にのびる不規則な布地業が行われている。建物跡5では、地業内に柱部分に基礎の土坑が残されていたことから柱の位置が確認できたが、8の場合は柱の位置を特定できるような礫石や土坑などは残されていなかった。しかし地業の位置から考えると、建物跡8の基礎も兼ねていたことは間違いないと思われる。

建物跡 9 (SA1009) (第325図)

建物の基礎に坪地業を行い、礫石には1m前後の大型の片岩の板石を使用する建物跡である。確認できた柱列は、東西方向と南北方向それぞれ1列分だけである。東西方向は柱間の間隔が2.5mと推定され、3間分が確認できた。一方、南北方向の柱間の間隔は3mで2間分が確認されている。坪地業を行う際に掘り込まれた土坑は深さが50cm前後と深い。東柱の礫石と考えられるものは確認できなかつた。

建物跡 10 (SA1010) (第326図)

梁間2間、桁行3間の東西棟の建物である。坪地業が行われる柱と、地面に直接石を置いて礫石としただけの柱が併用されている。坪地業の大きさはまちまちで、0.7m前後の規模の小さいものがほとんどである。北側の桁行列はすべて礫石だけで構成されているが、礫石に使用される石材は1m近い大型のものから40cm足らずの小型のものまでと大きさにばらつきがある。東柱を支える礫石は全く検出されなかつた。柱間の間隔は梁間間、桁行間とも約2m前後と思われる。

SP1192出土遺物 (第327図)

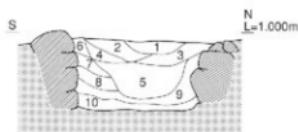
1147は瓦質の棟込瓦と思われる。裏面には櫛目が認められる。

建物跡 11 (SA1011) (第328図)

建物跡10のすぐ北側で検出された東西方向の柱列である。直径0.6m~0.8mの不整円形の土坑内に礫を詰め込んだ坪地業の跡が、途中の1ヶ所を欠くが1.8mの間隔で東西方向に6個ならんで検出されている。周囲には同じような規模の坪地業の跡が多く検出されているが、何れも通りが悪く建物跡11とともに建物を構成する可能性は少ない。柱の多くが地業を伴わない礫石だけで構成されていたとするならばこれ以上建物跡を復元することは困難である。

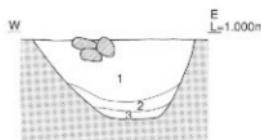
建物跡 12 (SA1012) (第329図)

建物跡10の北東部で検出された坪地業を伴う東西方向の柱列である。長さ約1m内外の不整形または不整円形の坪地業の柱跡が途中の1ヶ所が抜けてはいるが1.8m前後の間隔で7個並んでいる。ただ、地業の掘り込みは0.1m足らずと浅く、なかには内部に詰め込まれた礫がほとんど残っていない土坑もあることから、上部がかなり削平されていると思われる。柱列の延長線上には建物跡11の柱列がのつてくるが、途中に約5m余りの間隔が開いていることから、建物が直接関係することはないと考えられる。柱列の周辺には11と同様、坪地業や布地業の跡が点在し片岩などの石材が散乱しているが、建物跡を復元することはできない。ただ、この柱列から約4m南側には布地業の跡が並行して長さ16m以上にわたって残されていることから、ここに対応する柱が存在していた可能性がある。



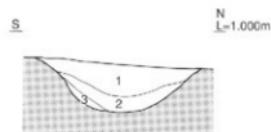
SD1003 土壌断面図

1	灰オリーブ色	砂質土	SY5/3
2	灰オリーブ色	砂質土	SY5/2
3	オリーブ褐色	砂質土	2.5Y4/3
4	暗オリーブ色	砂質土	SY4/3
5	暗オリーブ褐色	砂質土	2.5Y3/3
6	暗オリーブ色	砂質土	SY4/3
7	灰オリーブ色	砂質土	SY4/2
8	暗オリーブ色	砂質土	SY4/3
9	灰オリーブ色	砂質土	SY4/2
10	暗オリーブ色	砂質土	SY4/3



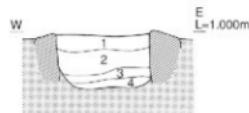
SD1004 土壌断面図

1	灰オリーブ色	砂質土	7.5Y5/2
2	灰オリーブ色	砂質土	7.5Y4/2
3	灰オリーブ色	シルト質土	7.5Y4/2



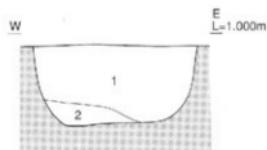
SD1005 土壌断面図

1	黒褐色	砂質土	2.5Y3/2
2	黄灰色	シルト質土	2.5Y5/2
3	灰オリーブ色	シルト質土	2.5Y5/2



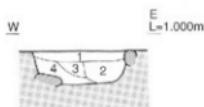
SD1008 土壌断面図

1	オリーブ黒色	砂質土	5Y3/2
2	暗灰黄色	砂質土	10YR4/2
3	暗灰黄色	砂質土	2.5Y4/2
4	灰オリーブ色	砂質土	5Y4/2



SD1009 土壌断面図

1	オリーブ黒色	砂質土	5Y2/2
2	灰オリーブ色	砂質土	5Y4/2



SD1011 土壌断面図

1	暗灰黄色	砂質土	2.5Y4/2
2	オリーブ黒色	砂質土	5Y3/2
3	暗灰黄色	砂質土	2.5Y5/2
4	灰オリーブ色	砂質土	5Y5/2

0 1.0m

第332図 第1造構面溝断面実測図

建物跡 13 (SA1013) (第330図)

調査区の南東部分で検出された坪地業を伴う建物跡である。第1造構面の他の建物がすべてSD1003とSD1008で囲まれた区画内から検出されているのに対し、建物跡13だけがこの区画からはずれた場所で検出されている。復元された建物は東西3間、南北4間であるが造構の北側が未調査なことからさらに北側に延びる可能性がある。柱間の間隔は東西間で約2m、南北間で1mと2mを測る。この建物跡の周囲からは、同じように坪地業を伴う柱穴が多く検出されたが建物跡が復元できたのは13だけである。柱穴の大きさは50cmから1mとまちまちであるが、礎石が残された柱穴は見あたらないことから上部が削平されている可能性が高い。

SP1312出土遺物 (第331図)

1148は銅製の煙管吸口である。

溝

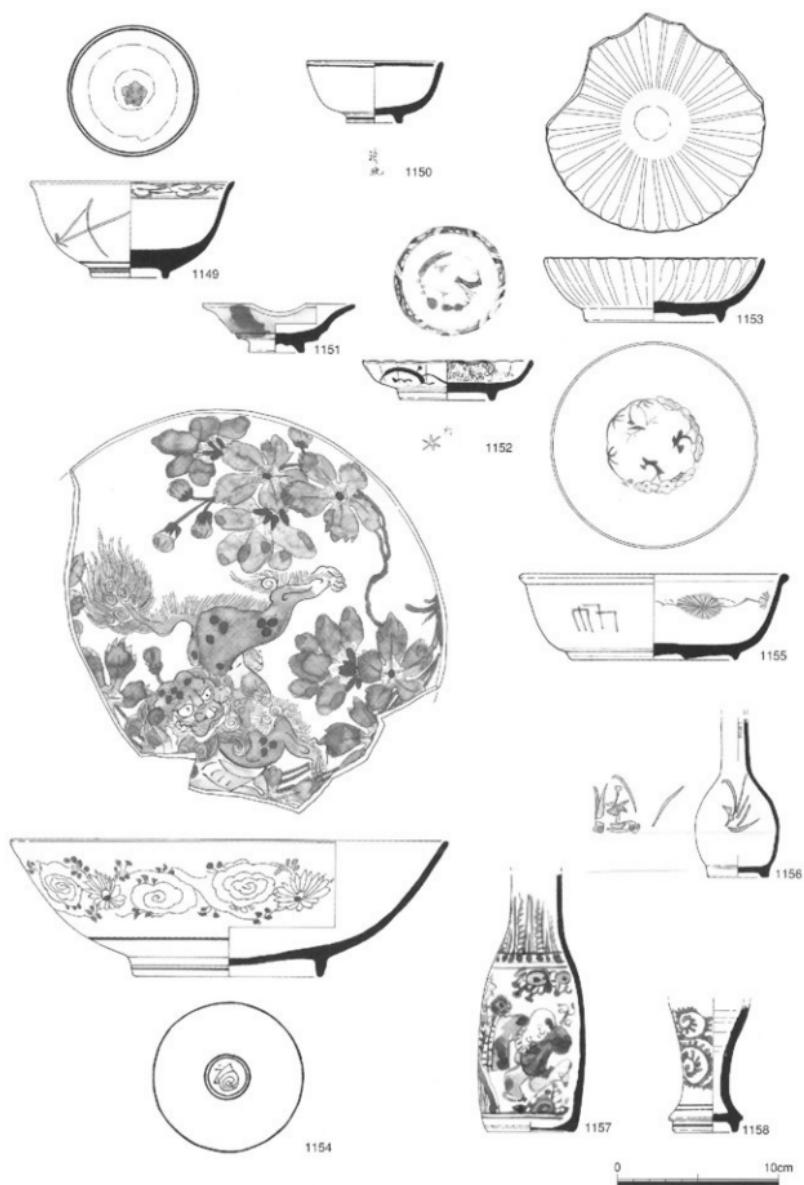
溝 3 (SD1003) (第331図)

調査区の北側で1区と3区にまたがって検出された東西方向の溝である。第2造構面のSD2016の南側の屋敷地を北に拡張した際に付け替えられたと考えられ、2016の東西の直線部分が途中で鍵手状に折り曲げられ、北側に約32mの新しい溝がつくられている。溝の東側約28mはSD2016の一部がそのまま使用されているが、先端部分がさらに東に1m余り延長され新しく作られた南北方向のSD1008とつながっている。また周辺には新たにSD1004や1006・1007・1011などの南北方向の溝が周囲に築かれSD1003につながっている。

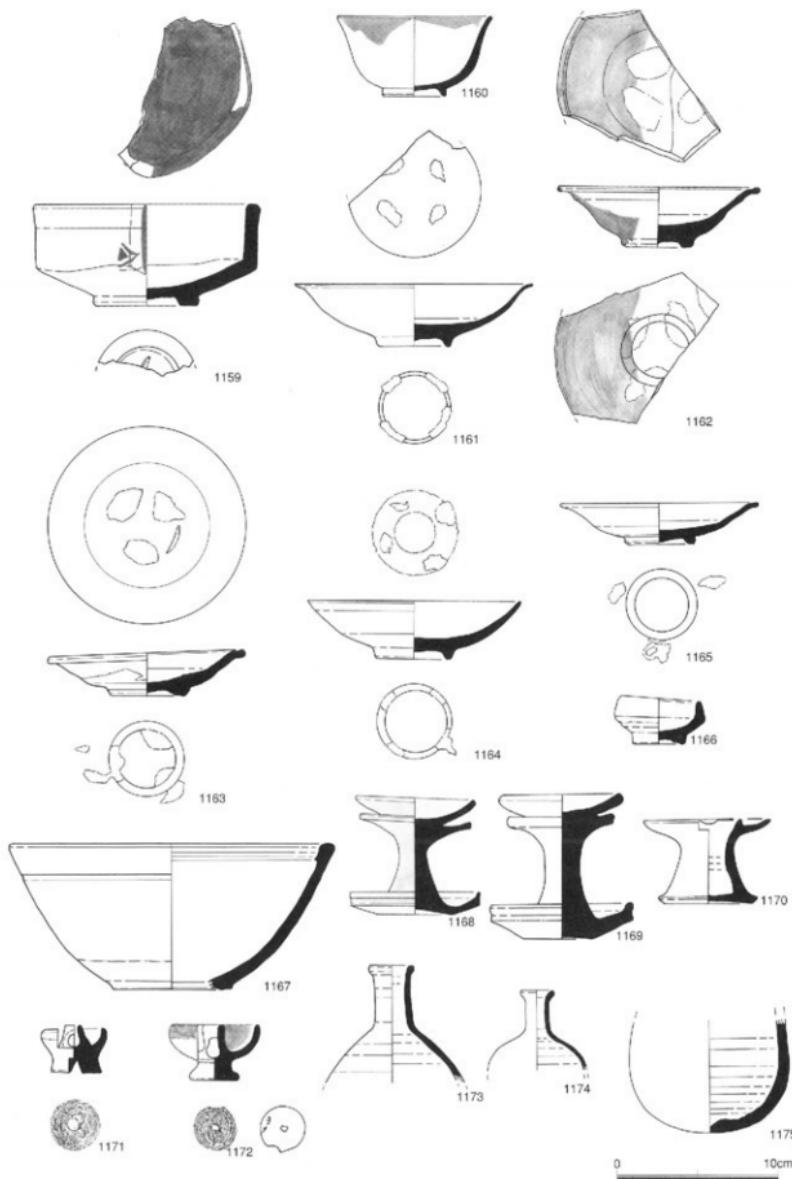
出土遺物 (第333~337図)

1149は肥前波佐見の磁器製壺反碗である。外面には折松業と圓線、内面には雲の連続文が染付で描かれているが、そのほかにも蛇ノ目釉剥ぎが施された内面見込部に二重圓線が引かれ、コンニャク印判による五弁花文が押されている。1150は肥前系の染付磁器碗である。内外面には染付で圓線と帶線が引かれ、高台外底面には「清玩」の鉢が書き込まれている。1151は口径94mmを測る磁器皿である。回転ヘラケズリが加えられた底部を除き、内外面とも灰釉・鉄釉・白泥がかけられている。1152は肥前系の磁器皿である。型打成形の輪花形で、焼成不十分のためか全体が白濁している。体部内外面には唐草、内面見込部には環状松竹梅、高台外底面には帆掛け船がそれぞれ染付で描かれている。また高台外底面には焼繼師印か「*」が書き込まれている。1153は口錆装飾が施された肥前系の白磁皿である。輪花型打成形で製作され高台部分は蛇ノ目凹型高台である。1154は肥前系の磁器製の丸形大鉢である。外面には唐草・唐花に圓線、内面には花と獅子がそれぞれ染付で描かれている。また、高台外底面の二重圓線内には「潤福」が書き込まれている。1155は肥前系の染付磁器鉢である。蛇ノ目凹型高台で体部外面は源氏香、内面は松、内面見込部は環状松竹梅がそれぞれ描かれている。1156は肥前系磁器の御神酒徳利である。外面には染付で松と草が描かれている。1157は外面に唐子・花・並草業が描かれた陶胎染付の徳利である。1158は肥前系の磁器製御神酒徳利である。瓶子形で外面には蛸唐草が染付で描かれている。1159は瀬戸美濃系の黒織部茶碗である。脣形を呈する黒茶碗で、体部外面の窓になる部分に長石釉を刷毛塗りした後、鉄釉がかけられている。高台外底面には窯印が見える。1160は瀬戸美濃系の陶器製の壺反碗である。外面は呉須が流しきかけられ、高台豊付部分には釉剥ぎが施されている。1161は削り出し高台を

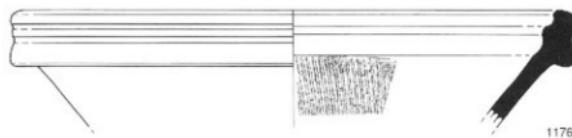
持つ肥前唐津の端反皿である。内外面とも全面に灰釉がかけられ、内面見込み部と高台部分にはそれぞれ1カ所ずつ目痕が認められる。1162は肥前唐津の溝縁皿である。鉄釉と長石釉がかけられているが、削り出しの高台付近は露胎のまま残されている。内面見込部と高台部分には砂目痕が3カ所ずつ残されている。1163は削り出し高台を持つ肥前唐津の溝縁皿である。外面下半部を除き内外面とも灰釉がかけられているが、内面見込部と高台疊付部分には砂目痕が残されている。1164は肥前系の陶器皿である。外面には青緑釉、内面には石灰釉がかけ分けされ、内面見込部は蛇ノ目釉剥ぎが施されている。1165は肥前唐津の溝縁皿である。高台部分を除き内外面とも灰釉がかけられ、底部には砂目痕が3カ所認められる。1166は陶器製の仏瓶である。削り成高台で体部内面と外面の上半部分に灰釉がかけられている。1167は削り出し高台を持つ瀬戸美濃系の陶器鉢である。口縁部外面には沈線、内面には突帯がそれぞれ1条ずつ引かれ、内面見込部には目痕が認められる。1168は在地の大谷焼の陶器製灯明具である。灯明皿は貼付けられ、底部を除き鉄釉がかけられている。1169是在地産の陶器製灯明具である。底部は同心円削りで台皿が貼付けられている。底部外面を除き全体に鉄釉が施されている。1170は京信楽系の陶器製灯明器台である。体部外面と内面の口縁部付近には灰釉がかけられている。1171は陶器製の秉燭である。台付のたんころ型で底部には回転糸切り痕が残され、内面全体と外面の口縁部付近には柿釉がかけられている。1172はたんころ型の陶器製秉燭である。内面と外面口縁部には柿釉がかけられ回転糸切りされた底部には軸孔があり、「ヨソ」の墨書きが認められる。1173は内外面に鉄釉がかけられた在地の大谷焼の陶器製徳利である。1174は口縁部が端反る在地産の大谷焼の陶器瓶である。外面には鉄釉がかけられている。1175は不明の碗形陶器である。外面には煤が付着している。1176～1178は堺光明石系の陶器擂鉢である。1176は頸部突巻の張出が強い18C初頭のものと思われる。口径は344mmを測る。1177は口径406mm、擂目単位は7条／2.5cmを測る。1178は口径500mm、擂目単位9条／3.5cmを測る。1179是在地の大谷焼の楕木鉢である。体部外面には鉄釉がかけられ、内面見込部には直径10mmの穿孔が加えられている。1180是在地系大谷焼陶器の鉢である。銚絵蓮形無高台で外面底部を除き、内外面には鉄釉が掛かる。1181は土師質の皿である。内面には鉄釉と白泥により梅が描かれている。1182は底部の切り離しに回転糸切り技法が使用された土師質の灯明皿である。口縁には煤が付着している。1183は底部の切り離しに回転糸切り技法が使用された土師質の小皿で、内面には黄釉がかけられている。1184は土師質の火消し壺の蓋である。口径185mm、器高24mmを測り内面には煤が付着している。1185は瓦質の焜炉である。板作・型押・貼付成形で製作され、外面にはミガキが施されている。1186は回転台錆作り成形で製作された瓦質の火鉢と考えられるものである。外面には櫛刷毛目とヘラ彫りが施され底部には獸足が貼り付けられている。1187は瓦質の丸形焜炉である。1188は器高70mmの陶器製のせ徳利である。体部に三カ所押圧部があり1カ所には布袋人形が貼付けられている。1189は土製の鳩笛である。型作り貼合せで製作され尾尻と背上部には穿孔が加えられている。1190は土製の鳩笛である。型作り貼合せの片面のみで尾尻から背上にかけては押溝が認められる。1191は土製の鳩笛である。型作り貼合せで製作され尾尻部から背上部にかけて貫通穿孔が見える。1192は型作り貼合せ成形で製作された土製の狛犬である。底部にはハリ文え痕が残されている。1193は土製の魚形人形である。型作り貼合せ成形で製作されている。1194は土師質のミニチュアの蓋である。1195は土製の泥面子で型作りにより梅が描かれている。1196は土製の泥面子の面打である。型作りにより耀星が描かれている。1197は土製の泥面子の芥子面である。型作りにより人面が描かれている。1198は長径49.5mmを測る陶器片を使用した加工円盤である。1199は瓦当部に均整唐草が配された軒平瓦である。1200は軒棟瓦である。均整唐草が配された横には円刻内「い」



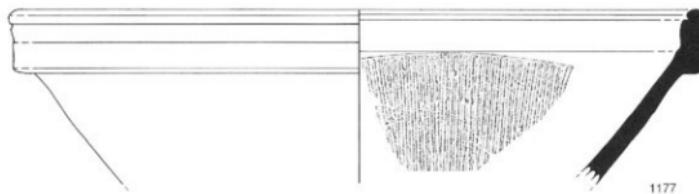
第333図 SD1003出土遺物実測図 (1)



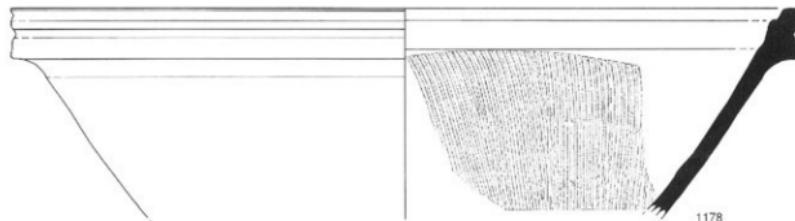
第334図 SD1003出土遺物実測図(2)



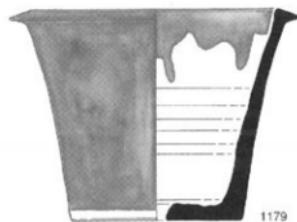
1176



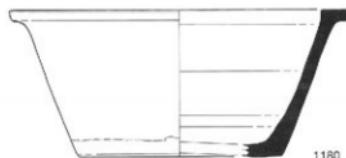
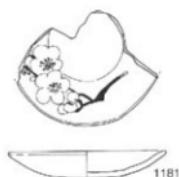
1177



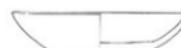
1178



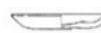
1179

1180
(S=1/4)

1181



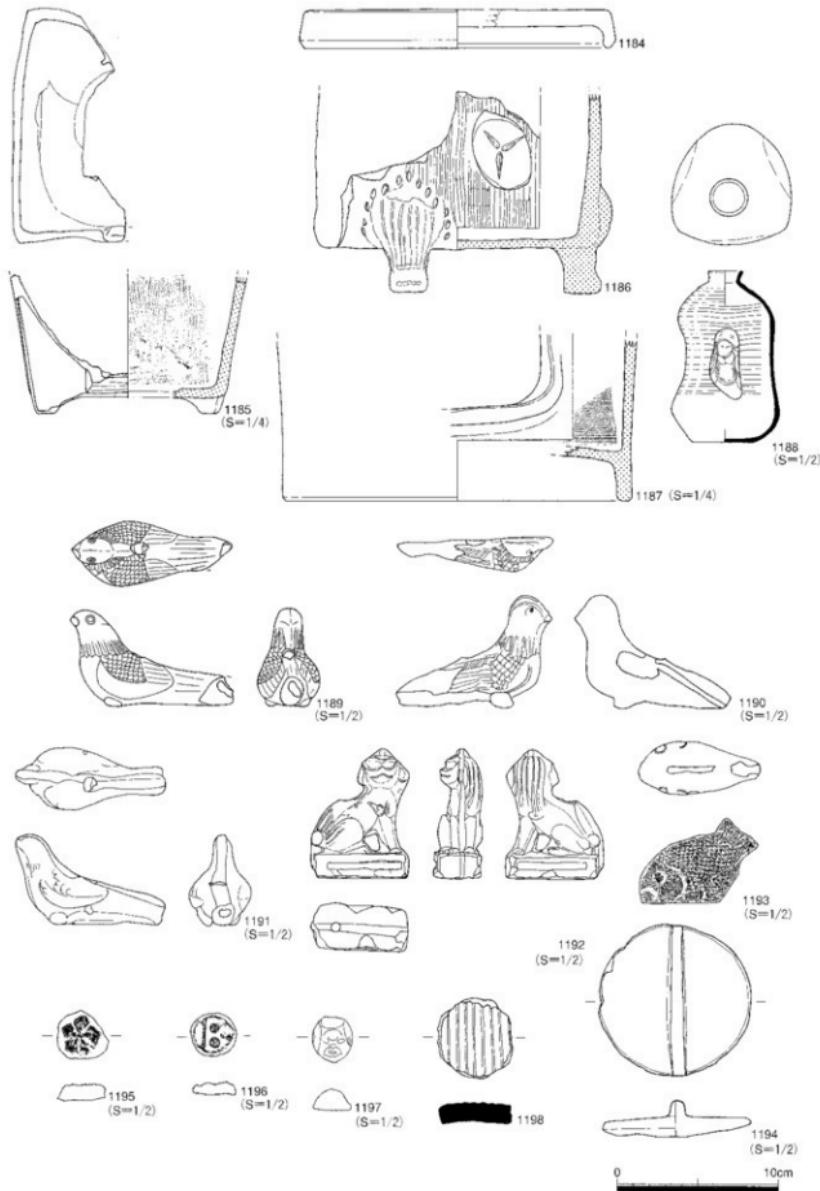
1182



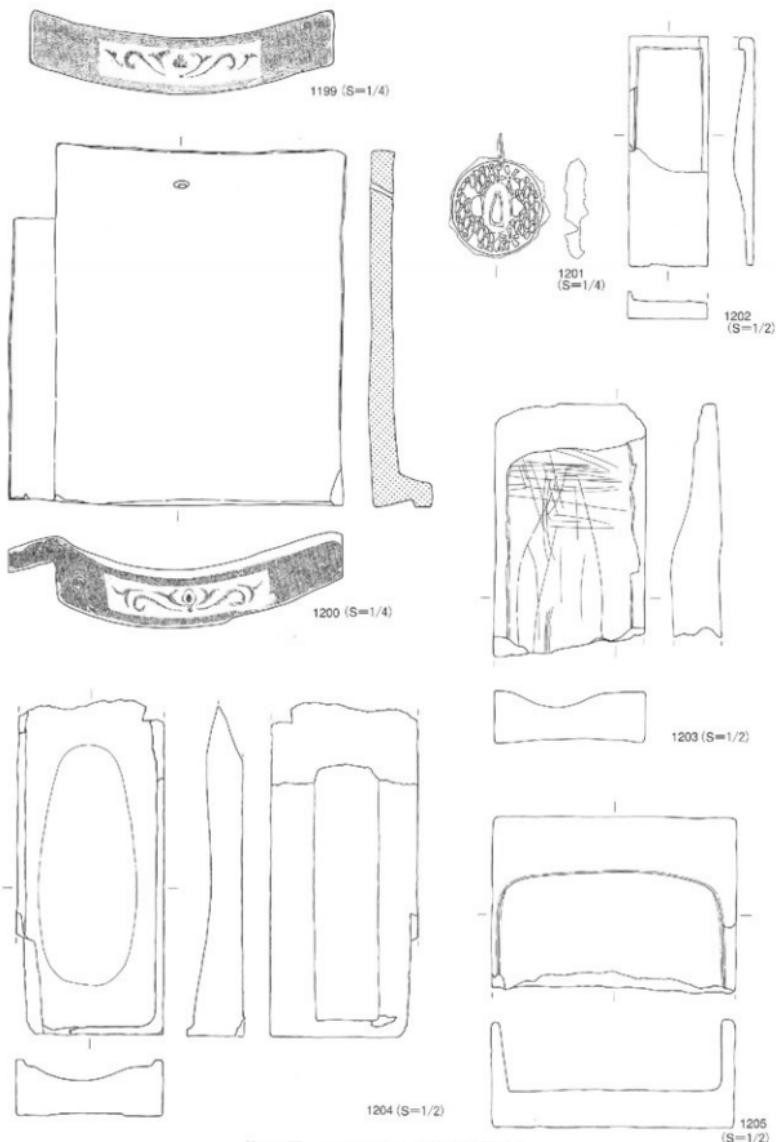
1183



第335図 SD1003出土遺物実測図(3)



第336図 SD1003出土遺物実測図(4)



第337図 SD1003出土遺物実測図 (5)

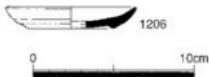
と刻印されている。1201は鉄製の鍔である。1202は粘板岩製の硯で小振りの携帯用ダビ硯である。1203は石製の硯である。石材は粘板岩を使用している。1204は粘板岩製の硯である。丘部の摩耗痕が非常に大きい。1205は石製品の硯である。石材は凝灰岩である。

溝 4 (SD1004) (第331図)

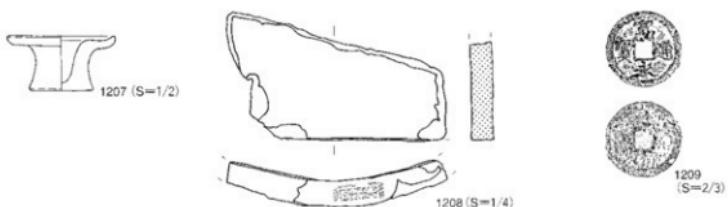
北側と東側をそれぞれ SD1003と1008の2つの溝によって区画された3区の屋敷地の一画から検出された、石積の側壁を持つ南北方向の溝である。造構の北側は SD1003と接し、南側は調査区中央の本調査区にのびている。側壁の石積は西壁側の残りはよいものの、東側は大部分の石が撤去され、北の SD1003と合流する付近で石積が検出されただけである。SD2019との交点から北側では、西壁部分には2面で検出されたSD2019に接する石垣の一部がそのまま溝の側壁として使用され、東壁側だけが新たに築かれているだけであるが、SD2019との交点の南側では両面とも新たに石を積んで側壁が築かれている。ただこの溝を1面の造構とすると、SD1008との間に東西約5mの幅の狭い南北方向の区画が生じることや、2面の溝 SD2019とつながり、その一部がSD1004の溝に取り込まれている点など不自然な点が残されていることから、1面に先行する時期の造構の可能性も考えられる。

出土遺物 (第338図)

1206は瀬戸美濃系陶器の皿である。高台内を除き灰釉が掛かる。口径は80mmを測る。



第338図 SD1004出土遺物実測図



第339図 SD1005出土遺物実測図

溝 5 (SD1005) (第331図)

3区で検出された幅約1m、深さ0.3mの東西方向の溝である。造構の西側は SD1008に、東側は SX1014にそれぞれ切れられ、現存する部分は長さ約11mである。側壁がながらかに掘り込まれた造構内には投棄されたと考えられる蝶が少量検出されているだけで、石積の側壁が築かれた痕跡は見あたらぬ。

出土遺物 (第339図)

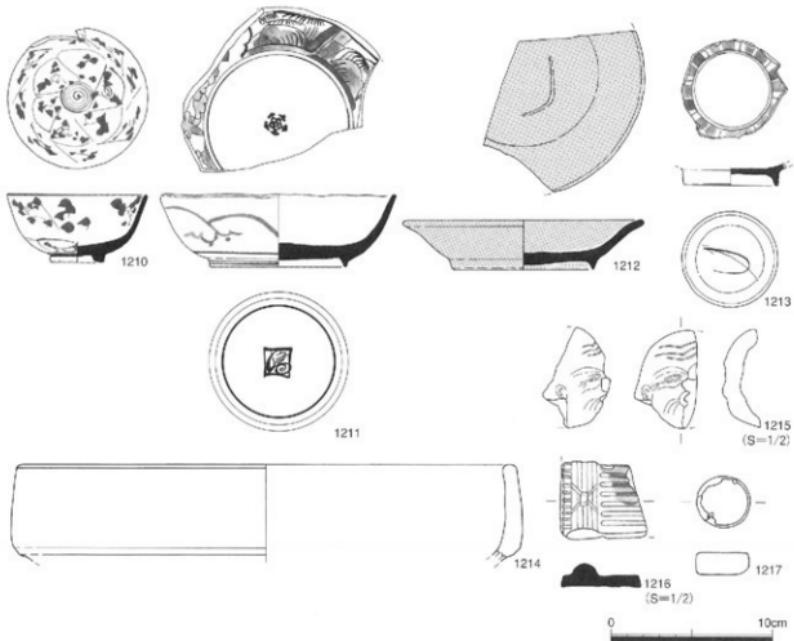
1207は土師質の器台である。手捏ね成形である。1208は半瓦で、「新治改」の刻印が見える。1209は銅銭の寛永通宝（古）である。

溝 8 (SD1008) (第331図)

第2遺構面で調査区中央の未調査区を挟んで2区から3区にかけて築かれた、区画を目的とした南北方向の石垣の約1m東側に石垣に並行するように新たに設置された溝である。溝の北端は、SD1003と1011の2本の溝につながり、南端は調査区外にまで延びている。溝の幅は50~60cmで側壁は比較的大型の礫を使用した石積によって築かれている。

出土遺物 (第340図)

1210は内外両面に唐草文が描かれた染付磁器碗である。1211は肥前の磁器皿である。丸形の輪花型作り併用で、外面には唐草、内面には岩竹見がそれぞれ染付により描かれているが、そのほかにも内面見込部の二重圓線内にはコンニャク印判による五弁花文が押され、高台外底面の方形枠内には「渦福」の崩しが書き込まれている。1212は肥前系の青磁端反皿である。内面見込部には刻文が見える。高台疊付部分は釉剥ぎが加えられ鉄漿が塗られている。1213は肥前系の磁器の高台部分である。高台外底面には染付により松葉が描かれている。1214は関西系土師質の焰烙である。型作りで、外面には煤が付着している。1215は型作成形で製作された土製の人形である。1216は陶器製の箱庭道具で橋である。型作成形で製作され上面には黄釉・緑釉がかけられている。1217は長径33mmを測る瓦質の加工円板である。



第340図 SD1008出土遺物実測図

溝 9 (SD1009) (第331図)

SD1008・1011の東側、約0.5~1mの距離から検出された南北方向の素掘の溝である。南端で幅約1m、深さ約0.5mを測る断面がU字型に掘り込まれた溝は北に向かうにつれて急速に浅くなり、途中からは掘り込みが消滅し遺構内に投棄されたと考えられる礫だけが約16mにわたって帶状に検出されている。

出土遺物 (第341・342図)

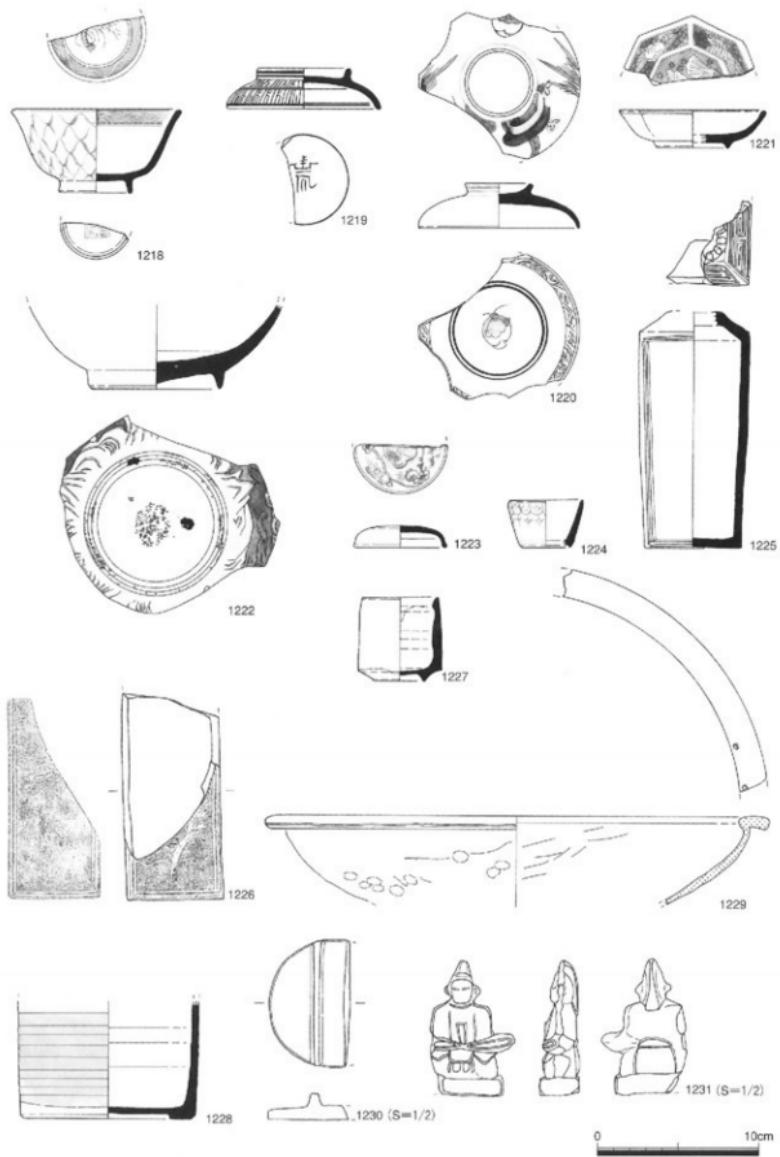
1218は肥前系の染付磁器碗である。口縁端部は螭反り、体部外面には網目文、内面には墨弾きによる連弧文が描かれ、内面見込部にも海老が描かれている。高台内には二重方形枠内に「福」が書き込まれている。1219は肥前系の広東形染付磁器碗の蓋である。外面には梵字文、内面見込には寿の変形字が描かれている。1220は瀬戸美濃系の染付磁器蓋である。外面には草、内面は四方博文が描かれ、内面見込部の二重圓線内には蝶が描かれている。1221は肥前系の磁器製八角型打皿である。型押成形で製作され、体部内面には墨弾きによる区画に松と橘、見込部には銀杏が描かれている。1222は磁器鉢である。口縁部は欠損しているが、外面には雲と波が陰刻により描かれ緑釉・鉄釉・黄釉による素三彩が施されている。高台内には砂目痕が残され、剥れ口には漆脈痕も見られる。産地は中国系景德镇窯で17Cのものである。1223は肥前系の磁器製合子の蓋である。外面には染付により花唐草が描かれている。1224は肥前系の磁器製猪口である。外面には染付により瓔珞文が描かれている。1225は備前系の陶器製角徳利である。板作り成形で製作され、堅く焼き締められた体部と肩部にはヘラ彫りによる陰刻が施されている。1226は備前系の陶器製角徳利である。板作り成形により成型され堅く焼き締められた体部には、ヘラ彫りによる松が陰刻され火棒痕も見える。1227は瀬戸美濃系の陶器製灰吹きである。筒型割り出し高台で、体部外面には灰釉がかけられている。口縁端部には敲打痕が残され、底部内外面は被熱している。1228は体部外面に鉄釉がかけられた在地の大谷焼の陶器製筒型容器である。1229は瓦質の培壘である。型打成形により製作された折縁の御財系で、口縁端部には2カ所穿孔があり、内外面に煤が付着している。1230はミニチュアの釜蓋である。土師質で型押成形により製作され把手が貼付けられている。1231は型作成形で製作された土師質の人物座像の人形である。1232は瓦質の茶釜である。型作成形で製作され、二耳が貼付けられた体部には茶道具が描かれている。

溝 11 (SD1011) (第331図)

調査区の北側で検出された南北方向の溝である。遺構の南側はSD1003・1008とそれつながり、北側は調査区外に延びている。もともとは石積の側壁を持つ溝であったものが、南側の一部を除いて石が抜き取られている。残された部分からすると、幅約20cmから30cmの比較的細い溝であったと考えられる。

出土遺物 (第343図)

1233は肥前系の磁器製の瓶で御神酒徳利である。らっきょう形で外面には染付により松竹梅が描かれている。脛付部分には釉剥ぎが加えられ砂が付着している。1234は肥前唐津の溝縁皿である。底部外面を除き内外面全体に灰釉がかけられている。内面見込部と底部外面には目痕が残されている。1235は関西系の陶器製甕である。頭部切立形で粘土紐積上成形で製作されている。内外面とも鉄釉がかけられているが、口縁部にはさらに墨釉が流しきかけされている。1236は京信楽系の円筒形の陶器製花生である。体部外面には灰釉がかけられ、露胎のまま残された底部には「ヒエ 二十・・」の墨書が残されている。1237は陶器製のミニチュアの土瓶蓋である。型作成形で、上面には鉄釉がかけられている。



第341図 SD1009出土遺物実測図(1)

土坑

土坑 2 (SK1002) (第344図)

1区のC-3・4グリッドにまたがって検出された長軸を南北方向にとる土坑である。遺構の両端が大きく削平されているため正確な大きさは不明であるが、残された部分は長さ約1.5m、幅0.7mを測る土坑である。深さ約0.4mのほぼ直角に近い角度で掘り込まれた断面方形の遺構内の3層に分かれる埋土は第2層から陶磁器や土師器、瓦の破片が多く出土したほか、最下層には炭化物が多く含まれている。

出土遺物 (第345図)

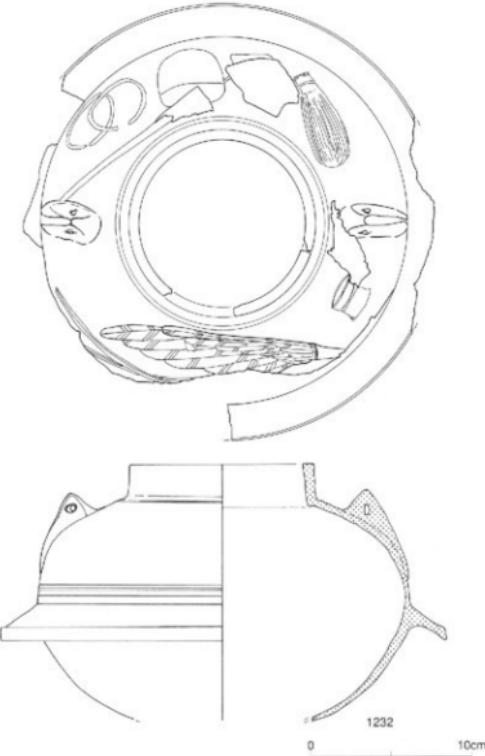
1238は肥前系の外青磁の染付碗蓋である。外面は高台内の二重方形枠内に「満福」の銘が書き込まれ、内面の口縁端部付近には染付による四方棒に宝文、見込部の二重圓線内には五弁花文がそれぞれ描かれている。1239は瀬戸美濃系の陶器碗である。体部外面には僅かであるが染付が見える。高台部分を除き内外面全体に灰釉がかけられている。1240は水鳥形の土師質人形である。型作り貼合せによって製作され、緑釉と透明釉がかけられ土鈴になっている。1241は土師質の風炉である。内面には突起が貼付けられ、突起脇には穿孔が7カ所見える。口縁部内面には煤が付着している。

土坑 8 (SK1008) (第346図)

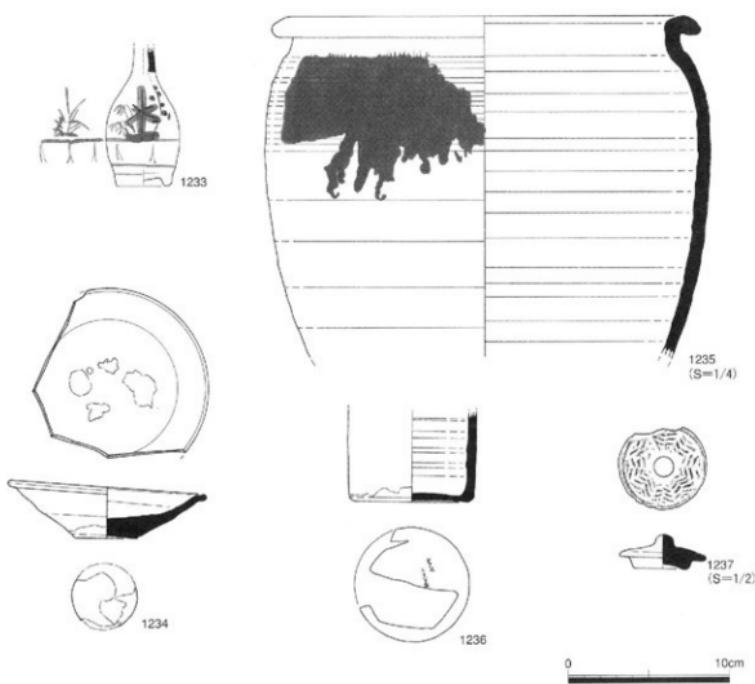
1区のF-4グリッドから検出された長軸を南北方向にとる長さ約2.3m、幅1.3mの隅丸長方形の土坑である。断面が皿状で深さ約0.1mの遺構内には砂質の黄褐色土とともに瓦片や礫が出正在している。

出土遺物 (第347図)

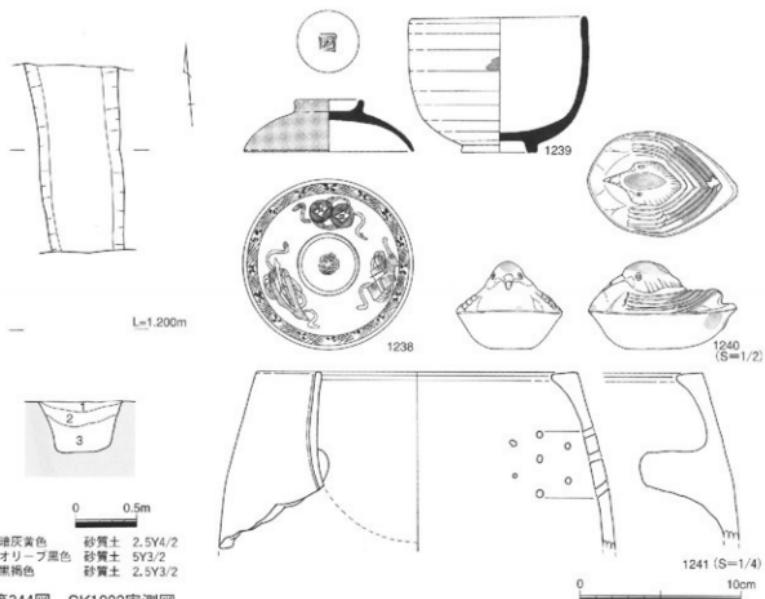
1242は肥前系の染付磁器皿である。輪花型打成形の体部は外面に唐草、内面に蛸唐草が描かれ、内面見込部の二重圓線内にも環状松竹梅が描かれている。高台部分は蛇ノ目凹型高台で、内面の二重方形枠内には銘が書き込まれている。1243は肥前系の白磁鉢である。浅丸形で口錆装飾が施されている。



第342図 SD1009出土遺物実測図(2)

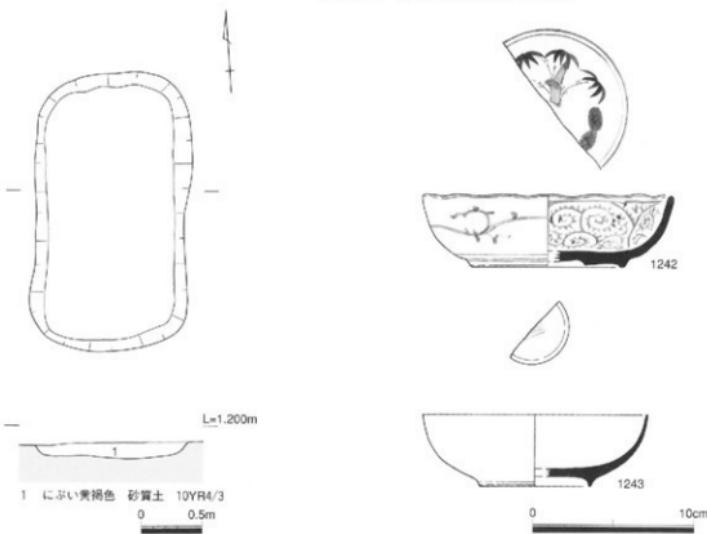


第343図 SD1011出土遺物実測図



第344図 SK1002実測図

第345図 SK1002出土遺物実測図



第346図 SK1008実測図

第347図 SK1008出土遺物実測図

土坑 9 (SK1009) (第348図)

1区のF-6・7グリッドで方形の石組構造SX1027に隣接して検出された、直径約0.6m、深さ0.3mの大きさの円形の掘り込みの中に陶器の大甕が据えられた遺構である。土坑の北側にはSX1027の南壁の石組が東西にのび、それと直交して置かれた1027の西壁の石は南端が南壁の石組のラインよりもさらに南側に突き出し、SK1009の西側で検出された南北方向に据えられた長さ約60cmの片岩とつながっている。のことから調査では発見されなかったが、SK1009の周囲にもSX1027と同じような方形の石組が組まれていた可能性が高い。その場合、石組の延長部分にはSA1006の柱穴があることから、SX1027のように石組がSA1006の礎石の役割をはたしていたことも考えられる。

出土遺物 (第349図)

1244は口径508mm、器高650mmを測る陶器製の大甕である。口縁端部は水平に拡張され断面がT字形に仕上げられている。

土坑 17 (SK1017) (第350図)

1区のL-3グリッドから検出された長軸を東西方向にとる楕円形の土坑である。遺構の南側の一部を削平されているため正確な大きさは不明だが、残された部分は東西約1.6m、南北0.8mを測る。浅い皿状に掘り込まれた深さ0.1mの遺構内には焼土粒や炭化物を多く含んだオリーブ黒色土が堆積している。

出土遺物 (第351図)

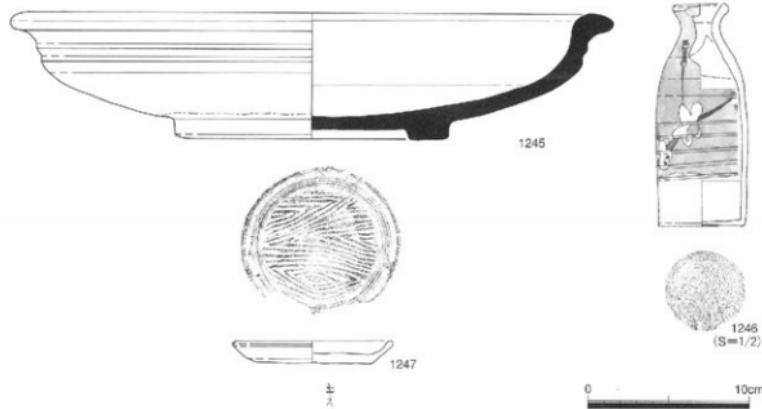
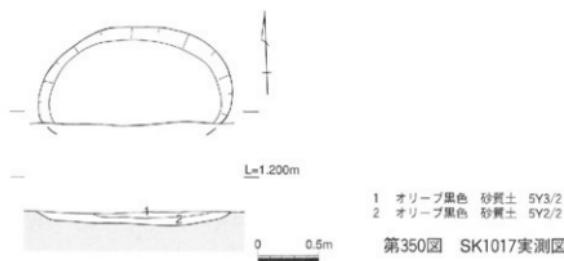
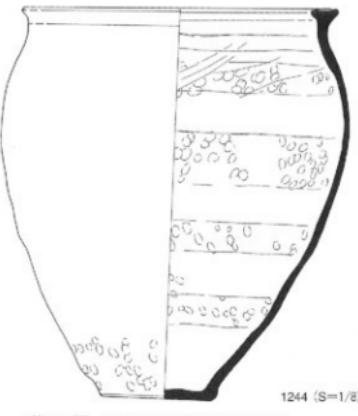
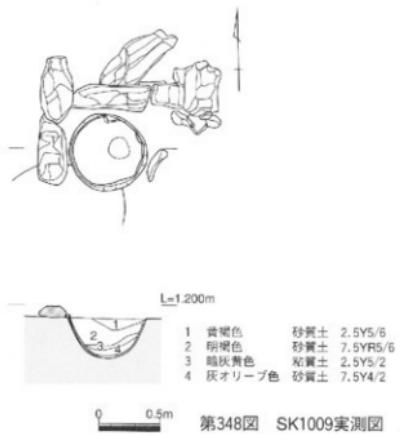
1245は玉縁状口縁を持つ瀬戸美濃系の陶器製大皿である。体部外面には沈線が2条施され、高台を除き灰釉が掛けられている。また、内面見込には胎土目痕が残されている。1246は土師質のミニチュア德利である。外面は沈線と白・鉄・緑釉により折枝梅が描かれ、底部には同様糸切り痕が残されている。1247は土師質の皿である。内面にはヘラ彫りにより木目が陽刻され透明釉がかけられている。外面は無釉で底部には全面に布目痕が残され、「キス」の墨書きが書き込まれている。

土坑 19 (SK1019) (第352図)

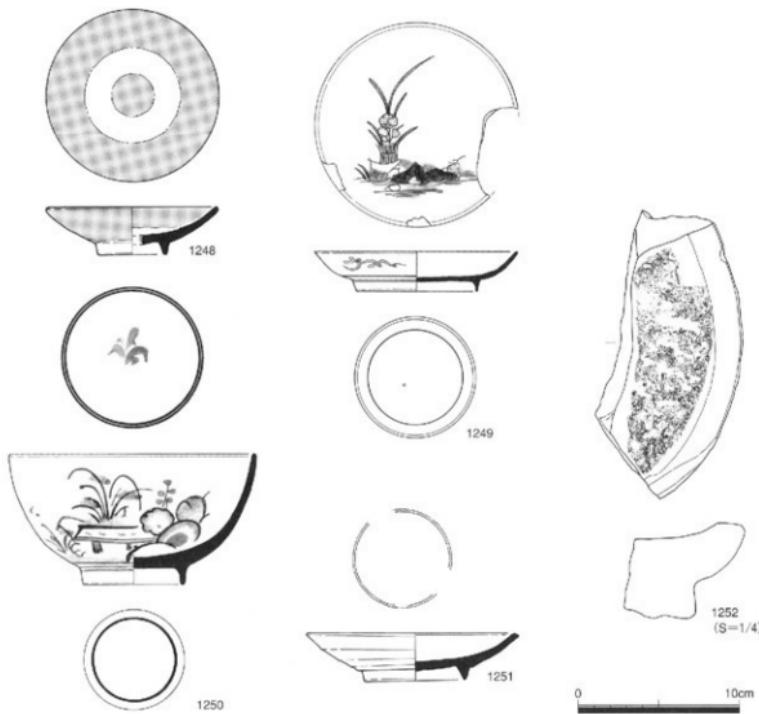
1区のL・M-5グリッドにまたがって検出された長軸を東西方向にとる長さ約3.1m、幅0.9mの長楕円形の土坑である。遺構の大きさに対して深さは0.2mほどしかなく、底面には不規則な凹凸が残されている。遺構内の埋土には全体に少量の炭化物と焼土粒が混入し、3層から5層にかけては瓦や陶磁器の破片が比較的多く含まれていることから、廃棄土坑と考えられる。

出土遺物 (第353図)

1248は肥前系の青磁小皿である。高台部分は露胎で内面見込部には蛇ノ目釉剥がれが施されている。1249は肥前系の染付磁器皿である。外面には唐草文、内面には草花と芝東が描かれ、高台内にはハリ支え痕が1点認められる。1250は瀬戸美濃系の染付磁器鉢である。外面には家屋と草花、内面見込部には重圓線内に植物が描かれている。また、その他にも高台外底面に圓線が引かれている。1251は瀬戸美濃系の陶器製小皿である。外面は底部を除き灰釉がかけられ、内面見込部には重ね焼きの痕が残されている。1252は石製の臼（茶臼）である。



第351図 SK1017出土遺物実測図



第353図 SK1019出土遺物実測図

土坑 24 (SK1024) (第354図)

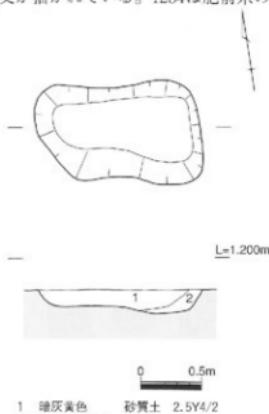
1区のN-9グリッドから検出された長軸を東西方向にとる長さ約1.4m、幅0.7mの不整梢円形の土坑である。断面が皿状に掘り込まれた深さ約0.2mの浅い遺構内には炭化物と焼土粒を少量含んだ縮まりの良い砂質土が堆積している。

出土遺物 (第355図)

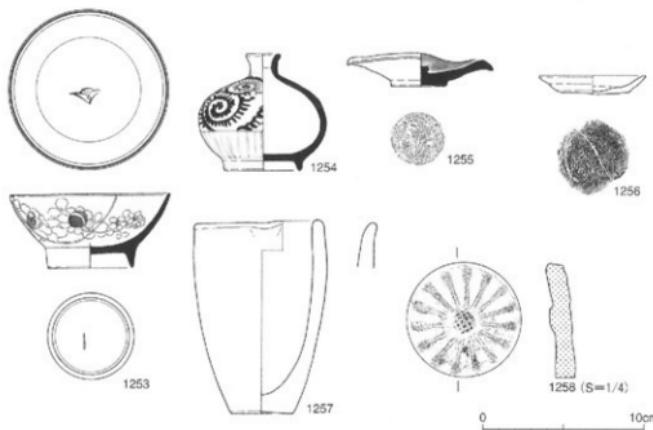
1253は肥前系の広東形磁器碗である。高台置付け部分は露胎のまま残され内側には焼窯部印「一」がある。体部外面には色絵により花が、内面見込部は圓線内に波瀬文が描かれている。1254は肥前系の磁器製髪油壺である。無首肩丸形で外面には染付により銷唐草が描かれている。1255は在地の大谷焼の陶器蓋である。落とし蓋形で口縁が変形している。底部には回転糸切り痕が残され、上部には鉄種が施釉されている。1256は土師質の小皿である。底部の切り離しには回転糸切り技法が使用され内面見込部は押圧されている。1257は土師質の小壺で、注口が見える。1258は菊花(15弁)紋が配された小菊瓦の瓦当部である。

土坑 27 (SK1027) (第356図)

2区のA・B-10グリッドにまたがって検出された長軸を南北方向にとる長さ約3.4m、幅2.2mの大きさの長方形の土坑である。断面が逆台形状に掘り込まれた深さ0.7mの遺構の埋土中にはブロック状の焼土や炭化物とともに、陶磁器片や瓦片、下駄などの木製品や礫などが



第354図 SK1024実測図

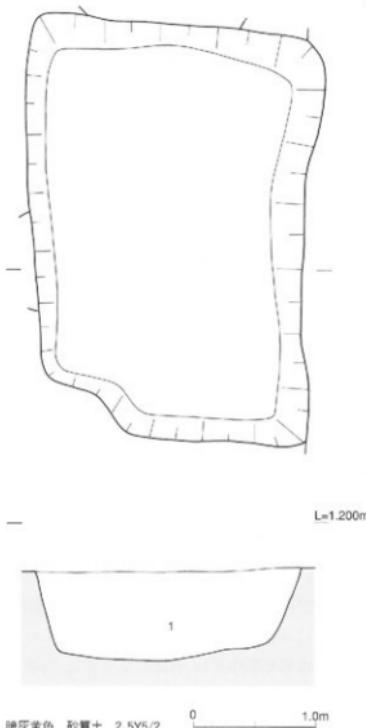


第355図 SK1024出土遺物実測図

多量に含まれていることから、廃棄土坑と考えられる。

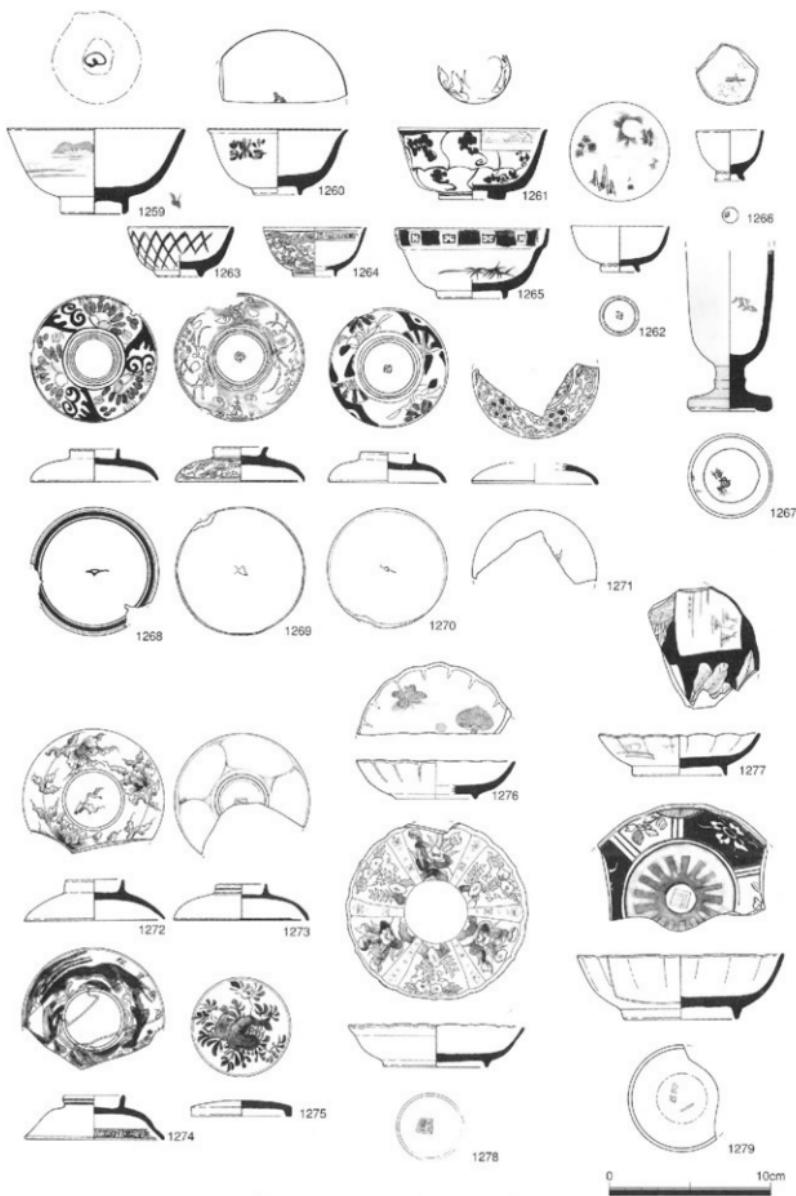
出土遺物（第357～366図）

1259は肥前系の磁器碗である。成形のいびつな粗製品で、内面見込み部には蛇ノ目釉剥ぎが施されアルミナ土が塗られ文様が描かれているが図柄は不明である。19C後半のものである。1260は瀬戸美濃系の磁器製端反碗である。口縁部には口錫装飾が施され、外面と内面見込み部には篆文字が染付により描かれている。高台疊付け部分は釉剥ぎされている。1261は肥前系の染付磁器碗である。外面には葡萄、内面には四方櫻文が描かれているが、その他にも内面見込み部には簡略化された松竹梅円形文が描かれている。蛇目凹形高台である。1262は肥前系の磁器製杯である。型紙刷りの色絵で内面に月と松が描かれている。1263は肥前系の染付磁器碗である。体部外面は斜格子文様、内面見込み部には松葉が描かれている。1264は肥前系の端反形の磁器碗である。外面には素描による花唐草、内面には雷文がそれぞれ染付により描かれている。1265は肥前系の磁器碗である。口縁部が1段膨らんだ形の蓋物で、外面には白釉と染付により笠と四方櫻が描かれ、高台疊付部分は露胎のまま残されている。1266は肥前系の磁器製盃である。外面には染付による連弧文、内面には色絵による波と船がそれぞれ描かれ、高台外底面には「田」の鉢が書き込まれている。1267は関西の播磨・東山焼の磁器製台付小杯である。外面は鉄釉がかけられ、内面には染付による草が描かれている。高台は蛇目高台で「播磨製」の書き込みがあり、疊付けには墨書「ヌヨ」が見える。1268は瀬戸美濃系の磁器碗の蓋である。体部外面には波濤文・花卉文・團線、内面には團線・帶線が上絵付により描かれているが、そのほかにも内面見込み部に「岩に碎ける波濤」の略図が描かれている。1269は関西系の磁器の色絵上絵付け蓋で、幕末のものである。1270は瀬戸美濃系の磁器碗の蓋である。体部外面には波濤文・花卉文・肩、内面には團線が上絵付により描かれているが、その他にも内面見込み部に「岩に碎ける波濤」の略図が描かれている。1271は肥前系の磁器の蓋である。外面には染付と色絵により花唐草と二重團線が、また、内面見込み部には染付により雲文が描かれている。1272は肥前系の染付磁器の蓋である。外面には素描により牡丹花文が描かれ、高台疊付部分は露胎のまま残されている。1273は瀬戸美濃系の磁器蓋である。口縁端部に口錫

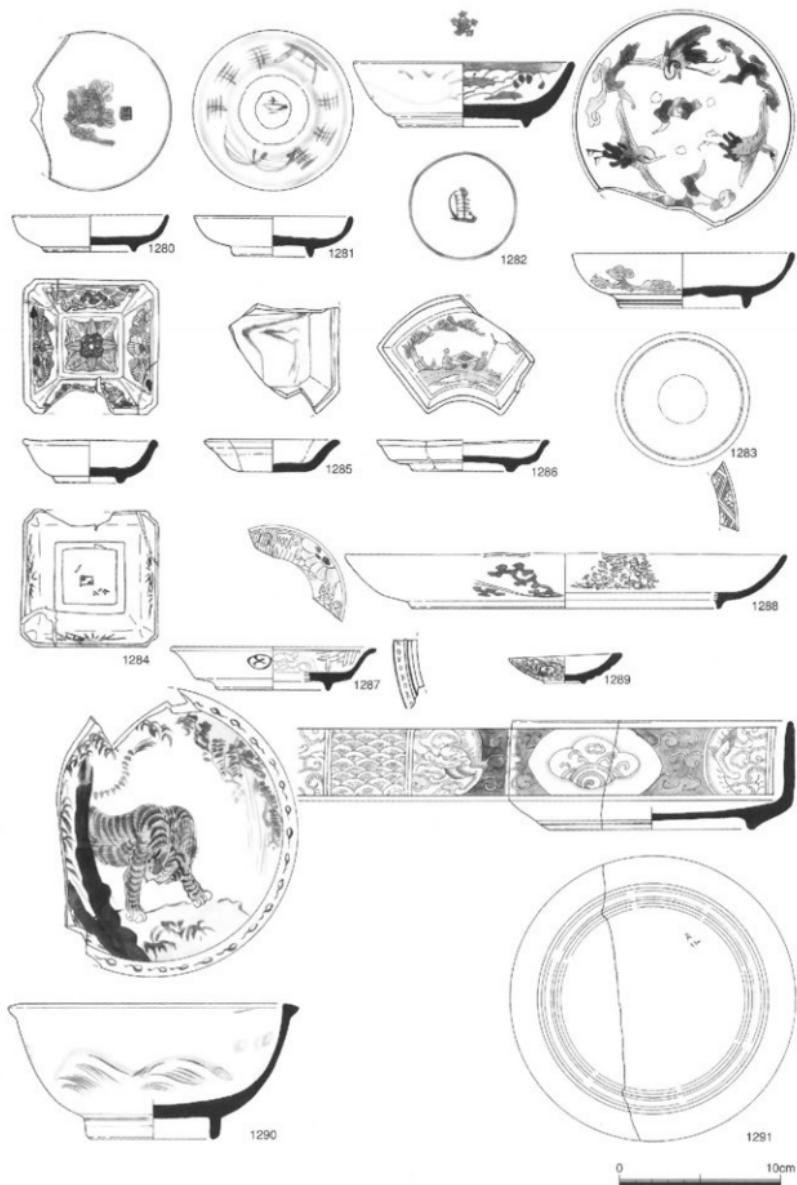


第356図 SK1027実測図

装飾が施されるほか、体部外面には染付により梢円が描かれ、高台外底面には変形の銘が書き込まれている。1274は関西系の磁器蓋である。体部外面には富士山雲波・「写日春戸」、内面には雷雲がコバルト染付により描かれている。1275は肥前系の磁器製合子の蓋である。外面上部には染付により柘榴が描かれている。口縁部は無釉である。1276は肥前系の磁器小皿である。型打併用の輪花形で、内面には墨弾きによる蝶と草花が描かれている。1277は肥前系の磁器製輪花皿である。型打併用による成形で製作され、高台脛付け部分の釉は剥ぎとされている。体部外面には船・鳥、内面には市松(山水文)が染付により描かれている。1278は菊花型打ち成形で製作された肥前系の染付磁器皿である。口縁端部には口銷が施されている。1279は肥前系の磁器製色絵皿である。輪花型打併用成形で製作され焼継痕が見られる。体部内面には芙蓉手が描かれている。内面見込部は一度文様と銘を描いた所に蛇ノ目釉剥ぎを施した後、再度上絵付により放射状文が描かれている。蛇ノ目四形高台で焼継師印が「ヒロ1」と描かれている。1280は染付磁器の丸形小皿である。口縁部には口銷装飾が施され、内面には型押により菊と鉢が陰刻され呉須により染付されている。1281は肥前系の磁器製小皿である。丸形で内面見込部分には蛇ノ目釉剥ぎが施されている。体部内面には松原と遠山に鳥居、内面見込部には船がそれぞれ染付で描かれている。1282は肥前系波佐見の染付皿である。外面には唐草、見込にはコンニャク印判による五弁花が描かれている。1283は肥前系の磁器皿である。外面には團線・帯線と型紙刷りによる雲、内面には團線と鶴が染付により描かれているが、そのほかにも内面見込部には型紙刷りによる鶴が描かれている。高台は蛇ノ目四形高台で、見込み部にはハマ痕が3点認められる。1284は型打成形により製作された磁器製の四角形の小皿である。内面には草花の陽刻文、外面には筆が、高台内には方形枠内に「十三」と鉢が上絵付により描かれている。ガラス焼継痕が數カ所に見られ、高台内には焼継師印「スナ・1」が残されている。1285は関西系の磁器製六角形小皿である。型押成形によって製作され胎土には鉄泥が練込まれている。1286は肥前系の磁器製変形手塙皿である。型打により扇形に成形され、内面には染付により人物と松が描かれている。1287は型作成形で製作された肥前系の磁器製端反小皿である。外面には「〇」が、内面には花卉・紗胜形が染付と色絵によって描かれている。1288は肥前系の磁器製大皿である。型打による成形で製作され、外面には唐草文、内面には割菊花草文がそれぞれ染付によって描かれている。1289は瀬戸美濃系の白磁の紅直である。型作成形で製作され、外面は露胎のまま残され蛸唐草が陽刻により描かれている。1290は肥前系の磁器製の鉢である。外面には竹と宝、内面には竹と虎が染付により描かれている。高台部分は露胎のまま残されている。1291は肥前系の色絵磁器の段重である。1292と同一品であるが、底部の高台の違いから下段に使われたものと考えられる。焼継痕があり、底部には焼継師印が「スル」とある。1292は肥前系の色絵磁器の段重で、上段に使われたものである。染付後に上絵付けがされている。焼継の痕が見られ底部には焼継師印が「スル」とある。18Cの後半のものである。1293は底部が削り底の瀬戸美濃系の磁器製小瓶である。らっきょう形の御神酒徳利で、外面には松竹梅が染付により描かれている。1294は関西系の磁器製徳利である。外面には唐人林間図に草花文・雷文が上絵付により描かれている。1295は肥前系の磁器で蓋物の身である。胴丸形で外面には染付により魚と蟹が描かれている。クリ底の底部は露胎のまま残され墨書が「ナワ」と見える。1296は肥前系の磁器製合子の身である。外面には染付により線が描かれ、平底の底部は無釉で墨書が「ツ□」と描かれている。1297は肥前系の磁器製の散り蓮華である。型作りで製作され内外面とも素描による牡丹・草が染付で描かれている。底部は露胎のまま残されている。1298は瀬戸美濃系の陶器碗である。外面には鉄絵により椿が描かれている。1299・1300は京信楽系の陶器製小杯である。腰張攣反形で外面には鉄絵により立鶴

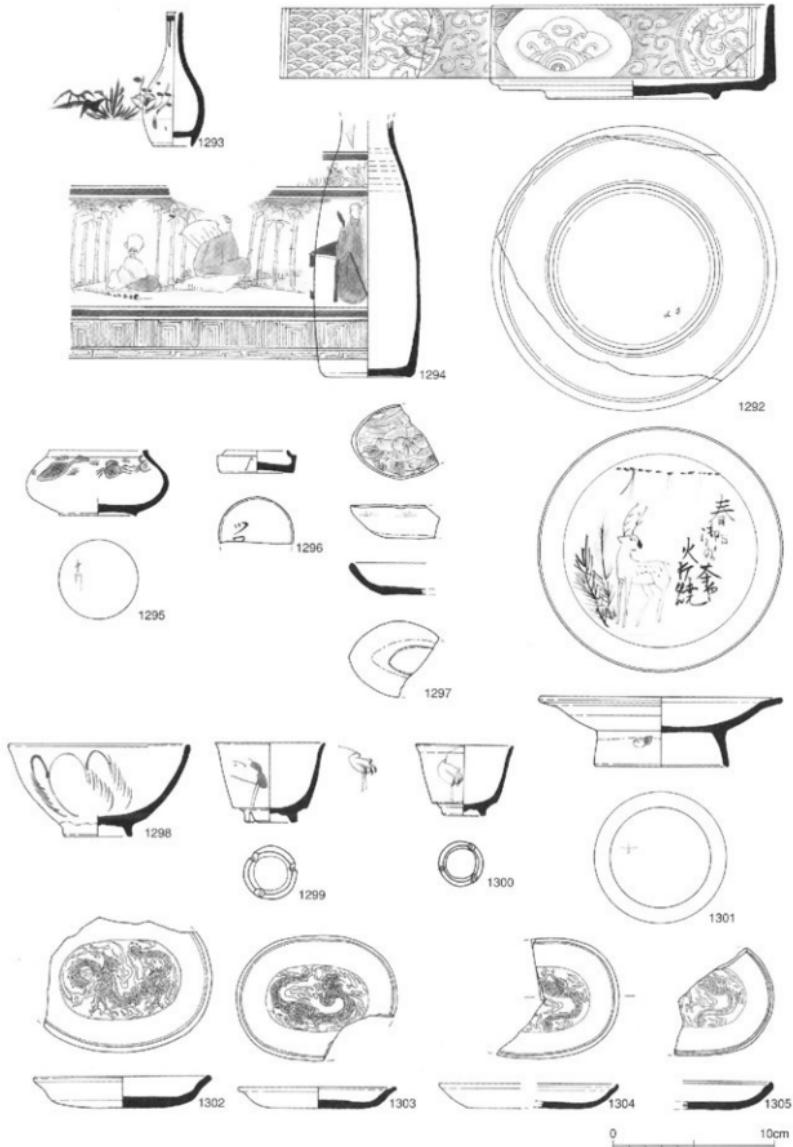


第357図 SK1027出土遺物実測図 (1)

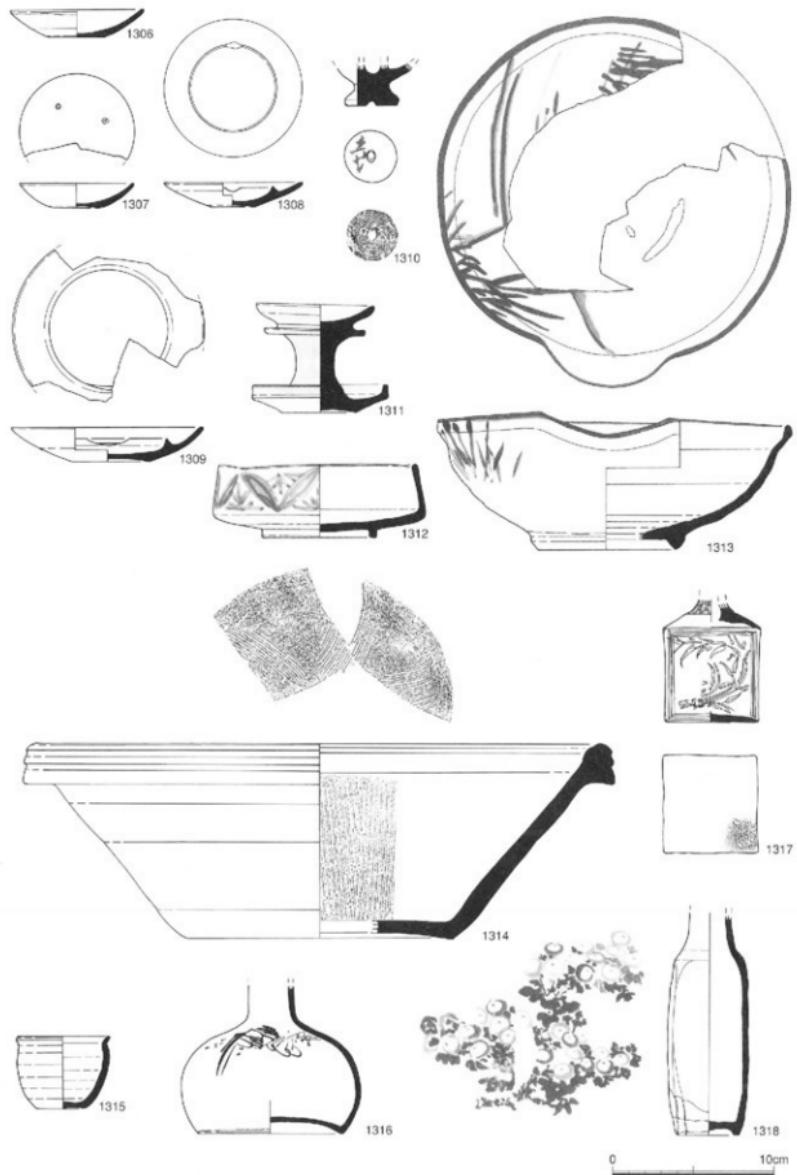


第358図 SK1027出土遺物実測図(2)

が描かれている。割り高台の高台部分を除き灰釉がかけられている。1301は関西系の陶器皿である。内面には注連文・松・鹿が鉄絵で描かれ、商標「春日御子茶や火打焼」の書き込みがある。高台は貼付けによる折縁形の高高台で高台外底面には瓢箪形の刻印が押され「赤ハタ」と読める。1302～1305は在地、珉半の小判形の陶器製小皿である。製作成形で製作され、内面には型押陰刻により雲龍が描かれている。1302は黄釉が全面に施され、底部にはハリ支え痕が見える。1303は綠釉が内外面全体に施釉され、底部にはハリ支え痕が見える。1304は全面に黄釉がかけられ内面見込部にはハリ支え痕が見える。1305は黄釉が全面に施され、底部にはハリ支え痕が見える。1306・1307は京信楽系の陶器製灯明皿である。1306は内面には灰釉がかけられ、口縁部には灯心油痕が見える。1307は外面は無釉だが内面には灰釉がかけられ目痕が見える。口縁部には煤が付着している。1308は内面に灰釉がかけられた京信楽系の陶器製灯明受皿である。1309は京信楽系の陶器製の灯明受皿である。内面にのみ灰釉がかけられている。1310は陶器製の秉燭である。台付のたんころ型で底部の切り離しには回転糸切り技法が使用されている。内外面ともに船釉がかけられ、底部には「角」の墨書きが見える。1311は在地の大谷焼の附器製灯明受皿である。同心円削りが施される底部を除き铁釉がかけられている。1312は京信楽系の方形の陶器鉢である。型打併用で製作された器壁は内傾している。外面には笠の樂文が鉄絵により描かれている。1313は瀬戸美濃系の陶器鉢である。鉄釉と呉須による染付で内外面に草が描かれている。内面見込み部と注口部には重ね焼痕が見える。1314は堺明石系の陶器擂鉢である。擂口単位は12条／3.5cmを測る。見込擂目は放射状に施されている。1315は全面に塗土（朱泥）が施された陶器製の小壺で、内外には轆轤目が残されている。1316は京信楽系の陶器瓶である。体部外面には鉄絵が描かれ切り底の底部を除き灰釉がかけられている。底部は全面に煤が付着し被熱痕も見られる。1317は備前の陶器瓶（角徳利）である。製作頭部貼付で製作され、体部外面には陰刻により笠竹が描かれている。底部には方形の枠内に「大」の窯印が認められる。1318は京信楽系の陶器瓶（四方徳利）である。灰釉、上絵付の五形で外面には菊が描かれている。1319は在地の大谷焼の陶器瓶である。船形徳利で鉄釉が施されている。1320・1321は在地系大谷の陶器徳利である。外面には鉄釉が施釉され体部には刻印が認められる。1322は外面に鉄釉がかけられた在地産の陶器製の瓶である。1323は丹波系の陶器瓶である。肩衝形で体部外面には轆轤搔目が認められる。外面には底部を除き塗土（鉄泥）が施されている。1324は在地系の陶器の仏花瓶である。黒褐色の鉄釉を高台部分を除く外面全体にかけ、露胎のまま残された高台部分は疊付け際に面取りが行われている。高台外底面には不明であるが墨書きが残されている。1325は瀬戸美濃系の陶器製水瓶である。外面には流水刻・ヘラ彫り・櫛穴が鉄・灰・綠釉で描かれている。内面見込み部には胎土目痕が5カ所に見える。1326は京信楽系の陶器製木鉢である。端反桶形で底部が穿孔されている。外面には染付と墨書きにより斜格子と籠目が描かれている。1327は在地系大谷の陶器植木鉢である。外面は鉄釉が施され、にぶい赤褐色を呈している。1328は陶器製の丸形火鉢である。底部の中央には再加工による穿孔が見られ植木鉢に転用されたものと思われる。外向は鉄釉がかけられ底部には梢円形の刻印で「松本」と表記されている。1329は陶器製の土鍋である。口縁部外面には把手、底部には二足が貼付けられている。体部の外面上半部には呉須により笠が描かれ、内面は鉄釉がかけられている。1330はにぶい黄澄を呈する胎土を持つ陶器製の行平鍋である。体部外面には飛鏑装饰が施され錫釉がかけられ、内面にも灰釉がかけられている。底部には煤の付着が顕著である。1331は陶器製の行平鍋である。内面全体と外面の口縁部付近には柿釉がかけられている。1332は陶器製の行平鍋である。小型で底部は回転糸切りされている。外面は無釉だが内面には胎釉が施されている。1333は外面に飛鏑装饰が施された陶器製の行平である。

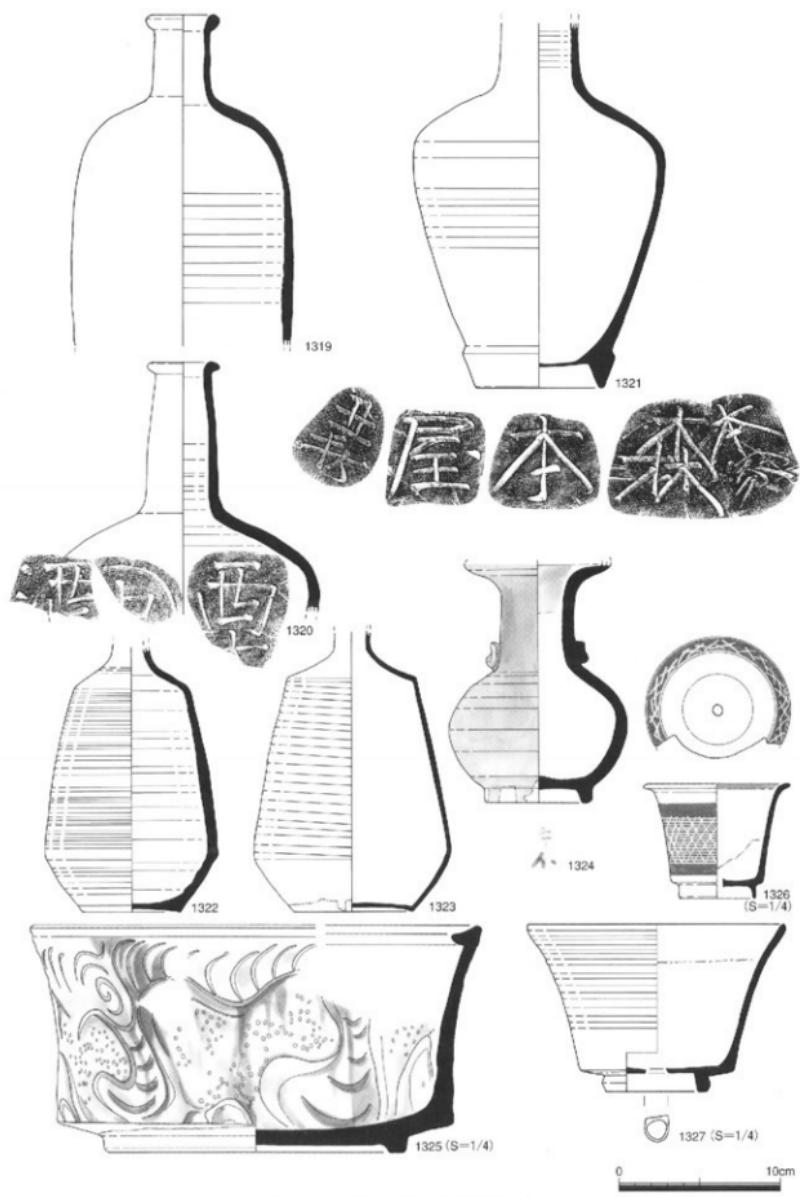


第359図 SK1027出土遺物実測図(3)

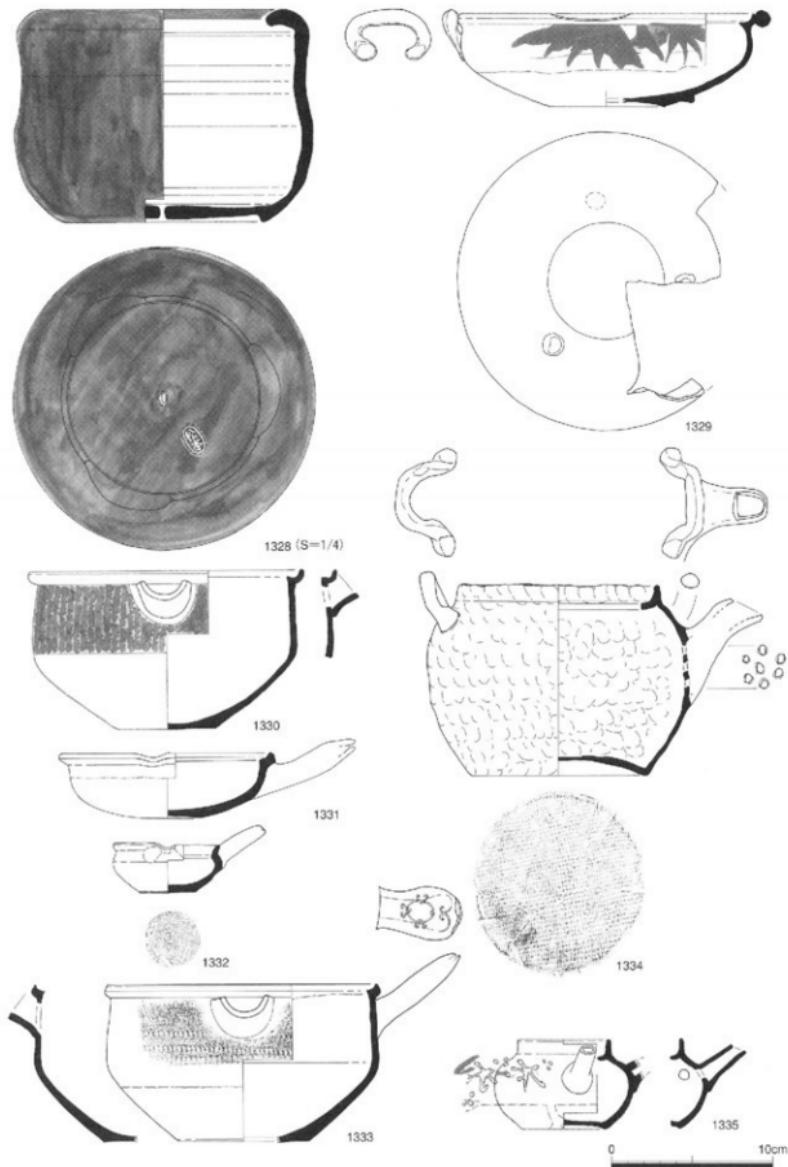


第360図 SK1027出土遺物実測図 (4)

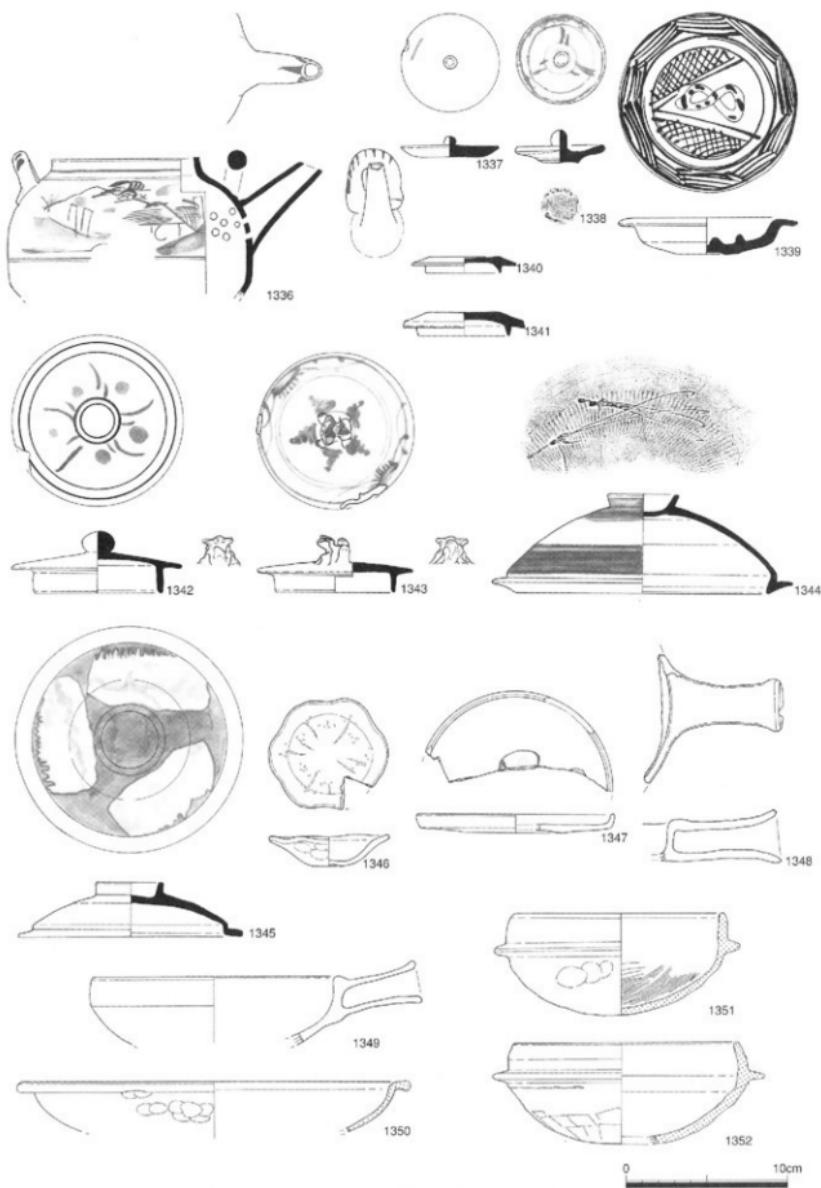
る。体部外向は塗土（鉄泥）、内面は掲釉がかけられ、底部には煤が付着している。1334は関西系の陶器製土瓶である。型作成形で製作され、内外面ともに指頭痕が無数に残され底部には布目痕がはっきりと認められる。耳部と注口部分は貼付けられている。1335は陶器製の小型の横手胴丸形急須である。体部外面には鉄絵で樹木が、筒描で花が描かれている。口縁部内面と底部外面を除き灰釉がかけられている。底部は同心円削りが施されている。1336は陶器製の土瓶である。外面には山水・屋根が鉄絵により描かれている。1337は陶器の蓋である。天井部には摘みが貼付けられ、外面には塗土（鉄泥）が施されている。1338は関西系の陶器製の蓋である。1339は摘み部に8の字の粘土紐が貼付けられた陶器の蓋である。上部には白化粧土が塗られ呉須で文様が描かれている。1340は京信楽系の陶器製の蓋である。外面には灰釉が施されている。1341は京信楽系の陶器の蓋である。外面には灰釉が施されている。1342は関西系の陶器製土瓶の蓋である。1343は摘み部に狛犬の人物が貼付けられた陶器の蓋である。上部には白化粧土が塗られ呉須で文様が描かれている。1344は関西系の陶器製行平鍋の蓋である。外面には回転施文と筒描による松葉文が描かれている。1345は陶器製の行平の蓋である。口縁部は無釉で、外面には灰釉と白泥により打ち刷毛目が見える。1346は型作成形により製作された土師質の極小皿である。外面は無釉で指頭痕が残され、内面は梅花が型打され灰釉と綠釉がかけられている。1347は土師質の皿である。盤形の削り底で内面見込には鉄絵が描かれている。1348は土師質の十能の把手で柄の部分は中空になっている。1349は貼付による把手を持つ土師質の焰燈鍋である。1350は瓦質の焰燈である。1351は瓦質の羽釜である。型押貼付成形で製作され、体部外面には黒斑があり底部は外面から内面向けて穿孔されている。1352は瓦質の羽釜である。型押貼付成形で製作され外面には接合痕がある。1353は瓦質の土瓶である。茶筌形で鉄瓶風小突起が型押しされている。1354は型作により製作された人顔をかたどった土製人形である。1355は型作り貼合せ成形で製作された土製人形である。外面には雲母が付着している。1356は型作り貼合せ成形で製作された土製の狐彫像の人形である。1357は陶器製のミニチュアの行平鍋である。内面には灰釉がかけられている。1358は陶器製のミニチュア食器の蓋である。型作貼付成形で製作され外面には鉄釉がかけられている。1359は陶器製のミニチュアの碗である。底部を除きほぼ全面に柿釉がかけられている。1360は肥前系のミニチュアの磁器製角形皿である。型作成形で製作されている。1361は土製のミニチュア七輪である。型作成形で内面には指オサエ痕が見える。1362は土製のミニチュアの急須蓋である。1363は土製のミニチュア羽釜である。型作成形で内面には指オサエ痕が見える。1364は土製の壺である。小型で外面には輪廻口が見える。口縁部外面と内面全体に掲釉がかけられている。1365は土製のミニチュア食器の蓋である。1366は土製の泥面子の芥子面である。十六菊が型抜型押成形されている。1367は土製の泥面子の面打である。1368は土製の泥面子の芥子面である。虫が壓押されている。1369は土製の泥面子の面打である。宝珠が型抜型押成形されている。1370は土製の泥面子の面打である。宝珠が型抜型押成形されている。1371は土製の泥面子の面打である。天保錢が型押成形されている。1372は土製の泥面子の芥子面である。人顔が型作成形されている。1373は土製の泥面子の面模である。般若が型押されている。1374は直徑42.5mmを測る瓦質の加工円板である。1375は瓦質の加工円盤である。長径52mmを測る。1376は稻丸紋が配された蜂須賀家替紋の軒丸瓦である。1377は瓦当部に丸ノ中通三巴の紋が配された軒丸瓦である。1378は菊花紋が配された軒丸瓦である。1379は木製品の蓋である。表面には墨漆が付着し、穿孔が4ヶ所に認められる。1380は木製品の曲物である。中央部に1点穿孔が認められる。1381・1382は木製品の箸である。1383は木製品の栓である。長径は44mmを測る。1384は木製の差し歛下駄である。全面に黒漆が塗られている。1385は木製の差し歛下駄である。



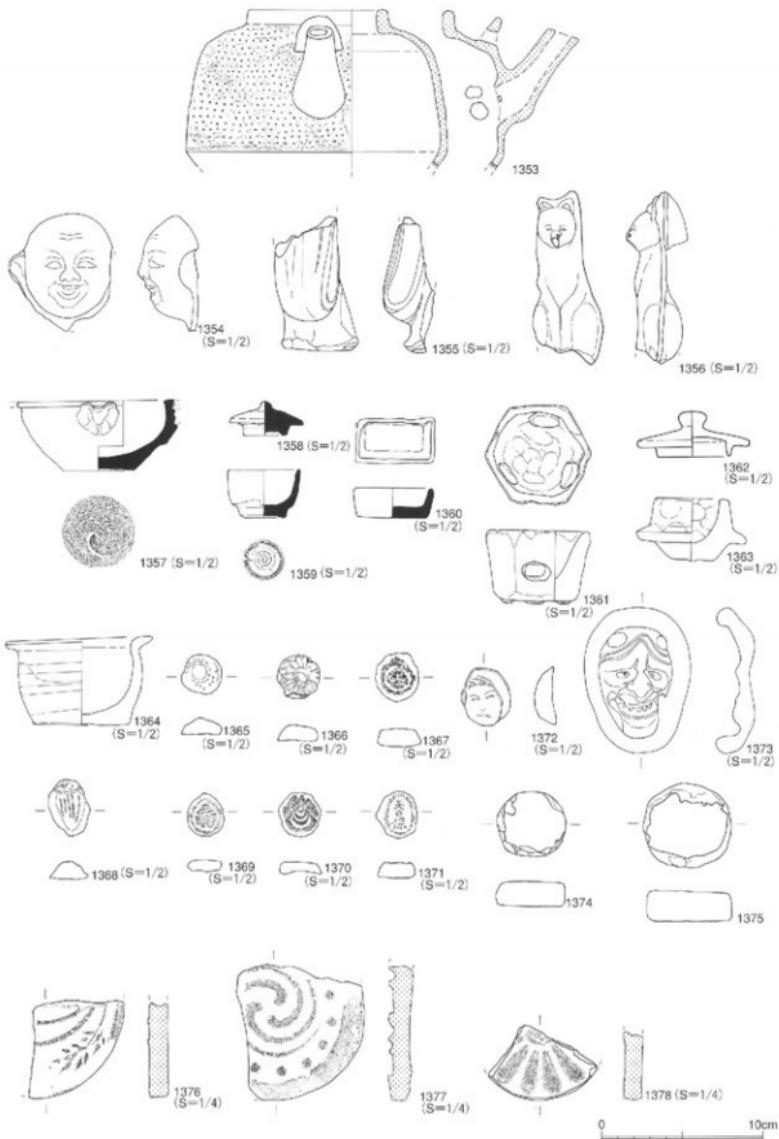
第361図 SK1027出土遺物実測図(5)



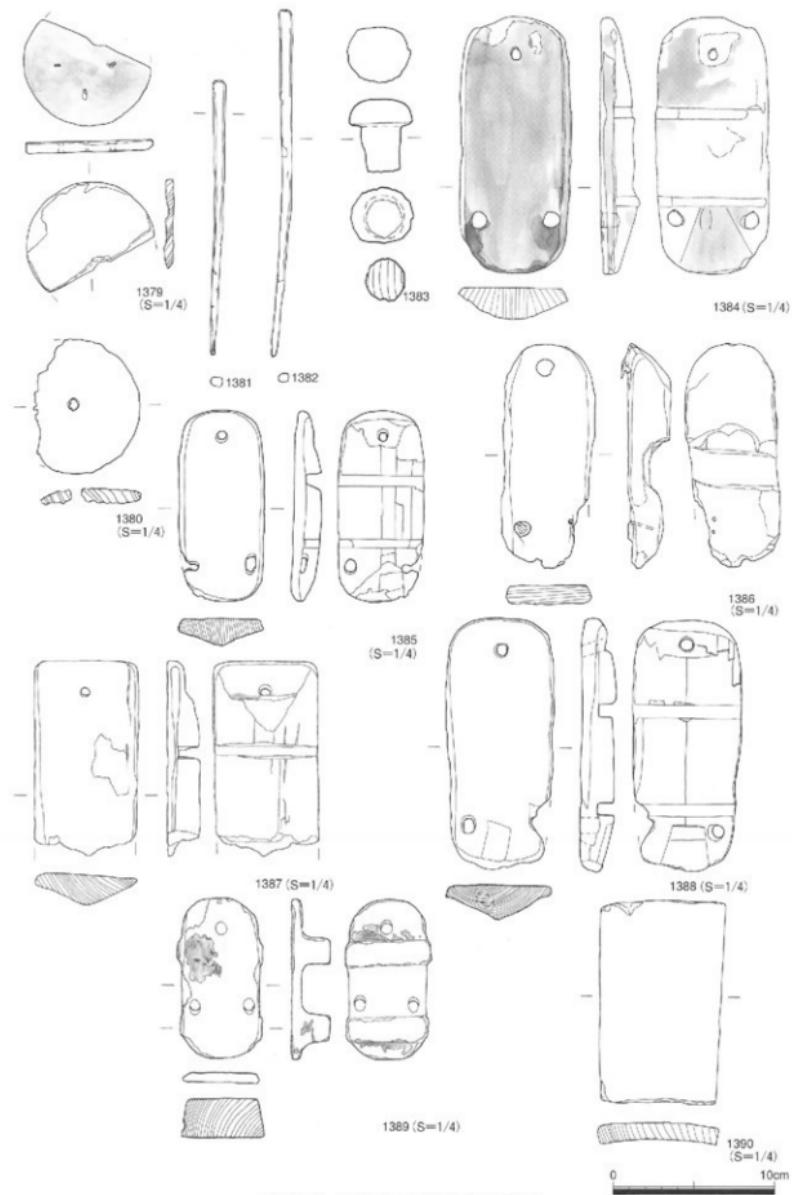
第362図 SK1027出土遺物実測図 (6)



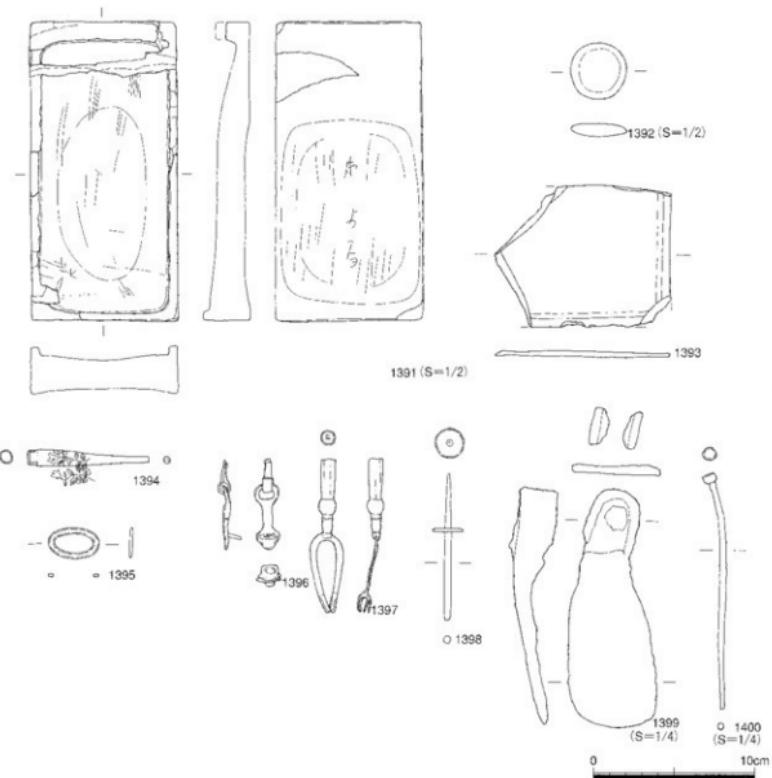
第363図 SK1027出土遺物実測図(7)



第364図 SK1027出土遺物実測図(8)



第365図 SK1027出土遺物実測図 (9)



第366図 SK1027出土遺物実測図(10)

1386は木製の草履下駄である。鼻緒の付け根に金属の留め金がついている。1387は木製の差し歎下駄である。1388・1389は木製品の下駄である。1388は差歎下駄である。1389は迷歎下駄である。表面には黒漆の下地に赤漆が重ね塗りされている。1390は木製品の橋の側板と思われる。1391は粘板岩製の硯である。底部には釘彫りにより文字が描かれている。1392は扁平な黒色の礫を使用した碁石である。1393は粘板岩製の石板である。1394は銅製の煙管の吸口である。表面には草花の彫刻が刻まれている。1395は楕円形の銅製輪状金具である。1396は銅製の留め具と思われる。2個の部品が輪状部同士で結ばれている。1397は用途不明の銅製品である。1398は銅製の燭台である。断面形状は円形を呈している。1399は鉄製の鋤である。1400は銅製の火箸である。

土坑 36 (SK1036) (第367図)

2区のB・C-11グリッドにまたがって検出された長軸を東西方向にとる長さ約1.8m、幅1mの大きさの不整梢円形の造構である。逆台形状に掘り込まれた深さ約0.7mの造構の埋土中には塊状の炭化物とともに、陶器や瓦片、木片などが含まれている。

出土遺物 (第368図)

1401は肥前系の染付磁器の猪口である。口縁部外面には雨降り文が描かれている。1402は肥前唐津の